The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人文学討議空間のデザインと創出
Author(s)	若手研究集合
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13217
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Osaka University
The 21st Century COE Program
Interface Humanities
Research Activities 2004-2006

人文学討議空間のデザインと創出

若手研究集合

Osaka University The 21st Century COE Program Interface Humanities Research Activities 2004-2006

大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006

文学研究科　人間科学研究科　言語文化研究科　コミュニケーションデザイン・センター

第2巻
人文学討議空間のデザインと創出
── 若手研究集合 ──

Designing of a Forum on the Humanities

目 次

009 はじめに

第I部 活動中の人文学

015 緒論
家高 洋

A. ディシプリンを問い直す

035 ユートピア小説と民族誌
人類学における抵抗論と反=抵抗論を越えて
田沼幸子

055 隴を得てまた蜀までも得てみたら
多史料時代のベトナム史研究展望
蓮田隆志

065 異質なものの関係を考える
ジャック・ランシエールの哲学から
家高 洋

B. テーマを深める

085 シャガールの作品はなぜ「あんなこと」になったのか?
芸術創造の源へのアプローチ
樋上千寿

105 人々をつくりあげるとはどういうことか
上田 達

117 ラシーヌ:「古典主義」と「バロック」のあいだに
藤本武司

C. フィールドに関わる

127 社会心理学における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉
アクション・リサーチにおける〈インターフェイス〉の設えをめぐって
加藤謙介

151 活動中の民主主義のために
文化人類学からの問いかけ
加藤敦典

167 *The Dilemma between "The Odd Man Out" and "The Useful Insider"*
Finding One's Place under the Sun
Stella Zhivkova

D. ディスカッションを伝える

185 〈問いの共有〉

199 ディスカッション・ドラフト検討会要旨

第II部　若手研究集合における討議空間デザイン

209 第1章　〈インターフェイスの人文学〉と討議空間デザイン論
森 宣雄

229 第2章　若手研究集合における「場づくり」と「ツール」の意味
プロセスの価値の自立にむけて
久保田美生

249 第3章　若手研究集合の活動の経緯
加藤謙介

265 第4章　討議空間デザインのツールとメソッド
DSマップの使い方と考え方
森 宣雄

281　第5章　DSマップ・テキスト・リマップの一例
井垣明子

289　〈資料編〉　若手研究集合活動年表

はじめに

本書は、大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉のコアとなる研究会組織、若手研究集合（略称「若手研」）の2004年度から2006年度にわたる活動の最終成果報告書である。

本報告書は2部構成になっている。第I部「活動中の人文学」では、2006年度の研究会活動から生まれた個別論文、およびそれらをつなぐ問題設定についての論稿を収めた。第II部は、2005年度以降継続的に検討・実施された、異分野共同研究の方法論「〈人文学の討議空間〉のデザイン」プロジェクトに関する論稿を収めた。また、若手研究集合の具体的な活動については、別添えの成果報告DVD『討議空間デザインのプロセス』（仮題）において、様々なメディアを活用しつつ、そのプロセスをまとめている。ここでは、本研究会の主たる活動成果であるこの3点の意義と関連性を、短く説明しておきたい。

〈若手研究集合〉の課題：学知のコミュニケーション不全

若手研は、本COEプログラムの6つの研究グループのいずれかに所属するか、あるいはどの研究グループにも属さない若手研究者（特任研究員、リサーチアシスタント、特任助手など）約20名が参加し、2004年4月に活動を開始した。同じ人文学の枠内にあるとはいえ、専門分化の進展とともに研究成果の共有や接合が困難になっている人文諸学（文学、歴史学、哲学、芸術学、人類学、言語学、社会学、心理学など）の研究者が、3年にわたり、継続的に密な討議を行なう場として若手研はスタートした。

本COEは、従来の学問分野別・地域別・時代別・言語別の分け方とは異なる、新たな人文学の知の連合体のあり方として、〈研究集合〉というネットワーク型コア組織の構想を立てた。この〈研究集合〉の構想を推進する場が、若手研究集合である。人文学をめぐる2つの〈インターフェイス〉、すなわち〈臨床的な知（臨床性）〉と〈横断的な知（横断性）〉

というキーワードのもと、さまざまな角度から現代社会の諸問題を掘り下げてきた6つのモデル研究グループの活動を背景に、若手研は、それらをひとつに出会わせる〈インターフェイスの人文学〉の実験場として設定された。ここにおいて、人文学（ないし6つの研究グループ）それ自体が障壁を越えたインターフェイスの状態に入ることになった。

しかし、その活動は決して順調なものではなかった。2004年4月に若手研が結成されて以降、メンバーは、身につけた専門性や研究テーマの上で共通点のなさゆえに、専門用語の違い、分析や論証スタイルの相違など、「ことばが通じない」事態にしばしば直面した。つまり、異分野の研究者が出会う若手研という場において、ディシプリン間の〈通じ合えなさ〉が問題として顕在化することとなったのである。

若手研では、これらの経験を踏まえ、この〈通じ合えなさ〉、学知のコミュニケーション不全の問題を克服するものとして、「共同研究」の場自体を問い直す討議を重ねた。そして、2005年から、若手研の活動の軸となる共同研究プロジェクトとして、「〈人文学討議空間〉のデザインと創出」を開始した。このプロジェクトでは、異なる価値観や来歴、専門知識をもった異分野の研究者同士が、敢えて従来の共同研究のような共通テーマを設定しない中で、出会いと触発をとげる創造的な話し合いの場をいかに作り出すか、その理論的構想が探求された。また、討議空間のデザインを実現するため、人文学者たちの議論の過程を共有し、討議の場を成立させるために、討議支援マップ等の様々な「ツール」が開発され、その使用方法が検討・洗練されていった。

〈問い〉の共有と創出に向けて：第I部「活動中の人文学」

本報告書第I部所収の論文は、「〈人文学の討議空間〉のデザイン」の方法論に則って、2006年度の研究会に提出・改稿された諸論文を収めている（2005年度分は『2005年度〈若手研究集合〉報告書』2006年3月に所収）。それは、メンバーそれぞれの専門研究に即して書かれた論文草稿を、多分野にまたがる若手研の討議にかけた後、各自の判断で討議の結果を反映させて完成させたものである。テーマは個々様々だが、人文学に通底する根底的な〈問い〉を精錬させ共有することを目指した、多角的な取り組みの集合体をなしている。その問題設定と課題については、第I部緒論の家高論文および末尾の論考を参照されたい。

これらの諸論稿には2つの価値があると考えている。第1に、こうした〈問い〉の積み重ねを通じて各ディシプリンに貢献すること。第2に、〈問い〉を「共有」しようとする意志

と行為そのものによって、単なる新領域の創出ではない、ディシプリンの壁を越えた新しい人文学のあり方を提示することである。それらは学知のコミュニケーション不全問題の克服にむけてしつらえたシステムのなかの実験成果でもあり、若手研究集合の活動成果である。

ではそのシステムとはどのようなものであるのかについて説明するのが、本報告書第Ⅱ部である。

〈人文学の討議空間〉のデザイン：第Ⅱ部「若手研究集合における討議空間デザイン」

「〈人文学の討議空間〉のデザイン」プロジェクトは、異なる専門を持つもの同士が、討議の場を作り出すための実際的な方法や、プロセスの共有を軸にした知の共同生産の理念などを考究するものである。その狙いとするところは、第1に創造的な出会いをもたらす場の創出であり、第2には学知のコミュニケーション不全の問題に向き合い、これを克服した学知の新しい生産である。本報告書では、後者を第Ⅰ部が扱い、前者については第Ⅱ部およびDVD版報告書が扱う構成となっている。

第Ⅱ部第1章の森論文は、ここでも触れている「〈人文学の討議空間〉のデザイン」プロジェクトの理論的な問題設定を詳述し、第2章久保田論文では、本プロジェクトで活用された様々な「ツール」の開発過程とその意義について論じている。また、2004年から2006年に至る3年間の若手研の活動の経緯の詳細については、第3章の加藤謙介論文にまとめられている。そして〈討議空間デザイン〉という新しいコンセプトとその実践方法についての平易な解説として、第4章の森論文があり、第Ⅱ部第5章の井垣論文では、〈討議空間デザイン〉の実例が紹介されている。

研究の「プロセス」の共有：DVD版報告書

DVD版報告書では、上記の第1の課題、すなわち「創造的な出会いをもたらす場の創出」に関わって、専門家・非専門家の多領域にまたがる学的討議空間の場づくりがどのように進んだか、そのプロセスが、マルチメディアを駆使した作品としてまとめられるとともに、記録として紹介されている。そこには単なる活動経過報告にとどまらない意味がこめられている。その問題設定について簡単に触れておきたい。

一般に、これまで学問的研究は、専門的な研究手法を精緻化させるなかで発展をとげてきた。研究のプロセスは研究者個人ないし個別の専門分野内に閉じてきた。だが、現在は、そうして発展をとげた学知を再度専門の外に開いて自己を問い直すことが求められている。そのためには、研究の「成果」ではなく、研究の「プロセス」を専門の外に開き共有し、問題の立て方や論じ方を立て直すことのできる「仕掛け」が必要となる。DVD版報告書では、若手研究集合の活動の経緯を作品化することを通して、〈研究の「プロセス」の共有〉という問題に応えようとしている。

若手研究集合は、前述のとおり人文諸学の若手研究者の集合体として始動したが、2005年からは、本COEメディアラボ・スタッフがメンバーに加入し、多様なメディアツールの機能を活かした場づくりのための協働作業に取り組んだ。その結果、理念的に設定された創造的な討議のあり方を現実化する独自なコミュニケーション・ツールや方法論の開発が進行し、異分野にまたがる話し合いをメンバー各自が共有する密度を飛躍的に高めることができた。また若手研が3年にわたり隔週で定例研究会を開くなかで、どのように理論が設定され場づくりが進み変化が起こったか、音声や映像なども含めて多角的に記録することが可能になった。

ある専門の立場からの結論をまとめるばかりでなく、むしろ結論が固められるまでの多方面からの問題の出し合いや話し合いのプロセス（およびその共有過程）を重視し、場と学知の作られ方の経緯を検証することは、学知のコミュニケーション不全を克服する上で重要な意味を持つ。そのプロセスの記録と共有、さらにDVD作品による提示が可能になったのは、メディアラボとのコラボレーションを実現した若手研、および、本COE独自の特筆すべき成果だと言えよう。

以上のように、若手研究集合は、その成果として大きく3点を示すことができた。本報告書の第I部・第II部、およびDVD版報告書は、相互に密接に連関しあっているが、それぞれ独立した論考・作品として見ることも可能である。これらの成果を、個別の学術論文として、また人文学の新たなあり方を模索する討議空間の実験成果として、読者諸賢の御批評を仰ぎたいと思う。

「インターフェイスの人文学」若手研究集合

第I部
活動中の人文学

緒論

活動中の人文学

家高　洋

1.　〈活動〉としての〈人文学〉

2.　2006年度の〈若手研究集合〉の活動から ～DD検討会を中心に

2.1　DD検討会の実施概要

2.2　各検討会のDDのタイトル

2.3　DD検討会の討議内容

3.　第Ⅰ部の内容紹介

3.1　個別論文のセクションについて

3.2　A：ディシプリンを問い直す

3.3　B：テーマを深める

3.4　C：フィールドに関わる

3.5　D：ディスカッションを伝える

本緒論は、以下に続く9つの個別論文と〈問いの共有〉のセッションが成立した2006年度の一連の「ディスカッションのためのドラフト検討会（通称DD検討会）」の活動の概要と意義について述べるものである。

まず、〈人文学〉の概念を〈活動〉における〈態度〉として捉え直すことによって、〈若手研究集合〉を考察するための理論的枠組みを示す（第1節）。続いて2006年度のDD検討会などの活動内容を報告し（第2節）、最後に第Ⅰ部の内容を紹介する（第3節）。

1.〈活動〉としての〈人文学〉

本節では、〈人文学〉についての代表的な捉え方を挙げてから、〈活動〉におけるある種の〈態度〉としての〈人文学〉の規定を示す。これは、次節での〈若手研究集合〉の具体的な活動内容を考察するための一般的な枠組みを示すためである。では、まず〈人文学〉についての代表的な捉え方を挙げてみよう。

〈人文学〉は、そのテーマや領域によって規定されるのが通例であろう。たとえば、それは、「人間に最も直接的に関係がある分野」であり、「最も根本的な人間的な知の方法についての研究であり、日常生活を送るうえだけでなく、人間が生きるうえで最も役に立つものである」と規定されている[*1]。また「社会の内的な活動」と「文化と意味との創造」が〈人文学〉のテーマであるとも指摘されている（Gibbons et al., 1994, 105）。換言すれば、「人間と文化」が〈人文学〉のテーマであると言えよう。

〈人文学〉をこのようにテーマから規定することは、自然科学などの他学科との違いを示すためには役立つであろうが、しかし、包括的すぎることも否定できない。事実、人文学者や社会科学者が集まった〈若手研究集合〉の初年度で判明したことは、〈人文学〉の共通性よりも、各々の学科の方法論的・概念的前提、さらには言葉遣いや作法の違いであった。それは「通じ合わなさ」として現れ、メンバーに経験されたのである。

それゆえに、〈人文学〉について、テーマやその研究領域による規定とは別の方向を探らなければならないであろう。この点において、本COEのリーダー鷲田の主張は一つの参考になる。鷲田は、〈人文学〉を〈教養〉と言い換えて、以下のように述べている（鷲田、2003, 3）。

> ［中略］人文学とは精密で深い教養のことなのです。人文・社会科学者のみならず自然科学者すらもが、その知的いとなみの底に湛えていなければならない教養のことです。別の言葉でいえば、過去の人びと、他の地域の人びとのほうから自分をみることのできる、そういう感受性を持った知のことなのです。

1——— これは、カーナン（2001, 3）からの引用である。

ここで言われている〈教養〉とは、(大学が社会からしばしば要求されるような)「全人的教育」を行うための「幅広い基礎知識」ではないだろう[*2]。ここで鷲田は、自分自身の営みに対する他からの批判に常に開こうとする〈態度〉を指摘している。これは「自己批評」(Said, 2004, 22)[*3]、あるいは、より広く「反省性(reflexivity)」(Gibbons et al., 1994, ch. 4)と言い換えることができるであろう。〈人文学〉を人間の根本的な〈態度〉や〈姿勢〉と考えていく1つの方向がここに示されている。

また、〈態度〉としての〈教養〉について、内田はやや別のかたちで以下のように言い表している(内田、2005, 9)。

> 教養は情報ではない。
> 教養とはかたちのある情報単位の集積のことではなく、カテゴリーもクラスも重要度もまったく異にする情報単位のあいだの関係性を発見する力である。
> 雑学は「すでに知っていること」を取り出すことしかできない。教養とは「まだ知らないこと」へフライングする能力のことである[強調は原著者による]。

ここで言われている「カテゴリーもクラスも重要度もまったく異にする情報単位のあいだの関係性を発見する」ことは、たとえば、様々な専門分野を横断し接続することや、さらに、学知と、学知以外の知や意見、情動などを横断し接続することを示しているであろう。そして、これは、〈人文学〉の基本的は営みを意味していると考えられる。

というのは、「人間と文化」をテーマとする〈人文学〉は一義的な「解答」や「答え」を求める学問とは異なる側面を持っており、その対象やテーマの多面性を見据えつつ、その多面性に対して多様なアプローチや工夫、試みを行い、つなげていくなかにその営みが存していると考えられるからだ。

このように諸学科や日常的な知を横断し接続していく営みをギボンズらは「学科横断性

2——このような教養像としては、たとえば奥野(2006)の第5章を参照。

3——サイードは、自己批評が欠如した「伝統的な人文学」の特徴を次のように挙げ、批判している。「大学の人文学は、それまでずっと非政治的で浮世離れしており、[中略]過去の徳や、正典の不可侵性、『昔からのやり方』の至高の価値を断固として讃えていた」(Said, 2004, 13)。

(transdisciplinarity)」と呼び[*4]、古来からの人文学の根本的な特徴の1つとしている(Gibbons et al., 1994, ch. 4)。また、このように横断し接続していくことにおいては、様々な異分野の人々との討議や協働、相互理解そして時には誤解や論争があり、これも学科横断性に含まれる大きな側面であることも忘れてはならないであろう。

以上のように内田や鷲田にとって〈教養〉は、ある種の「知識」であるというよりは、知識どうしの間、人どうしの間、人とモノとの間の関わりをつくる〈態度〉として考えていることで共通している。このような〈態度〉としての〈教養=人文学〉は、〈人文学〉のテーマや領域自身が本質的に要求していることであると我々は考える。ギボンズらに倣って、我々は、鷲田の主張を「反省性」、内田の主張を「学科横断性」として、〈人文学〉の基本的な2つの〈態度〉であるとみなしておきたい[*5]。

次に節を変えて、2006年度の研究会の活動の概要を報告しよう。その際に上記の〈人文学〉の2つの〈態度〉の具体的な内実と関係の一端が明らかにされるであろう[*6]。

4——もともとギボンズらは、1980年代以降の理系における産官学連携の知識生産の新たな様態を捉えるために「学科横断性」という概念を提示していた。この文脈では学界と行政、産業界、ならびに一般市民の間の協働がテーマになっている。なお「学科横断性」は、いわゆる「学際性(interdisciplinarity)」とは区別されている。「学際性」とは、ギボンズらによれば、諸学の間での統一的な方法や概念的把握を目指すものである。他方、デリダも「学際性」に対して批判しているが、それは、各分野が「棲み分けて」おり実質的な交渉がないことに存している(Derrida, 1990, 569)。ところで、ギボンズらもデリダもテーマに即した学科横断的な活動を念頭において一定の評価を与えている。他方、〈若手研究集合〉の取り組みの1つの特徴は、テーマを立てずに「学科横断性」を行おうとしたことにある。

5——この二つの規定は以下のように整理される。「反省性」には、「自己省察」という伝統的な意味と、鷲田が指摘しているような「相互的な反省性」の二つの意味がある。他方「学科横断性」には、内田が主張するような「異質な諸情報を横断し、接続する」ことや、「あるテーマに関して諸学科を横断して究明する」こと、そして「他の諸学科のメンバーと協働すること」が含まれている。また、これらの活動すべてが「人文学的」とも言われるように、非常に多義的である。

6——これら2つの人文学の規定が〈若手研究集合〉の活動のなかでどのように捉え直され、変化していくのかということが示されることによって、〈若手研究集合〉に関する学的意義が証示されると考えられるが、このことは本緒論だけでなされることではない。本報告書の各々の論文が各々の仕方でこれを行い、表現している。

2. 2006年度の〈若手研究集合〉の活動から ～DD検討会を中心に

2.1 DD検討会の実施概要

〈若手研究集合〉の2006年度の活動である「DD検討会」は、2004年度の「自己紹介研究発表」、2005年度の「DP（ディスカッション・ペーパー）検討会」に続く3回目のペーパー検討会である。第1回目の「自己紹介研究発表」は諸般の事情でメンバーの全員が発表できなかったので、2006年度のDD検討会では、約半数のメンバーにとって2回目の発表であった。以下では、2005年度のDP検討会と、2006年度のDD検討会の共通点と違いを述べて、DD検討会の概要を説明する。

さて、2005年度のDP検討会と2006年度のDD検討会の共通点として挙げられることは、研究会の進め方である。この2つのペーパー検討会は、いずれも「検討会の1週間ほど前に、発表者はメーリングリストにペーパーを投稿する」「このペーパーに対して、他のメンバーは事前にコメントをメーリングリストに投稿する」という進め方に関して一致していた。また、2005年度の「〈人文学討議空間〉のデザイン」に関するプロジェクトより、実際にメンバー間で議論をする場面では、「討議支援マップ」など様々な「ツール」を活用しつつ、リアルタイムでのディスカッション内容の投影などの試みが行われた[*7]。これは、2006年度のDD検討会でも引き続き行われた。加えて、検討会でのディスカッションを経てペーパーを改稿し、論文として報告書に掲載するということも、2005年度のDP検討会と2006年度のDD検討会で共通していた。

次に2つの検討会の違いを述べよう。2005年度のDP検討会では、各ペーパーのテーマとして、本COEプログラムの2つのキーコンセプトである「臨床性」「横断性」のいずれかに関連する事柄が設定された[*8]。これに対して、2006年度のDD検討会では、テーマについて特に制限はなされなかった。というのは、研究会も3年目になり、この研究会で共有されうるような内容や、共有されにくい内容（あまりに専門的すぎる内容など）につい

7――― 様々な「ツール」の詳細については第Ⅱ部第2章久保田論文、第4章森論文を参照。

8――― 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」2005年度〈若手研究集合〉報告書（2006）第一部を参照。

て（ある程度の）共通の理解が生じているとDD検討会の企画者の一人（本稿の筆者）が考えたからである。

その代わりに2006年度の検討会では、DDや個別論文を作成する際のルールに関しては決められた。個別論文の作成に関しては、まず、その論文の冒頭に、「なぜその論文を書くのか」ということを、専門学科以外の人たちにもわかるように説明することが求められた。さらに、個別論文の末尾に、〈問い〉を載せるということも決められた[*9]。この〈問い〉の中身に関しては、具体的に詳細な規定はなされなかった。例えば、論文を書いて課題として生じたことでもよいし、その論文を書くときの基本的な動機でもよい、とされた。しかし、その〈問い〉が、研究員全員に〈共有される〉ことが求められた[*10]。そして、DD検討会の終了後、これらの〈共有される問い〉が持ち寄られて、〈問いの共有〉というセッションを行うことも決められた[*11]。

以上が、2006年度のDD検討会を行うために予め決定された事項である。DD検討会は、6月から8月まで計5回行われ、9本のペーパーが検討された。そのタイトルを次項で紹介しよう。

2.2 各検討会のDDのタイトル

上述のように、DD検討会では共通テーマが設定されなかったために、各ペーパーのテーマはかなり多様になった。以下、検討会で議論されたDDのタイトルを、著者名・著者の専門とともに列挙する。なお、DDと本報告書所収の個別論文とのタイトルは、著者によって変更されている場合がある。また、各回の主な討議の内容に関しては、その要旨（Dセクション所収）を参照されたい。

9——〈問い〉をそれぞれの執筆者が個別論文に掲載する形式に関しては、基本的に限定しなかった。というのは、論文の内容や構成だけでなく、〈問い〉の性格についてもそれぞれの執筆者によって異なることが予想されたからである。

10——この〈問い〉が研究会の討議において果たした学科横断的な役割に関しては、本緒論3.5の後半部を参照。

11——その概要については、本緒論3.5の前半部を参照。

• 第1回DD検討会

「ユートピア小説と民族誌」

田沼幸子（文化人類学）

• 第2回DD検討会

「フッサール、デリダとランシエール」

家高洋（哲学）

「シャガールの作品はなぜ『あんなこと』になったのか？ 芸術創造の源へのアプローチ」

樋上千寿（美術史学）

• 第3回DD検討会

「隴を得てまた蜀までも得てみたら —多史料時代のベトナム史研究展望—」

蓮田隆志（歴史学）

「人々をつくりあげるとはどういうことか」

上田達（文化人類学）

• 第4回DD検討会

「活動中の民主主義のために～For democracy in action～ 文化人類学からの問いかけ」

加藤敦典（文化人類学）

「社会心理学における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉

—アクション・リサーチにおける〈インターフェイス〉の設えをめぐって」

加藤謙介（社会心理学）

• 第5回DD検討会

The Dilemma between “The Odd Man Out” or “The Useful Insider”

Finding One’s Place under the Sun

Stella Zhivkova（音楽学）

「ラシーヌ『ブリタニキュス』の終結部に関する一考察

—ヴェスタ聖女ジュニーをめぐって」

藤本武司（文学）

以上のように、各DD間でテーマの関連性はほとんど見出されない。発表によっては、一般にはあまり知られていない専門的な内容のものもあった。その場合は、発表者によってその内容についてかなり時間をかけて説明がなされ、その内容を確認する質疑応答が長時間にわたることもあった。

このようなことは、異分野の研究者が集まる研究会ではしばしば起こることである。だが、上記の5回のDD検討会では、そのペーパーの内容解説だけではなく、毎回活発な討議も行われた。それは、DDで取り上げられている個別のテーマとは別にメンバーに共有されているモティーフがあったからである。

2.3 DD検討会の討議内容

2006年度のDD検討会、そして2005年度のDP検討会において、研究会のメンバーに共有されていた基本モティーフは、もっとも広い意味での〈研究〉であったと言える。この〈研究〉には、テーマの設定、調査手法、発表形態など、アカデミックな活動に関わる全てが含まれている。

研究会のほとんどのメンバーがいわゆる人文学の研究者である以上、「みずからの研究や調査、方法についての疑問」や「研究面での冒険」、「他のメンバーと討議して共有したい研究の方法や内容」など、様々な側面で〈研究〉が、研究会でのコミュニケーションの基本的なベースとなっていた。〈研究〉という観点から、DD検討会に出されたペーパーの主な意図や方向性を整理すれば、以下のようになるだろう。

- 1980年代以降の学科内での理論上の閉塞的動向を踏まえた上で、何らかの仕方で対処していこうとする試み
- 学科内の周縁的なテーマで研究を続けていく試みと工夫
- テーマ自身の多面性に従って諸学科を横断していこうとする試みと工夫
- 学科外の人にはほとんど知られていない内容や面白さを伝える試みと工夫
- フィールドでの様々な思いと工夫、今後の展望

DD検討会においては、取り上げられているテーマ自体にはあまり関心が持たれなかったとしても、ドラフトを作成した執筆者の試みや工夫が明らかになったとき、しばしば場

が開かれ討議が共有されやすくなっていた。さらに、学科内では論文として提出しにくい内容・アプローチ・方向性を備えたドラフトが討議され、論文として作成されたことも、DD検討会を含む〈若手研究集合〉での成果の1つである[*12]。

ところで、上記のドラフトでの主な意図や方向性は、専門学科内でも議論することができる。しかし、異分野の研究者たちの集団である〈若手研究集合〉での討議の俎上に載る場合には、それぞれの専門学科の特殊なコンテクストが消去されやすく、より直接に〈人文学〉の基本的な〈問い〉や〈試み〉に直結するようなかたちで表明・表現されることが多かったと筆者は考えている。〈若手研究集合〉における「反省性」の一つは、このような事柄において現れている[*13]。

この「反省性」においては、時として各ディシプリンの専門性自身が問われることにも至る。たとえば、ペーパーが他学科のメンバーに示されるなかで、その学科内では生じないような「反省性」が起こった。つまり、日頃は自明視されている学的な方法や概念、(論文の書き方などの)作法や言葉づかい等が問い直された。だがそれは、専門性に対する批判や否定に必ずしも直結しなかったのである。

前節で我々は、人文学の特徴として「学科横断性」を挙げた。それは、内田の意見に基づいたもので、「横断と接続」が中心的な契機になっていた。2006年度の研究会での各メンバーの主な関心は、いかにして様々な討議を接続していくのかということに存していたと本稿の筆者は捉えている。それゆえに、批判が行われたとしても、それは討議の接続と展開という観点から行われるのであって、批判自身が目的になることは少なかったと思われる[*14]。

12——こうしたDDの内容、及びそれをめぐるディスカッションの方向性は、〈人文学〉の現況を反映しているとも言えるだろう。〈人文学〉における専門の細分化とコミュニケーション不足、過剰な自己批判による立論の論理的破綻、勃興する新しいテーマと方法論、プレゼンテーションにおける実験、社会的な問題に対する研究者のスタンスの取り方などが、それぞれのDD、そして、研究会での議論を経て改稿された個別論文で取り上げられている。

13——〈若手研究集合〉におけるもう一つの「反省性」は、討議の可視性と関わっていると考えられる。このことに関しては、D.〈問いの共有〉第4節で触れる。

14——2006年度のあるドラフトに対する批判は、「専門的過ぎる」ということであった。これは、接続の仕方が困難であると言い換えることができるであろう。D.の各回要旨参照。それから、研究会全体と経緯に関しては第II部第3章の加藤論文を参照。

このようにして「反省性」と「学科横断性」が結びついたことが、〈若手研究集合〉の活動の大きな特徴である。このことは、専門学科の内部からではなく、〈人文学〉を内側から変えていくモメントであるとみなすことができるだろう[*15]。

これは、一言で言えば、〈協働（collaboration）〉と呼ぶことができる。〈若手研究集合〉での〈協働〉、そして今後の〈協働〉への志向が、第Ⅰ部「活動中の人文学」の9本の個別論文と〈問いの共有〉を貫いている。第Ⅰ部のタイトルの「活動中の人文学（The Humanities in action）」とは、このような〈協働〉の志向を表現しているのである。

この〈協働性〉は、9本の個別論文では各論文の構成や呈示の仕方において示されている。他方、〈問いの共有〉では、研究会の〈協働〉の可視化への一つの試みが示されている。しかし、これは、〈若手研究集合〉の到達点というよりは、新たな研究活動への端緒である、と我々は考えている。

ところで、本COEプログラムの2つの基本コンセプトである「横断性」「臨床性」では、テーマに即することによって学科を横断していくという方向性（「学科横断性」）が表明されていた（鷲田、2003）。DD検討会での多くの討議や個人論文では、個別の研究テーマだけではなく、専門学科のあり方についての批判的検討（「反省性」）を重ねることによって、専門学科自身を開いていく方向性が示されている。

この2つの方向性の配分は、各個別論文によって様々であり、そこにそれぞれの執筆者のアクチュアルな問題意識と個性が反映されている。第Ⅰ部のタイトル「活動中の人文学」には、それぞれの執筆者だけでなく、執筆者を取り巻く背景におけるヴィヴィッドな問題性をそれぞれの個別論文が扱っていることも含意されている。

次にこれらの個別論文（A・B・Cセクション）と〈問いの共有〉のセッション（Dセクション）について紹介しよう。

15——〈人文学〉を内側から変えていくためには、「柔軟な更新可能性に開かれた」専門性が必要であると水島は主張するが（水島、2006）、〈若手研究集合〉の活動はこの1つの具体化であるとみなすことができるだろう。なお、水島の意見は社会学者の本田の主張を参考にしている（本田、2005）

3. 第Ⅰ部の内容紹介

3.1 個別論文のセクションについて

個別論文の内容に関しては、各々の論文の冒頭に執筆者による要約が掲載されている。ここでは、9本の個別論論文を3本ずつ3つのセクションに分け、そのセクションのなかでそれぞれがどのような特徴を示しているのかを記していきたい。

前節でも述べたように、どの論文もそれぞれ独立して執筆されたものであり、お互いの関連性は予め設定されていなかった。すべてのDD検討会が終わった後、3つのセクションに分けることが本稿の筆者によって提案され、研究会で承認が得られた。

このセクションの区分は、それぞれの論文の類似や近さよりもむしろ、それらの違いを標定するために行われている〈配置（configuration）〉である。この〈配置〉を介して、〈人文学〉に内在している「拡がり」が示されることが意図されている。

3.2 A：ディシプリンを問い直す

このセクションには、田沼論文（「ユートピア小説と民族誌」：文化人類学）、蓮田論文（「隴を得てまた蜀までも得てみたら」：歴史学）、家高論文（「異質なものの関係を考える」：哲学）が含まれている。これらの論文の中では、田沼論文と家高論文の問題設定が類似している。この2つの論文は、1980年代以降の過剰な反省性（reflexivity）による学科内での危機や論争にどのように対処するのか、ということが念頭に置かれているのだ。

田沼論文では、文化人類学のなかでの「日常抵抗論」vs.「反抵抗論」という論争が扱われている。この論争では、フィールドに関わる際の人類学者のポジショナリティが問われているのである。この場合、研究者に対して実際にフィールドに介入するか否かという二者択一が迫られることが多いだろう。ところで田沼は、この論争の主導者たちの元来の問題意識や根本的な志向を発掘しようとする。そこで明らかになるのは、1960年代以降のマルクス主義的な「解放運動」的志向である。田沼は、この志向を評価あるいは裁断しようとはしない。田沼の意図は、「解放運動」的志向を、西欧近代以降のユートピア小説の系譜に置き直すことによって、脱コンテクスト化することにある。このように「解放運動」

が捉え直される中で、民族誌を書くということの人類学的な実践の意義も脱コンテクスト化され、上述の「介入か否か」という単純な二者択一を避けることが可能であると田沼は主張する。

このように田沼は論争のコンテクストの復元と脱コンテクスト化によって議論を進めていくのに対し、家高は、テクストに内在する概念構造自身を解明することによって、学科内の課題に対処しようとする。家高にとっての課題は、(1980年代以降の脱構築的運動に代表される) 過剰で際限のない自己反省性への対処である。この過剰な反省性の結果、すべての事象は脱構築されうるか、または「絶対的他者」として原理的に言表されえないものになるかのどちらかになった。一方、フランスの現代哲学者のジャック・ランシエールは独自の分析と解明を行うことで、このような思想的動向とは別の可能性を開こうとしている。ランシエールは「政治」における根本的な「ディセンサス (コンセンサスの反意語)」の事態を詳細に分析する。ランシエールは、ディセンサスの基本的な契機 (ディセンサスの出来事、既存の社会秩序、平等) の間での異質な関係性に着目することによって、過剰な自己批判に陥らない思想的立場を築こうとしている。このランシエールの試みを再構成しながら、家高はその思想の意義と可能性を検討している。

さて、このセクションの第2論文の筆者蓮田の専門は、ベトナム史である。日本のベトナム史学は1990年代半ばまでは、少ない史料に対して文献学的な緻密な実証的研究を行い業績をあげてきた。だが、90年代半ば以降、開放政策が進むにつれ、予想もされなかった史料が続出し、ベトナム史研究へのアプローチが一変することになる。一つの方向性は、史料への密着度を少なくし、より大きな歴史的枠組みを探求する英語圏の研究者のスタンスである。これに対し、(日本の歴史学界の特徴である) 史料に密着する研究方向も依然として意義があると蓮田は主張する。またベトナム国内での史料の批判的研究は文献学の仕事であり、歴史学から切り離される傾向がある。このような様々な現状を踏まえ、蓮田は、それぞれの地域での研究の進め方をお互いに認め合い協働し合うことを提案する。

以上のように、人文学の「ディシプリンを問い直す」場合でも、それぞれの学科、そしてそれぞれの研究者によってかなり方向性とアプローチの仕方が異なっている。この違い自身のなかに、〈人文学〉の多様な反省性 (reflexivity) の一端が示されていると言えよう。

3.3 B：テーマを深める

このセクションには、樋上論文（「シャガールの作品はなぜ『あんなこと』になったのか？」：美術史学）、上田論文（「人々をつくりあげるとはどういうことか」：文化人類学）、藤本論文（「ラシーヌ：『古典主義』と『バロック』のあいだに」：文学）が含まれている。これらの論文のなかでは、樋上論文と藤本論文が、作品あるいは作者に対してアプローチするという点で通底した性格を持っている。

樋上論文のテーマは、シャガールの作品の理解である。その創作源に迫るために、樋上は、西洋美術史学のアプローチを踏まえつつ、そこに留まっていない。というのは、西洋美術史学はキリスト教美術研究に根本的な影響を受けているので、ユダヤ人画家シャガールの作品の解明には十分に適応できない場合があるからだ。樋上は、シャガールの作品の様々なモティーフのなかにユダヤ民族の歴史と現状を見出す。それゆえに、ユダヤ民族のディアスポラの歴史、精神的思想史、さらにシャガールと同時代（1930年代）のユダヤ民族の状況、そして、シャガールが生まれ育った東欧ユダヤ人の日常生活の再構成が行われ、シャガールの作品のモティーフとの関連が示される。シャガールの作品自身がこのような学科横断的な理解を要請するのである。だが、作品の理解は、文字を介した理解だけには限られないと樋上は主張する。樋上自身が企画したクレズマー音楽（東欧ユダヤの伝統的民族音楽）のレクチャー・コンサートがこの論文の最後に紹介されているが、音楽など視覚以外の方法を用いることで、シャガールの作品を広く共有していくアプローチを樋上は提案している。

藤本論文は、17世紀フランス古典主義詩人ラシーヌの研究を扱っている。この論文では、20世紀においてラシーヌ研究、ひいては17世紀古典主義文学研究がこうむった大きな変革を示しつつ、もともとは国家の文化統制政策のもとに成立した古典主義の概念と、この概念に当てはまらないそれ以前およびその周縁の文学に対して20世紀にはじめて適用されたバロックという概念を対比し、前者によって抑圧されてきた後者の文学現象の再発見を評価する。さらに、バロックの基本要素、つまり規範を超えて飛翔する想像力、調和を欠いた不均衡、変転してやまぬ流動性と未解決性といった観点から、逆に「古典主義」詩人ラシーヌを問い直す可能性を提案する。これらバロックを特徴づける概念は、近代崩壊後の現在においていっそうリアリティを持つだけに、その研究は、単に過去の一時期における文学潮流の研究にとどまらず、現代における文学研究の方法論そのものにも示唆を

与えることが期待される。

他方、上田論文では、マレーシアで実施されている「ルクン・トゥタンガ」という住民自治組織が取り上げられている。この論文では、「ルクン・トゥタンガ」の歴史的変遷ならびにフィールド調査の結果が示されているが、この論文での「テーマ」は「ルクン・トゥタンガ」だけではない。マレーシア政府は、この「ルクン・トゥタンガ」に「マレーシア国民」の創出のための機能を負わせようとしている。上田の論文のタイトル（「人々をつくりあげるとはどういうことか」）からも想定されるように、「共同体」や「国民」という歴史的・社会的カテゴリーの生成とそのリアリティも上田の「テーマ」なのである。文化人類学でしばしば指摘されるように「国民」などのカテゴリーは、近代国民国家によって創出されている場合が多い。だが、このカテゴリーの意味や機能は、それが適応される人々（「国民」）によって組み換えられることもあるのだ。「国民」などの歴史的・社会的なカテゴリーの概念と、「ルクン・トゥタンガ」という事象とのあいだの往還自身が上田論文での「テーマ」であるとも言いうるであろう。

このように「テーマ」に関しても三者三様である。樋上論文では、「テーマ」に即することで諸学科を横断し、「テーマ」の理解のためのプレゼンテーションの方法の実験を提案する。藤本論文は、「テーマ」そのものが、現代における研究の方法論へと接続される。上田論文での「テーマ」は事象だけでなく概念も含まれている。これらの違いも、〈人文学〉が扱っている事柄自身の多様性を示しているであろう。

3.4 C：フィールドに関わる

このセクションには、加藤謙介論文（「社会心理学における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉」：社会心理学）と、加藤敦典論文（「活動中の民主主義のために」：文化人類学）、Zhivkova論文（The Dilemma between "The Odd Man Out" or "The Useful Insider"：音楽学）が含まれている。加藤謙介論文とZhivkova論文は、フィールド研究での方法論的問題点の指摘と共に、自らのフィールドでの体験を呈示していることにおいて共通している。

加藤謙介論文では、まず社会心理学における「アクション・リサーチ」の動向と現状が述べられ、そして「アクション・リサーチ」における〈インターフェイス〉の設え方として、「概念」「手法」「道具」を挙げられ説明されている。加藤謙介において〈インターフェイス〉の設えが問題になっているのは、研究者と実践者との〈協働〉が重視されているため

であり、〈インターフェイス〉の設えこそが、その〈協働〉を促進していくものであるからだ。続いて加藤謙介自身の三つのフィールド調査が報告される（老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグセラピー、高齢者施設におけるロボット介在活動、横浜市西区における「地域猫」活動）。これらの報告が本論文でのハイライトであろう。その中でのポイントは、フィールドに接したときの加藤自身の〈インターフェイス〉の設えについての工夫とその意義の考察である。最後に、加藤謙介のスタンスが表明される。つまり、研究者でありつつも、当事者（あるいは当事者グループ）に関わるなかで、「当事者になる」ことが志向される。このスタンスにおいて、『現場』に関わる際の〈インターフェイス〉の設えが重要になってくるのだ。

Zhivkova論文でも、研究者がフィールドに関わる際の方法論的な問題設定が行われる。Zhivkovaの一つの問題意識は、論文のタイトルに示されているように、フィールドにおける研究者のポジションであった（The Dilemma between “The Odd Man Out” or “The Useful Insider”）。Zhivkovaは加藤謙介と同じく、研究者もフィールドで積極的に関与しつつ研究をすることが可能であるし、そうすべきである、と主張する。それは、近年のフィールド研究の動向を反映しているだけでなく、Zhivkova自身のフィールド調査に基づいている。Zhivkovaの調査の対象はブルガリアのある民族音楽祭であり、そこに日本の伝統音楽と舞踊の団体が参加した。Zhivkovaは、この日本の団体をサポートするスタッフとしても音楽祭に参加しており、そのために、いわば内側からの参与観察が可能になったのである。Zhivkovaは、論文の終わりに、自ら自身による伝統音楽のイベントの企画についても述べている。このことは、研究者の活動が〈研究〉を超えて拡がっていることを示し、その学問的な意義を我々に問いかけている。

ところで、本セクションの第2論文の執筆者加藤敦典の専攻は文化人類学であるが、加藤敦典は、みずからのフィールド調査については語っていない。むしろ、文化人類学者がフィールドに関わるときの基本的な問題意識や前提を問いかけている。加藤敦典のテーマは文化人類学にとっての民主主義である。民主主義をめぐる近年の文化人類学の〈問い〉のなかに、現地の実践に寄り添って〈解決〉を目指す傾向があると加藤敦典は指摘する。しかし、民主主義が問題の解決に資するような〈規範〉的な存在に限られず、様々な地域での「民主主義の浸透」が逆に民主主義自身のあり方を多様化してきたことは、1990年代以降文化人類学が明らかにしてきたことなのである。この多様性や流動性のなかに、民主主義の「物議をかもすような、それゆえ創造性を誘発するような可能性／危険性」が存し

ていると加藤敦典は主張する。そして、民主主義のこのような動態を捉えるために、加藤敦典は、人文学的な知の技巧（翻訳、解釈、演劇批評）を参照にしつつ、民主主義という〈問い〉を問い続けることの重要性を指摘する。そして最後に、〈問い〉としての民主主義と、〈解決〉としての民主主義の立場との架橋を新たな〈問い〉として加藤敦典は提起する。

加藤謙介とZhivkovaは、フィールドに向かう態度としては共通したものがあるが、しかし、社会心理学と音楽学、そして研究者としてのスタンスの違いが明らかになっている。他方、加藤敦典は、フィールドに対する規範的（あるいは社会工学的）態度と、人文学的な態度との根本的な違いを示しながら、〈問い〉を問い続けることには人文学的な技法やアプローチが不可欠であることを主張している。

以上、9本の個別論文は、テーマやアプローチ、方法、論文自身の構成など多様な試行を行っている。その成否や意義について読者諸賢の御批判を仰ぎたい[*16]。

3.5 D：ディスカッションを伝える

本セクションには、2006年9月と10月に2回行われた〈問いの共有〉のセッションとDD検討会の各回要旨が含まれている。以下、〈問いの共有〉のセッションの概略とその意義について説明する。

前述のように（2.1）、〈若手研究集合〉では、2006年度の報告書の個別論文の末尾に〈問い〉が載せられることは決まったが、DD検討会終了後にそれぞれの〈問い〉自身をテーマにした〈問いの共有〉と題されたセッションが、2回（9月21日・10月5日）に行われた。

ところで、9月の段階ではそれぞれの個別論文は完成しておらず、それゆえに〈問い〉も公表されていなかったので、まず、それぞれの〈問い〉を研究会の前にメーリングリストに流し、研究会当日に〈問い〉についての質疑応答を行った。その際、DDやDPの検討会と同じく「討議支援マップ」などの「ツール」が使われた。

〈問い〉についての討議が一通り終わった後、すべての〈問い〉を一枚のマップに載せて

16——なお、個別論文の注の書式は、（各執筆者が属している）それぞれ異なる専門分野の様式を反映しており、この違いを浮き彫りにすることも「活動中の人文学」の主旨に適うものと考え、あえて統一を求めなかった。

〈配置し〉、それらの〈問い〉どうしの間に関係を新たに作ることを試みた[*17]。

このマップは、一連のDD検討会の全体的な動向を表していると言えるが、それでも、このマップは、検討会についてのひとつの解釈（あるいは表現）であることも事実である。

異質な〈問い〉が並ぶこのマップから、どのような〈問い〉を見出すかは、読者に任されている。このマップ自身が〈人文学〉のひとつの始まりになり、〈問い〉を継続していくことに、第Ⅰ部のタイトルの「活動中の（in action）人文学」の別の意味が込められている。

以上のように、このセッションでは〈問い〉が中心的な役割を果たしているが、他方、この〈問い〉は、〈共有される問い〉として、DD、個別論文、ならびにDD検討会の討議において重要な役割を果たしている。つまり、〈共有される問い〉は、2006年度の研究会での中心的なトピックの一つであると言えるだろう。

そこで、本報告書の「はじめに」で〈若手研究集合〉の課題として挙げられている「学知のコミュニケーション不全」に対する〈共有される問い〉の意義について、以下少々述べて本緒論を終わりたい。

〈若手研究集合〉のように異分野の研究者が集まって討議する場合には、「学知のコミュニケーション不全」という現象は多少なりとも常に生じている。また、それぞれのメンバーが専門学科で教育を受けている以上、そもそも「学知のコミュニケーション不全」を「解消」したり「解決」したりすることは原理的に非常に困難な事柄であると予想される。

社会システム論が主張しているように、コミュニケーションを創発的な事態であると捉えるならば[*18]、「学知のコミュニケーション不全」あるいは一般に「ディスコミュニケーション」は、コミュニケーションの常態であると言える。

したがって、「はじめに」で述べられている課題「学知のコミュニケーション不全の克服」とは、その「不全の解消」ではなく、このようなコミュニケーションにどのように関

17——— 詳細は、D.〈問いの共有〉を参照。その第4節では、それぞれの〈問い〉に示されている〈人文学〉の動向から、「学科横断性」と「反省性」の内容が再考されている。

18——— ルーマン的な立場にとってのコミュニケーションは、話者（あるいは執筆者）の意図が伝わるかどうか、ということよりもむしろ、その話者（あるいは執筆者）のコミュニケーションの行為が、受け手にどのように受け取られるのかということが重視される。それゆえに、コミュニケーションの「理解」は、話者（あるいは執筆者）もとであらかじめ生じているのではなく、その受け手が捉えるときにおいて初めて生じるとされる。

わることによってそれを変化させるのか、と言い換えることができるであろう。

2006年度のDD検討会では、コミュニケーションにおける〈インターフェイス〉として〈共有される問い〉を設置したことが、上記の課題への対処・工夫であったと考えられる。

ところで、異分野の多くの共同研究において、コミュニケーションの〈インターフェイス〉として設置されているのは、「共通テーマ」である。このテーマに基づいて学問的なコミュニケーションが行われるが、もちろん「学知のコミュニケーション不全」が存在しており、各研究分野の「棲み分け」によってそれが回避されていることが多い。

また、学際的な（interdisciplinary）共同研究においては、「共通の方法」や「共通のアプローチ」が〈インターフェイス〉とされることがある。この場合、方法が共有される以上、異分野であっても比較的近い学科の間の共同研究であるとみなされるであろう。

他方、2006年度の〈若手研究集合〉活動での〈インターフェイス〉としては、これらのような共通性のあるテーマや方法を設置しなかった。それは、個々のメンバー自身が考えた〈共有される問い〉であった。このように〈問い〉を〈インターフェイス〉とすることに、我々は以下のような利点があると考えている。

DD、そして個別論文は異分野のメンバーに提出されるとはいえ、それぞれの専門学科でも受容され得る専門的な内容とレヴェルが求められた。この場合、専門学科に通常に提出するようなドラフトを〈若手研究集合〉に提出すると、〈通じ合えなさ〉が生じるであろう[*19]。そうすると、異分野のメンバーに提出するドラフトは専門性を薄めた内容になるのではないだろうか。このような問題は、〈若手研究集合〉において絶えず浮上してきた問題である。

これに対して〈共有される問い〉が〈インターフェイス〉なると状況がやや変化すると考えられる。〈若手研究集合〉のメンバーが提出する〈問い〉は、確かに専門学科内での教育や議論を経て生み出されてきたものであるが、しかし〈問い〉である以上、その核心に存しているのは、確固とした知（あるいは専門知）ではなく、当人にも十分には「わからない」ことである。それは、まだ学知としてのかたちをなしていないために、共有されやすいこともあるだろう。このように〈問い〉における「わからなさ」を通じて、それぞれのメンバーがお互いに開かれていく〈態度〉が促進されると考えられるのである[*20]。

19——これは、2004年度の「自己紹介発表」でしばしば生じたことである。

20——実際に2006年度のDD検討会では、各メンバーの問題意識について集中した討議が行われ、相互の

もちろん、このことは、〈問い〉の内実によってかなり程度の差が生じることである。だが、〈共有される問い〉を〈インターフェイス〉に設置することによって、専門学科において確立された知識を伝える場合とは異なるコミュニケーションが起こるであろう。ここに、共通するテーマを設置しないで共同研究を行う場合、〈共有される問い〉を〈インターフェイス〉にすることの意義があると考えられる。

［いえたかひろし・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員］

［参考文献］

Derrida, Jacques (1990), *Du droit à la philosophie*, Galilée.
Gibbons, Michael, et al (1994), *The new production of knowledge*, Sage.
本田由紀（2005）、『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版。
カーナン（2001）、「人文科学と高等教育における変化」カーナン編『人文科学に何が起きたか　アメリカの経験』（木村武史訳）玉川大学出版部 所収、3-16ページ。
小林康夫（1998）、「大学教育の意味を再考する」岩波講座『現代の教育10　変貌する高等教育』岩波書店 所収、315-330ページ。
水島久光（2006）、「大学と実践」日本記号学会編『溶解する［大学］』慶応義塾大学出版会 所収、82-89ページ。
奥野信宏（2006）、『公共の役割は何か』岩波書店。
内田樹（2005）、『知に働けば蔵が建つ』文藝春秋。
Said, Edward, W. (2004), *Humanism and democratic criticism*, Columbia University Press〔邦訳：『人文学と批評の使命』村山敏勝・三宅敦子訳、岩波書店、2006年〕.
鷲田清一（2003）、「冒険・きしみあう知」『ニューズレター「インターフェイスの人文学」Interface Humanities』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究開発委員会、第1号 所収、2-5ページ。

理解を促進したと思われる。各検討会の要旨を参照。また、「わからなさ」に定位する〈態度〉を小林康夫は以下のように表現している（小林、1998、329）。「おそらくわれわれは、いま、そして今後、これまでとはまったく異なったタイプの知性を必要としている。［中略］『知っていること』において行動するのではなく、むしろ『知らないこと』において行動することができるような知性。つまり、専門化されたミクロの領域をひとりで全面的に――つまり『権威』として――覆い尽くすような『知識の人』ではなく、さまざまな異なった能力をもった人々とともに共同で問題の創造的な解決にあたることのできるような開かれたコミュニケーション能力を備えた『知の行為者』」。

ユートピア小説と民族誌
人類学における抵抗論と反＝抵抗論を越えて

田沼幸子

《要約》
民族誌は、実は、ユートピアの「見立て」(浜本 2005) に多くをよっている。本論でこの見立てを指摘するのは、「暴露」して脱構築するためではなく、民族誌を書くときに暗黙の前提となっていた願望そのものも検討の対象とし、対象と自己が捕えられているコンテクストを視野に入れるためである。具体的には、人類学者小田亮と松田素二の「抵抗」という「見立て」に対する浜本の反論を検討した。浜本が「抵抗」という言葉を、フィールドのコンテクストに置き直して検討すべきであるとした指摘に従って、本論では、抵抗論と反＝抵抗論という、浜本も含めた人類学者同士の議論そのものをコンテクストに置いて捉え直す。その結果、抵抗論は、1990年代に人類学を学び始めた院生らにとっては、ポストモダン人類学の流れのなかに位置づけられる新しい見方として見えていたにもかかわらず、小田、松田、浜本らの世代にとっては、1960年代に社会的に大きな影響力を持ち、実際にさまざまな「運動」の契機となったマルクス主義の見方の延長線上にあるものとして捉えられてるのではないかと推測した。左翼的な運動は、「解放」すべき対象と、その実現を導こうとする主体を同等のものにしようとする動機に支えられながらも、実現までは、両者が不平等であるというポジショニングの矛盾の問題がある。抵抗論も、反＝抵抗論も、このジレンマと向き合って解消せんとしようとする試みである点では共通していると筆者は考える。一方、この無限の「自己反省」を回避するためには、「夢を見る」ことをただ否定的なものとして退けるのではなく、社会を構成する要素のひとつとして分析し、その記述がフィクションであることを自覚しながらも記述するというユートピア小説に学ぶことができると提案した。そしてまた、自己の夢を信じながらも笑うという別の運動参加者の態度からも、異なる参与のあり方を学ぶことができることを指摘した。
本論は、以下の問題意識を、より具体的に論じようとする試みである。

ポスト・モダンのいう、大きな物語の終焉は、ある人々にとっては、「大きな物語の呪

縛」からの「解放」としてとらえられたかもしれません。しかし、キューバ革命をはじめとするユートピアへの希望がつむいだ、「『解放の物語』という大きな物語が終焉したとき、そこに待つのは「解放」感でしょうか。そうではなく、とまどいであり、その終焉が明るみにする解放の物語とは裏腹の物語であり、その物語を信じてきた自分や仲間たちに対する、やるせない思いではないでしょうか。(略)

しかし、いまだ生々しいユートピアへの希望と失望は、欧米や日本の人類学者の記述にも、その痕跡をとどめていると思います。

私たちは、しばしば、それがただの学問的な方法論の問題であるかのように思っていました。しかし、いまになって思うに、それは、1968年を頂点として、日本を含む世界各地で起きた熱いユートピアの夢に対する反応として生まれた、世界を見るためのスタンスの問題なのでしょう。(田沼2006a: 11-12; 下線部引用者)

しかし、その「痕跡」は、日本の人類学者の書くものには、かなり遠回しにしか現れてこない。このため、本論では、立場の違いが鮮明に表現されている、インターネット上の議論や講演を参照して論じたい。

《キーワード》抵抗、見立て、ユートピア、小説、自己反省

0. 日常抵抗論への「抵抗」

人類学者の浜本満氏は、2005年4月28日、京都人類学研究会月例会にて、日常抵抗論を批判する理由について、穏やかな微笑みを浮かべながら、こう語っていた。

若い大学院生の関心は多様化し、プラクティカルになっているだろう
妖術師の話なんてしたらだめだろう、と思って
一般的な話をしないといけないんじゃないかと。
でも持ち合わせがなかったから、抵抗論にした
別に抵抗論に対して、憎しみも愛情もない(田沼がパソコンでとったノートより)

しかし、以下のようなネット上の浜本氏の批判の激しさを読む限り、その言葉を字義通り

受け取っていいものかどうか、かなり疑問が残る。

はぁ。まだ飽きもせず抵抗について語りますか。当の人たちのことをほとんど知らず、会ったこともない学生さんたちまで、得意そうに抵抗、抵抗って、見苦しいな。他人が抵抗しているのを見ると、そんなに元気でますか？ 勇気づけられますか？ 勝手なもんだな。そんな風にはしゃいでるくらいなら、実際に彼らに手を貸してあげたらどうですか。一緒に抵抗してみたら。ちょっと足を伸ばせば、ほんのちょっと財布の紐を緩めれば、それくらいのことできる立場なんだから。それとも抵抗しているって記述してあげたら、彼らを誉めたことになるとでもおもってるんですか。勘違いです。あんたらに誉められても、何の足しにもなんねーよ。余計なお世話だ。だいたい、それって誉め言葉か？ 抵抗してるって？

と、最近の民族誌記述の一つの流れを見ていると、こんなひねくれた悪罵の一つも言いたくなるようなひねくれ者がどこかにいないとも限らない。もちろん私は素直な人間なのでこんなことを言ったりはしない。ただ特異な宗教運動から、日常生活の中のなにげない実践に至るまでを、権力や抑圧に対する「抵抗」として解釈してみせる研究は、あいかわらず盛んだ。誰だってセルトーの名前くらいは聞いたことあるでしょ。日本の人類学者でも、松田素二さんとか元気だし、あの確信犯的遅れてきた構造主義者小田亮さんまで、数年前から「抵抗」とか言って受けをとってるし。うーん（浜本2002a）。

京都の研究会では、もう少し穏やかな口調によって、「抵抗論」のどこが問題なのかを具体的に指摘している。もっとも重要な論点は、行為の記述は、社会空間への埋め込まれ方に関する記述を含む、反照規定的なものであるにも関わらず、「抵抗」概念が、コンテクストフリーなものとして使われているのではないか、という疑念である。浜本は、「抵抗」のような概念は単なる叙述実践ではないため、常に一度、その概念が実際に使われる社会空間に差し戻す必要があるのではないかと提案する。

筆者は、この意見に同意する。しかし、ここでは、「抵抗」に関する分析を社会空間に差し戻すのではなく、「抵抗論」とそれへの「抵抗」を、つまり、松田、小田の議論と、浜本の議論を、それが使われる「社会空間」に差し戻してみたい。それには、〈いま＝ここ〉だけではなく、〈かつて＝ここ／あちこち〉を振り返る必要がある。

1. 抵抗論と抵抗論批判を1960年代に差し戻す

現在、人類学を学ぶ「私たち」にとって、人類学の〈いま〉と〈かつて〉を分け隔てるのは、『Writing Culture』(Clifford and Marcus 1986) に端を発する「ポスト・モダン人類学」の登場である。この著書の登場によって、人類学の〈いま〉は、「ポスト・モダン」、それ以前は「モダン」として分割して想像されるようになった。そして、1990年代後半に大学院に進み、人類学の専門教育を受けるようになった「私たち」には、それ以前の人類学は、対象となる社会を「静的」かつ「本質主義」的に描く、「モダン」なものなのだという先入見が刷り込まれた。また、その後、この本の副題 "The Poetics and Politics of Ethnography" にあるように、民族誌の「政治学」の検討が進むことによって、ポスト・モダン人類学とは、対象となるフィールドとフィールドワーカーの置かれた政治的状況や、フィールドワーカーがその状況に対してどのようなポジショニングをとり、民族誌化するか、ということが意識化されたものであると理解された。日本でこの方向に議論を展開させたのは、米国の大学と大学院で人類学を学んだ太田好信 (特に太田 1998参照) である。

ところが、「ポスト・モダン人類学」の名のもとにこのころ提起されてきた問題の多くは、1960年代後半に盛んに議論された問題の延長線上にあった。理由は明快で、この時代に教育を受けた人々が教員になったのが1980年代のことだったからだ (マーカスとフィッシャー 1989 (1986) :16-17を見よ)。彼らにとって、教育を受けた1960年代後半と、それ以前の1960年代前半で、学問と社会との関係は大きく変わった。それは決して、「人類学」内部のみに限られた話でない。以下の社会学者Sklair (1977) による同時期の社会学の動向のまとめは、同時期の人類学の動向と連動している。

Sklair (1977) によれば、1945から1964年のアメリカの社会学は、構造機能主義であり、社会学を行う自分たちは何者かという自覚が欠如していた。これに対し、1965年から84年にかけての社会学は、自分たちが何者を問う「社会学の社会学」の時代となるのではないかと予想している。[*1]

ある種の社会学は、自分たちの社会を擁護し、別の社会学は現行の社会を批判する。

1 ——— もちろん、1945年以前にも、自分たちが何者かを問う社会学は、ライト・ミルズやマンハイム、マルクスらによってすでになされており、この変化は単線的なものではないことが示されている。

Sklairは、前者を、機能主義者が主役を演じる「ブルジョア」社会学、後者を、マルクスが多大な影響を及ぼす「ラディカル」社会学と呼ぶ。それぞれ、扱う対象と、その扱い方が以下のように異なるという。

ブルジョア社会学	::	ラディカル社会学
秩序	::	批判
システム	::	コンフリクト
Priestly（司祭的）	::	Prophetic（予言的）

前者は、現存する秩序は多くの人々の同意に基づく、問題の少ないものであると見なし、後者は、現存する問題を批判していけばよい社会が現れると考える。つまり、Sklairによれば、どちらも「ユートピア（マンハイムの言う意味での）」なのだ[*2]。

抵抗論は当然、ラディカル社会学の側にある。
では、浜本の反＝抵抗論は、「ブルジョア社会学」の側に位置づけられるのだろうか。
私にはそうは思えない。浜本が小田に求めているのは、小田が目指すところの「抵抗」を、よりいっそう、矛盾なく行うための「自己批判」を追及することだ。この批判の仕方は、1960年代後半に、学生運動家が相互に行っていたそれに通じるものがあると、私には見える。

まず、浜本がラディカル社会学的な批判を批判する箇所を見ておこう。

> 結局なんで［日常的抵抗論］を導入しないといけないのか、その根本的な理由というか動機はわかったかい？ 松田さんと共通してんのは、おそらくそこさ。
>
> 非本質主義的な異種混淆性論が陥ってしまった植民地化や資本主義化による「脱領土化」の肯定につながらず、同時に、それを批判して登場してきた戦略的

2――そう論じるSklairの立場は、マルクス主義を、「ラディカル社会学」者がやるように、「ヒューマニズム」に任せて社会主義の実現を偶発性に任せるのではなく、「科学」としての社会学を、戦闘的（militant）に行うことによって、必然的に世界を変えること、だという。

本質主義のように、固定されたテリトリーへの「再領土化」に戻ってしまわないためにはどうすればよいか、という問いへの答えとして、「日常的抵抗論」は登場してきました。すなわち、「再領土化」(何かへの帰属) によって植民地化や資本主義化による異種混淆化に抵抗することが、民族や性といったカテゴリーの本質化にはつながらないような道は可能か、という問いに肯定的に答えるものが、「日常的抵抗」論でした。(小田 op.cit.)

つまり、「日常的抵抗論」は現実がどうであるか、どのように進行しているかを記述分析するために必要とされてきたんじゃなくて、「どうあるべきか、どのようにするべきか」という規範的な問いによって要請された理論だってことだ。

そりゃア、俺だって、人間の共同性のあるべき姿はどうだとか、どんな風になればよいかといった夢をまるで持ってないってわけじゃあないさー (遠い目)。でも、一人の見る夢は、別の人にとってはありがた迷惑だったりもする。俺は、現実がどんなふうになっているのかをまずとらえたいと思う。そのとき、こうした規範的な問は、しばしば邪魔になるってことだ (浜本 2002b)。

ここまでの議論は、Sklairのまとめによれば、現状批判よりは現在の秩序を理解しようとする「ブルジョア」社会学の立場に立つかのように見えるかもしれない。しかし、以下の批判の矛先を見ると、浜本は、現状変革を求めることそのものが問題なのではなく、現状変革を求める研究者がとる態度を問題にしていることが分かる。

おまけにこうした問に答えようとすること自体に含まれる自己矛盾がある。「『脱領土化』の肯定につながらず、同時に、……固定されたテリトリーへの『再領土化』に戻ってしまわないためにはどうすればよいか」、その処方箋がわかったとするじゃないか。それは誰のための処方箋なんだって問題だ。誰がその処方箋に従って行動することになるんだ? あんたらか? それともあんたらはそれを、当事者たちに差し出して、ほれ、これに従って行動してご覧とか言うつもりなんか? そもそも理論的に導き出された処方箋にしたがって、状況に対して意図的に実践的に働きかける主体って、啓蒙主義的主体じゃないか。で、そうした主体のあり方について、一方でさんざん批判し

てるでしょ。

> ヤングのいう「意図的な異種混淆性」を意識的に操作する「主体」は、近代の啓蒙主義が想定したような、周囲の重層的な社会的結合や文化的コンテクストから身を引き離すことで、それらをコントロールできる超越的な位置を獲得する「空虚な主体」を引きずっています。(小田 op.cit.)

でも抵抗論が「どうすればよいか」の処方箋を目指している限り、それはここで否定されているような超越的な主体を、要請もしていることになるってわけ(浜本 2002b)。

小田の議論では、フィールドの人たち、特に、「サバルタン」のやり方に、「われわれ」が学ぼう、と提案しているので、「処方箋」ではないかという批判は、多少、論点をズラしたもののように思える[*3]。小田が抵抗論を提出する先は、「サバルタン」たちではなく、むしろ、彼らを救済しようとして、自らの「処方箋」の有効性を疑問視することなく「ラディカル社会学」を担ってきた学者および、「共産党」の「前衛」[*4]の人びとだと考えるのが妥当ではないだろうか。こうした言い方では、1972年生まれの私と同世代の人間にはピンとこないかもしれないので、1960年代に「前衛」を目指す運動に身を置いており、現在は研究者で(も)ある石塚の言葉を引用する。

このような分析様式は、かつての私たちのというか(笑)、かつての運動スタイルです。それは世界解放戦略に沿って国際情勢分析から始まる、ドグマ的なコミンテルン型の

3——ただし、ここで浜本が言いたかったことも、以下のように、もっと複雑である。「他者の実践を権力に対する「抵抗」として語る=眺めることというのが、一見その他者と自分の視点を同一視している立場であるかのようでありながら、実際には外部から、むしろ権力の側の視点と同じ立ち位置にたって他者の実践をとらえ、そうした上であらためてそれらの他者に対する思い入れ=再同一視を行うという、ちょっとねじれた立場なんだということが、実は言いたかったことだったのです。そのねじれに気がつかないというのは、実は他者の行為の同定の部分を、中立的・客観的なプロセスと見てしまっているからじゃないのかと」(浜本氏からの私信 2006年5月24日)。

4——前衛:階級闘争において労働者階級の先頭に立って指導する集団・部隊。レーニンによってマルクス主義政党の組織原則となった。

戦略分析をやってその後、具体的な戦術を考えるというものでした（石塚 2006: 55）。

コミンテルン型の戦略分析による「民族解放路線」とは、以下のようなものである。

植民地にはブルジョア民主主義的な民族主義とそれから無知蒙昧の農民と、それから組織化されない労働者の大衆行動がある、これをブルジョア民主主義的な民族主義に取り込まれないように前衛党が指導しながら、革命に導く（石塚 2006: 54）

つまり、このような「かつての運動スタイル」を押し付ける「コミンテルン」的な「解放」プロジェクトに対し、小田は、一望俯瞰のできない「弱者」が、「他者の場」で、その場その場をしのいでやっていくやり方は、「無知蒙昧」や「取り込まれる」と言い表されるようなことではなく、それだけで、権力に対する「抵抗」としてとらえられるものだ、と批判しているのである。

同じく、浜本が批判する、松田の「抵抗」についても、説明が必要だろう。浜本は松田をこう批判している。

松田素二さんが上げているナイロビのスラム住民の抵抗の例にしたってそうだ。無実の罪で家族のものがしょっ引かれて、警官に賄賂とかこそーりと渡して釈放してもらう。これを柔軟だかなんだかしらないが、したたかな抵抗だなんて、あまりにもおめでたい。普通に考えれば、理不尽につかまったうえに、さらに金まで巻き上げられて、踏んだり蹴ったりだといえよう（浜本 2002a）。

引用された松田の著作の該当箇所を確認してみると、この状況が「踏んだり蹴ったり」であることは承知のうえで書かれたものであることが分かる。松田は、このような事態を、日本人読者が、アフリカはやはり「やられっぱなしの歴史」にあるのだという一言で済ませ、彼らの置かれた状況を「ひとごと」という枠組みにとどめて理解を終わらせないよう、以下のように書き方を工夫しているのだと筆者は思う。

警察に捕えられた松田の知人ジュンバは、警察官へのチャイ（お茶、転じて賄賂）と人

間関係の拡張（犠牲者の人間関係を次々にたどり、警察署の誰かとリンクして、警察官を「敵」から「味方」「友人」に変える）による懐柔によって、二週間後、保釈金もなしに釈放された。それを、松田はこう説明する。

> 私たち日本人の目から見ると、賄賂とかコネはアフリカの後進性の象徴であり否定すべきものに映るかもしれない。しかしよく考えてみると、このような私たちの思考は、支配的なシステムの維持を無条件の前提にした議論であることに気づく。私たちにとって、たとえば国家とか法とか警察という近代市民社会のシステムは、当然あるべきものとして先験的に存在している。したがって、それが不自由だとかそこから脱出しようという思考は、私たちのなかからは生まれようがない。根源的な懐疑を封じる巧妙な神秘化の装置が作り上げられてきたのだ。だがジュンバたちは違う。彼らは、暴力的なシステム自体に飲み込まれながらも、内部からそれを変質させ揺るがそうと日々努力を怠らない。賄賂や懐柔は、彼らにとってはこうしたソフトで日常的な抵抗の手段に他ならなかったのである（松田 1996: 278；下線は引用者）。

そしてそれは、「近代社会のなかで意識せぬ敗者であり続けている私たちにとっても魅力的な可能性を指し示」（276；下線は引用者）すものなのだと説得しているのである。修士課程で人類学を学び始め、一連の松田の著作を読んだ私は、なるほど、と思ったものである。それは、ここで書かれた「私たち」に、ちゃんと、1972年生まれの「私」も含まれているからだ。アフリカで「やられっぱなし」に見える人びとは、ただの受け身の被害者ではない。一方で、大学院にまで進学するような、自分たちも、実は主体的なのではなく、従順なのだ。松田や小田の著作は、このような「見立て」があることに気づかせくれ、幼い頃から自明な物として受け入れてきたシステムを疑う契機となった。

ところが、我々が「実は」システムに「飲み込まれ」ているとしてその「神秘化」を暴く、というやり方は、1960-70年代に大学生時代を過ごした世代の人びとにとっては、既視感のあるものでもある。当時の学生なら誰でも知っているものとされたカール・マルクスによる世界の「見立て」なのだ。しかも、この「見立て」が、学生や運動家たちによって、疑うべきでない「公理」とされ、対象となる「無知蒙昧の農民や労働者」を啓蒙しようとする「驕り」を生んだだけでなく、学生や運動家同士の間で「見立て」の解釈の違いによる激

しい対立を生み、相手の「見立て」を、暴力によって封じ込めようとする行動にまでつながっていたことも、記憶に新しいものであった。

しかし、この「記憶」は、彼らにとっては常識であるうえに、ソ連崩壊という衝撃的な出来事をきっかけに、後続の世代に語り継がれることがほとんどなく、薄れていってしまう[*5]。参考までに繰り返すならば、私が生まれたのは、「あさま山荘事件」のあった1972年であり、大学に入ったのは、ソ連が崩壊した後の1991年のことである。だから、私には当初、浜本がいう、以下のような「啓蒙主義」と「夢」とのつながりが、よく理解できなかった。

> 俺、思うんだけど、俺たち骨のずいまで近代の啓蒙主義が染み付いてるところがあるよ。だからさ、夢とかいったちょっと検閲のゆるんだ世界の介入を許してしまったら、そうした染み付いた性向がノーチェックで踊り出てしまう。むしろほっぺたつねってでも、醒めてて夢は見んようにした方がいいんじゃないかと思うわけよ。抵抗論ってのは、俺には、夢へのお誘いにしか見えんな（浜本 2002b；下線は引用者）

こうした、他者に夢を託すことへの警戒と、激しい批判は、暴力的な「夢の実現」のやり方が「当たり前のこと」として流通した後、実際にそれが他者への「はた迷惑」な暴力を引き起こし、そのうえ、ごく短時間に忘れ去られるという軌跡を見てきた世代ゆえの、経験に即した警戒なのではないだろうか。だから、浜本の反＝抵抗論は、決して、理論的な精度を高めようとする純アカデミックな試みでなく、実際に、自らがアカデミアの中で書くことが、社会的行為であるということを自覚しつつ、安易に「抵抗」の言葉を用いて論文を書こうとする未来の人類学者たちを戒めようとする、学術的かつ政治的な介入であると言えよう。

2. ユートピアという見立てを、フィールドと小説の空間に差し戻す

それでは、こうした介入は、人類学者自身のreflexivityにのみ向けられるべきだろうか。

5——同様の点を1971年生まれの東浩紀が指摘している（東、笠井 2003）。

私はそうは思わない。だからこそ、ポスト・ユートピア研究会を組織し、「若手」である私たちにとって、「社会主義」や「運動」がどのように見えるのかを、フィールドワークで得たデータと知見とを報告し、かつ、浜本らと同世代の研究者も交えて、『ポスト・ユートピアの民族誌』(田沼 2006a) を編纂したのだ[*6]。

この本では、それぞれの書き手が、自分たちがコンテクストフリーに書けるわけでも、透明で啓蒙的な主体になれるわけでもないことを自覚している。しかし、一方で、ユートピアを目指す主体のポジショナリティに、同一化するわけでもない。そもそも、ユートピアをベタに目指すだけの主体、俗な言い方をするなら、それを「頭から信じている」人など、私たちがフィールドワークの対象とした人びとの間にさえ、いないのだ。誰しも、「私たち」フィールドワーカーと同様に、いくばくかの「秩序への埋没」と「批判的距離化」(大杉 2006: 133) の両方を行っている。1960-70年代の「闘争」には、対象とのアイロニカルな距離をかき消そうと「没入」し、革命によって一足飛びに超えようとするところが、そして、90年代のポストコロニアリズムに触発された人類学者たちには、「サバルタン」に学ぼうとして、彼らの闘争に同一化しようとするところがあった (例えば、太田 2003)。私たちの「参与観察」とその「民族誌」は、そのような同一化の願望を含めた「運動」の経験を、肯定したり否定するのではなく、誰が何をどのように語っているのかを記述することによって、その経験をともにしていない人にも理解可能なものとして記録し、伝達していくというものである。そしてこの私たちの営みは、一望俯瞰的に他者をとらえ、表象したり、啓蒙するものでもなければ、自己を透明にしてとらえることでもない。私たちは、自分が思っている以上に、コンテクストに拘束され、限られたひとにしか通じない語彙でしか物事を捉えていなかったことを、別の世代、別の大学に属する人たちと、別のフィールドについて話すうちに、自覚せざるをえなかった。このような自覚は、以下のような春日 (2006) の論文の読み込みと相まって、最終的に、人類学や社会学そのものが、ユートピア的願望に拘束されたものでもあると、私に気づかせることになった。

> 「ユートピア」を目指す運動は、必ずしも、プロセスとして描けるものではないし、「彼ら」のそれと「我々」のそれとの区別は、通常考えられているほど自明なものでも

6——— 2007年には加筆・修正したものを、人文書院から、石塚道子・冨山一郎・田沼幸子の共編として出版する予定である。

ない。「カーゴ・カルト」として対象化されてきたアポロシの運動が、後期資本主義社会にて、革命の主体となることもなく、「待つ」フリーターの姿と併置されるとき、私たちは、対象となる社会の非合理性を人類学的に興味深いものとして悠長に論じるか、自社会や市場経済の非合理性を、そこに組み込まれた当事者として手厳しく批判するという、どちらにも足場を置くことができないという決まりの悪い位置に立たされる。この決まりの悪い位置に立たざるを得ないという問題は、ずっと、論者たちの目の前につきつけられてきたはずだ。ただ、「どこか」にはそうではない社会がある、「いつか」はここにもそうではない社会が現れるはずである、という希望的な前提——こう言って良ければ、ユートピア的願望——のもとに、どちらかの足場を、無意識に選びとって、この決まりの悪さを逃れてきただけなのだ（田沼 2006a: 5）。

この決まりの悪さから逃れずに対峙してきたという姿勢において、小田、松田、浜本の抵抗論と反＝抵抗論は一致している。筆者も、決まりの悪さからは逃れないような人類学的分析が必要だとは考えている。ただし、彼らのように議論をつきつめていくのではなく、民族誌的に描くことによってという方法を、ユートピア小説から学べるのではないかと考えている。

先述した『Writing Culture』の副題には、「政治学」だけでなく、「詩学」が含まれていた「民族誌の詩学と政治学」。にもかかわらず、文学的展開に関する議論は、ポストモダン人類学の「矮小化」（太田 2003：40）であるとの批判とともに、ポストコロニアル研究の興隆がおこり、「詩学」——民族誌を書く際のレトリックのあり方や、新しい書き方の実験——は、徐々に人類学の議論の中心から消えていった。民族誌が、科学的で客観的な文章というよりは、「フィクション」であることが自明視されるようになった現在、いまいちど、その書き方を、フィクションであることを前提に書かれたユートピア小説から、学ぶことができるのではないか。

ユートピア小説は、しかし、若手研究者集合の唯一の文学研究者、藤本武司に、絶対面白くないだろうから読んだことがない、と、鼻から相手にされないほど評判が悪い。実際、そのような考え方は珍しくない。1963年に書かれた論文「文学と現実におけるユートピアと耐久性」という論文は、のっけからこのような一文で始まっている。

ユートピア小説は概して、退屈なフィクションである。現実のユートピアは、概し

て、短命な社会である（Hawthorn 1963: 50）。

ポーランドからフランスに亡命した歴史学者バチコも、ユートピア小説がもともと「エリート」による「エリート」のためのものであり、かつ、退屈なものであることを指摘している（バチコ 1990）。それでは、なぜ、一時期、ユートピア小説は、海賊版が出回るほど人気を博したのか。

一方、上記のHarthornの文のあとに続く以下の一文は、この時期に生まれた新興国の「その後」を知る私たちにとって、苦々しくも、物悲しいアイロニーを持って響いてくる。

一方で、ユートピア的な特徴を持った、新しいナショナルな社会の創造は、かつてないほど盛んである（Hawthorn 1963: 50）。

小説というフィクション性を離れて、そこに描かれたユートピアを実現しようとした人びとは、どうして、そのようなことが可能だと考えたのだろうか。

ここで忘れてはならないのは、私たちは、「終わってしまった」後の視点から、「なぜ『そんなこと』が可能だと『信じられた』のか」と疑問を持つが、多くの場合、実現しようとされたユートピアは、『そんなこと』という具体的なヴィジョンよりも、〈いま–ここ〉「ではない」もの、として、期待されてきたということである。間違った、狂った、不正な〈いま–ここ〉を否定したら、現れるはずの、〈なにか〉。

例えば、1972年、イスラエルのテルアビブ空港を襲撃した岡本公三に、獄中でインタビューしたアメリカ人社会学者スタインホフは、こう書いている。

私は、革命で既成社会を打倒したらそのあとにはどんな社会が出現するのか、聞いてみた。岡本はほほえんで、それは革命においてもっともむずかしい問題です、と答えた。次にはどのような社会になるのか、はっきりとはわからない。でも、新しい社会は、ブルジョア資本主義打倒ののちに現れるのだということははっきりしている。（略）革命の獲得目標について曖昧なことしかいえない事実を認めたうえで、岡本はいった。真の目標は、革命それ自体だ。既成権力を世界規模で破壊することだ。その先は分からない（スタインホフ 2003：33）。

岡本は、何が来るのか分からないまま、〈――ではない〉何かの為に、〈いま–ここ〉の破壊を試みた。同型の思考は、先立って、自己批判を、「総括」という、準拠枠組みなき、「無限の反省」(北田 2005: 49) へと転じることによって、「同志」を援助のために死に至らしめるという事態を引き起こしていた。それは北田が分析するように、「時代精神から遊離した病理ではない」(北田 2005: 34) 。

> 「革命や無階級社会のイメージ」を設定する左翼思想は、不可避的に、それに奉じる主体＝インテリゲンチャに解決不可能な難題を突きつける。つまり、左翼思想の難解な論理・概念を操るインテリその人は、当の思想が解放しようとしている「プロレタリアート」でも「民衆」でもない、というポジションをめぐる問題である。現在の社会体制のなかでそれなりの収入、学歴を持つインテリたちが享受している特権性は、来るべき「未来」の社会においては否定されなくてはならない、しかし、その「未来」の到来を現実のものにするためには、インテリは真理を知る「前衛」として何らかの先導的役割をはたさなくてはならない、さてどうするか？――こうしたジレンマは政治理論がプラグマティックな統治術であった時代には生じえないものであった。社会構造を総体として捉え、歴史法則を横目で睨みつつ「解放」を目指すマルクス主義的な思考様式こそが、語る者の立ち位置＝ポジショニングへの懐疑・反省を加速させたのである (北田 2005: 42)。

松田、小田、浜本らの議論は、立場こそ違え、このポジショニングへの問題意識と、フィールドとホームにおいて正面から向き合うなかで生まれてきたものだと言える。松田と小田は、フィールドで突きつけられた一連の行動の「融通無碍」さを、論理的、かつ倫理的に肯定的にとらえ、かつ、彼らを啓蒙すべき対象としてではなく、自らがそこから学ぶべきものとし、これらに「抵抗」という枠を与えた。一方、浜本は、こうした一連の行動の「根源的無根拠」さにあくまでとどまろうとしているように見える。「抵抗」と見られる場においては、アクターそれぞれの意図が「ずれまくっている」ことこそが面白いのだと指摘する (浜本 2002a) 一方、京都人類学会の講演では、「支配者／エリート」側の方が「型にはまって」いて、そうでない側が「臨機応変」だとする小田の前提そのものへの深い懐疑を示している。「ブリコラージュにしてもセミ＝ラティスにしても、虐げられた人たちの専売特許ではない。大金持ちでも、ブリコラージュが得意で、優位な方にシステムを

再生産してるかもしれないではないか」。これを、ただ、難癖をつけているだけだと捉えることもできるが、そのような「現実」を見たことがある者として、指摘しているように、私には、思える。勝手に想像を膨らませてみよう。

1968年、「全共闘」が大学で「闘争」していたころ、1952年生まれの浜本は、まだ16歳である[*7]。だ、学生運動は、浜本らが通っていたような東大や京大とのつながりの深い「エリート」高校には、わずかながら飛び火していた。例えば、1953年生まれの春日直樹は、高校時代、「先輩」が、「先生」をつるしあげる言葉を聞いたときのことをこう語った。「すごいんだよ。何言ってるか全然、分かんないんだ。呪文みたいだった」。[*8]
とはいえ、その「呪文」は、実際に、多くの若者に、その呪文が命じるところの行動をとらせた。
1953年生まれの四方田犬彦は、東京教育大付属駒場高校在学中、「一日だけのバリケード」を経験した。ところが、彼が食料を調達しに自宅に帰って学校に戻ると、機動隊導入の噂に動揺した仲間たちがそれを自主的に解除してしまう。その顛末を描いた自伝的作品『ハイスクール　1968』について、ある匿名の編集者はこうまとめる。

> 大学生だった全共闘世代が、その数の多さから挫折すらもある種の共同体験でありえたのに対し、彼ら少数の「遅れてきた世代」は徹底的に孤立したなかで敗北を噛みしめなければならなかった（雄）。

一方、日本以外の場で「革命」を目指した人々はどうだろう。再び、石塚の例を挙げる。マルティニクからフランスに留学した、1968年のパリの「五月革命」体験者である「68年世代」は、マルティニクに帰郷しはじめたのち、土地占拠運動を始める。それは、プランテーションに犯された自分たちの土地を回復しようとうことで、実力で占拠し、畑をつくるというパフォーマティブな運動である。

> まあ、学生たちはインテリですから、畑の作り方がわからないので、そこは農民に来

7――― 小田は1954年、松田は1955年生まれ。
8――― 2005年5月5日、分科会「ポスト・ユートピアの民族誌」に関して意見を交わすなか、聞いた言葉。

てもらって——農民たちは陰で「難儀なことだ」とか、「何も知らない奴らだ」と言っていたのを思い出しますが（笑）（石塚2006: 60）。

ここでは、「エリート」である68年世代は、「何も知らない」と呆れられ、その同志である石塚も、陰でそう言われているのを聞いて、笑いながらそれを想起する。

小田や松田が批判し、浜本や四方田が自己もそこに含まれるためか、冷たく距離をとる「エリート」たちは、たしかに、どこか、おかしい。しかし、だからといって、彼ら、あるいは自己を、厳しく批判することで、彼らを夢から覚めさせようとすることしか道はないのだろうか。共感も含めて「可笑しい」ものとして笑うことによって、彼ら／我らの、他人にとって「はた迷惑」かもしれない夢を相対化する契機はないのだろうか。石塚の事例には、そのきっかけがあるように思う。そしてまた、「社会主義」という「見立て」を経る前の「ユートピア」にも、その笑いは見て取れるのだ。

「ユートピア」という「見立て」を生んだ、ユートピア小説は、モアの『ユートピア』（1518年）に始まる。ユートピア的国家に関する思想は、プラトンなど古代の思想家にまでさかのぼることができるだろう。しかし、『ユートピア』は、「大航海時代」の旅行記の全盛によってリアリティを獲得し、出版資本主義の発展とともに、多くの海賊版を生み出し、多くの俗語に翻訳され、字の読めない大衆にも親しまれる物語へと変換されていった。その読者層は、古代の思想とは違って、一部の「エリート」にとどまらず、地域的な広がりもずっと大きかったといえるだろう。

17世紀ごろから18世紀にかけてのユートピアの作者たちは、確かに、「民衆」ではなく、「エリート」であったかもしれない。が、その彼らにユートピアを構想させた人生を追っていくと、生活のため、したくもない家庭教師をして食いつないだり、奇人変人として名を馳せたりしていたことが分かる[*9]。彼らは、実名を伏せて描いたフィクションに、笑いとともに、痛烈な批判をすべりこませた。外国で地下出版させるものもあれば、死後、初めて見つかった作品もあった。彼らは、他人のイデオロギー性をフィクションとして暴いて、自己の「見立て」を絶対的なものとして広めようとするのではなく、社会のイデオロギー性を批判しつつも、自己への距離感とアイロニカルな笑いをも保ち、〈いま–ここ〉を相対化するユートピアをフィクションとして描いた。にもかかわらず、そのフィクショ

9——『ユートピア旅行記叢書』（岩波書店）1-15巻の各巻にある「解説」を参照。

ンの記述自体が、社会的コンテクストの中で、実際に、〈いま–ここ〉だけが実現可能な社会なのではないということを読者に想像させ、実際に社会を変える行動を起こさせる契機となっていった。

ユートピア小説の作者たちは、自己を、真実である絶対的な「科学」や、欠点なしの完璧な構想者だと考えられていたのではない。みじめで不完全な自己へのアイロニーから、欠点を含んでいながらも〈いま–ここ〉よりはマシなものとして、「ユートピア」を構想したのだ。その後、生まれた民族誌にも、似たような効用があったのではないだろうか。「完璧に機能的な社会」でもなければ、変革の主体を担うような「意識化された個人」からなる社会でもない。そのような、欠点含みの個人からなりつつも、「なぜかなんとかなっている社会」の姿が、フィールドワークに基づいて描かれ、別の社会に伝えられることは、「実現不可能な、自己準拠なき反省」の反復に陥ることなく、「ちょっとがんばれば実現可能なオルタナティブ」を構想する手だてとなってきたのだ。

「ユートピア」と「民族誌」は、現実の社会に基づいて描かれた「フィクション」である。それらは、時に、「現実の我々の世界」を批判するために、それを「あべこべ」に描いただけのものであると批判されてきた。そして、実際、そのような操作によって、「退屈」になったものもあるだろう。

が、よくよく読んでみると、ユートピア小説には、「完璧な社会」とはほど遠い、過剰なディテールが描き込まれている。民族誌にも、「有機的な社会」と見なすには余計なディテールが書き加えられている。ユートピア小説も、民族誌も、それらを書くきっかけとなったのは、作者が属していた〈いま–ここ〉を批判するために相対化したい、という願いがあったことだろう。しかし、ユートピア小説作家が、より多くの読者を楽しませるために、そしてまた自分の欲望を満足させるために書こうとすることによって、単純な「あべこべ」を逸した物語が生まれてきた。そして、「現地の人々」にまぎれて生活し続ける人類学者は、当該社会も「完璧」でもなければ「有機的」でもなく、「我々の社会」と、種類こそ違え、同じように欠点の多い人間が住む場所であることに気づかざるを得ない。そして、それを報告するとき、かつて、欠点のない完璧な社会を、素晴らしいものであるかのように想定した自分に対するアイロニカルな笑いが生まれる。それは、シニカルなものとは異なり、ユートピアに夢を抱いた自分への責任感を含んだ笑いである[*10]。そしてそれ

10———「そんななか、私は、1960年代から70年代の、熱い政治の季節を生きた人類学者と、現在のキューバの現地の

を、英雄談として脚色したり、その裏返しの挫折として悲劇化したり、「トラウマ」として沈黙するのではなく、語ることによって、読み継がれる民族誌は生まれたのではないだろうか。だとしたら、私たちは、社会分析にどうしても潜り込んでしまう、ユートピアへの願望を「夢へのお誘い」(浜本 2002b) として否定するのではなく、かといって、ユートピアへの誘いを隠してすべりこませるのではなく、その契機を自覚しつつも、全肯定か全否定のどちらかではなく、距離をとりつつ、参与しながら、民族誌を描いていくしかないのではないだろうか。

少なくとも私は、そのようにとらえることによって、フィールドワークから2年以上が経過してようやく、ソ連崩壊後の「平和時の非常期間」という矛盾に満ちた「社会主義」生活に関するキューバの民族誌を、希望としてでも、アイロニーとしてでもなく、アイロニカルな希望として書くための構えができたのである[*11]。

本稿で一貫して追及された問いは以下である。

・純学問的な営みの追求と政治的な問題意識は接合不可能か

[たぬまさちこ・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員]

人びとが、自分たちをアイロニカルに語ることの意義を考え直した。彼らのアイロニーは、私たちが、ソ連崩壊後に、事後的に、「結局あれは失敗だった」というのとは同じアイロニーではないのだと、遅ればせながら認識した。それは、当事者として、人生の何十年もの時と労力をかけてつくりあげたものが、うまくいかないことへの、哀惜だけでなく、責任を含んだ笑いだったのだ。それを悲嘆としてのみ語るとしたら、彼らはもう、それを諦めたことになるだろう。が、そこに笑いがあるとき、彼らは、その目標への希望と愛情を、まだ捨てきってはいないのだ」(田沼 2006b: 222-223)

11 ——— 田沼2006aに収録された「YUMA——ハバナで望む、ここではないどこか、私ではない誰か」は、そのような試みの一端である。

［文献］

Clifford, J. and G. Marcus (eds.) 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley et al: University of California Press.

Howthorn, H. B. 1963 Utopias and Durability in Literature and Reality. in *International Journal of Comparative Sociology*. Leiden: 50-56.

Sklair, Leslie 1977 Ideology and the Sociological Utopias. in *The Sociological Review* 51-72.

東浩紀、笠井潔　2003『動物化する世界のなかで：全共闘以降の日本、ポストモダン以降の批評』集英社

石塚道子　2006「地に呪われたものは立ち上がったのか——マルティニクの煩悶」『ポスト・ユートピアの民族誌』51-66

小田亮　「日常的抵抗」論の可能性—異種混淆性／脱領土化／クレオール性再考—
http://www2.ttcn.ne.jp/~oda.makoto/teikouron.htm

大杉高司　2006「映画『Intervista』と人類学」『ポスト・ユートピアの民族誌』131-135.

太田好信　1998「トランスポジションの思想に向けて——日本における『ポストモダン人類学』批判以降」『トランスポジションの思想：文化人類学の再想像』世界思想社、pp.175-272.

——— 2003『人類学と脱植民地化』岩波書店

春日直樹　2006「贈与と商品、反復と差異」『ポスト・ユートピアの民族誌』181-193.

北田暁大　2005『嗤う日本の「ナショナリズム」』NHKブックス

スタインホフ、パトリシア　2003『死へのイデオロギー：日本赤軍派』岩波書店

田沼幸子（編）　2006a『ポスト・ユートピアの民族誌：トランスナショナリティ研究　5』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

——— 2006 b「ふたつの研究会をめぐるエスノグラフィック・ノート——アイロニーを超える力」『インターフェイスの人文学——05年度〈若手研究者集合〉報告書』215-224.

浜本満　2002 a「「抵抗」のなりたち」Feb 20
http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/fragmentary/resistance.html

——— 2002b「反論来たぞ、日常的抵抗論」Apr 05
http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/fragmentary/resistance2.html,

——— 2005「自らの／他者の行為を『抵抗』として眺めること」京都大学人類学研究会月例会、4月28日

マーカスとフィッシャー 1989（1986）『文化批評としての人類学』紀伊國屋書店

松田素二　1996『都市を飼い慣らす：アフリカの都市人類学』河出書房新社

雄（ペンネーム）　ブック・ナビ★書評と雑学と本の総合リンク集
http://www.book-navi.com/book/syoseki/highschol.html（1947年生まれ、某出版社勤務。）

隴を得てまた蜀までも得てみたら
多史料時代のベトナム史研究展望

蓮田隆志

《要旨》

近20年でベトナム史研究を取り巻く環境は大きく変化した。とりわけ、近世以降の時代について、史料状況が激変した。史料の増加という、歴史研究者にとって福音と呼びうる事態の到来のなか、外国研究という枠組みの持つ拘束性が逆に浮上してきた。史料への密着度をウリとしてきた日本のベトナム史研究は、その史料の多さのゆえに、従来の方法論に忠実であろうとすればするほど、逆に史料の拘束を強く受けるようになってきた。蜀を望んでそれを得たのである。この状況から逃げることは許されない。

日本が比較優位を持つ文献学の伝統を生かすことが一つの道であろう。個別実証が扱う個別の事象の意味を、グラウンドセオリーに対置させることで、安易な一般論の横溢に歯止めをかけることが可能である。日本的ベトナム史研究を、日本の歴史学にのみ奉仕する鎖国的歴史学に留めぬためには、ベトナム本国を含めた、他地域の研究成果のみならずそのスタンスとも真摯に向き合わねばならない。相手を尊重する姿勢を通じて行われる対話の上にこそ、グローバルなベトナム史研究は築かれねばならない。

《キーワード》外国研究、史料、分業、方法論と作法

はじめに

1994年、ベトナム戦争後最初の外国人による村落研究調査団が、ベトナムでフィールドワークを開始した[*1]。彼らは、ある一村落で20点以上の碑文と大量の村落文書とに邂

1——この調査（主要調査村の旧名に因んで「バッコック・プロジェクト」と通称される）は現在も継続されている。この調査は、日越双方から歴史学だけでなく、人類学、地域研究、社会学、考古学、農学、建築学など多様なディシプリンの研究者が継続的に参加する学際的総合研究プロジェクトである。筆者も、1996年以来、6度に

逅した。いずれも学会未公表で、戦乱と社会主義化の過程とで烏有に帰したと了解されていたものばかりだった。以降、ベトナム側の開放政策と相まって進展した村落での臨地調査によって、大量の在地史料が「発見」され、「史料革命」と称されるまでに至った。従前、《少ない史料を如何に読み解くか》で格闘していた歴史研究者は、一転して《大量の史料をどのように扱うか》で頭を悩ませねばならなくなった。21世紀に入っても、在地史料の発見報告は数を増し、デジタル化や出版ブームによる公刊も飛躍的に進んだ。加えて、政治的理由から公開が絶望視されていた王朝時代の行政文書類すら閲覧が可能となった。史料「革命」から20年経たずして、再び「革命」的事態が出来してしまった。

歴史学にとって、史料の質と量とが研究水準を左右する一大要素であることは疑いを容れず、史料の激増それ自体は、歴史研究にとって福音の筈である。ながらく史料の不足に悩まされてきた歴史研究者たちは、この状況を歓呼して迎えた。

しかし、2度目の「革命」は事態を一変させた。とりわけ《日本人》研究者にとっては、複雑かつ皮肉な状況を招来しかねない様に思う。密度を増した史料群は例えば、「18世紀北部ベトナムでは〜」という程度の括りすら、「安易な一般化」として許さないかも知れない。地域研究Area Studiesの影響を濃厚に受けた《現地主義・個別性の重視》と漢字・漢文の素養を生かした一次文献への密着を通じての《実証主義》とを掲げた日本のベトナム史研究は、確かにその方向を目指したはずだったし、この看板をもって欧米やベトナムの歴史研究者と渡り合ってきた。しかし、この方向をさらに追求したとき、その過程で大量に生産されるであろう論文は、《日本の学界》において、「マイナー地域の些末な事象を追求して何の意味があるのか？」という批判を退けうるであろうか。《多史料時代》に突入したベトナム史研究において、《日本の》研究者が採りうる方向性を探ってみたい。

1. 隴を得たり ——近世史料革命——

ベトナムは漢字文化圏に属し、前近代の現地史料は基本的に漢文で書かれていた。しかし、その絶対量・密度ともに中国や日本と比べて遙かに及ばなかったため、数少ないベト

わたって参加しており、報告書『百穀社通信』がベトナム村落研究会より第11号まで刊行されている。本プロジェクトの概要紹介としては［柳沢2003］がある。

ナム史研究者たちは常に史料の問題に悩まされ続けてきた。70年代以前、数少ない日本のベトナム史研究者たち[*2]は、日本に豊富に存在する中国史料[*3]を活用する方法を採った。ベトナム史料の記述を、日本に所蔵される多数の漢籍を縦横無尽に博捜・駆使することでクロスチェックするところに彼らの本領があったといえる。しかし、これでは研究領域は、どうしても中国との関係史や比較史が中心とならざるをえなかった。

ドイモイの開始によって、80年代後半から外国人研究者がベトナムに長期滞在できるようになった。ほぼ同時に、文書館も一部を除いて外国人の利用を認めるようになり、史料の利用状況も改善の兆しを見せた。だが、文書館所蔵史料は「史料革命」の主役ではなかった。革命は文書館の閲覧室で起こったのではない。ムラの長老宅の居間で起こったのだ。

ここで冒頭のエピソードに戻る。1994年に調査団が邂逅した史料群には様々なものがあったが、多くが18世紀後半以降のもので、15世紀以前のものは殆ど無かった。史料の種類は大きく分けて2つある。一つは碑刻文である。寄進碑や没後の後生を願う后仏碑・后神碑、社寺の修築記念碑などが殆どである。フランス植民地当局が拓本の形で大量に収集し、戦後も収集が続けられ、ハノイの文書館に保管されている。十分に活用されていたとは言い難いが、その存在は知られていた。もう一つは要するに紙（一部は絹布や銅板）に書かれた村落文書類である。

後者の史料群も、かつて存在したであろうことは誰でも知っていた[*4]。しかし、現存しているとは誰も思わなかった。戦乱と社会主義化、とりわけ土地改革の過程で多数の宗教施設が破壊されたことや地主（と認定された人間）が処刑されたことは、中国の例から推しても容易に想像されるところであった[*5]。実際、このムラでも多数の宗教施設が

2——より正確に言うならば、ベトナム史研究「も」行う研究者。当時は草創期だったこともあって、国別の専門分化が進んでいなかったことや、国別の枠組みをとらない中国史料の性格から、当時の「南洋」地域全般を扱った。

3——奈良朝以来の歴史を持つ日本の漢籍収集は、結果として、中国本土にも現存しない貴重で良質な文献を多数日本に保存することになった。

4——戦前に収集した文書類を用いてなされた研究として［山本1940, 1961, 1963］がある。山本氏が収集した文書は、1936年に当時の仏印に渡航した際に収集したものである。収集方法は未詳だが、少なくとも一部は購入している［山本1940: 383］。また、その殆どは氏の自宅が空襲に遇った際に焼失した。

5——教条的な基準による地主認定と処断は社会の混乱を招き、一部地域では暴動にまで至った。その結果、ホー・チ・ミンが行き過ぎを認めて公式謝罪し、チュオン・チン書記長が解任される事態にまで発展した。なお、漢字文献や伝統文化財の残存状況はムラ毎にかなりのばらつきがある。鄙見では、戦乱の影響の差だけでなく、土地改革など一連の社会主義化・集団化を指導したムラレベルのリーダーの裁量の差がかなり大きな要因としてある。

破壊されたり農業合作社の倉庫に転用されたりしていた。族譜や土地買得文書は、その所蔵が知られれば地主認定に直結し、生命の危険に晒されかねない種類の文書であった。また、中越戦争で頂点に達する中国との関係悪化は、ナショナリズムと結びつき、政府をして漢字語排撃キャンペーンを張らせるにまで至った。そのような中で、漢字文献を所持することは極めてリスクの高いことだった。ハノイの文書館には多数の家譜や土地売買文書が所蔵されているが、これもどうやら土地改革前後に地主認定を恐れた人々によって放出されたものが多く含まれているようである[*6]。

しかし一方で、古老達への聞き取りからは、戦災（主に抗仏戦）に遇って避難する際に、この種の文書を持って逃げたとの証言が多数得られる[*7]。もちろん、所蔵者達は「史料」としてこれらの文書を所持し続けてきたわけではない。あくまで研究者が勝手に「史料（資料）」と認定しているだけである。ムラ人たちが、これらの文書類を如何に重要視していたのか、そのような思いこそが我々90年代の研究者をして、これらの「史料」群との対面を可能ならしめたのだ。

この新しい史料たちと対面した日本人歴史研究者達は、どのような学的成果を生み出したのだろうか、いくつか例を挙げてみよう。村落史料は当然にも、中央の編纂史料にはあまり出てこない地方村落社会の様子を活き活きと伝えてくれる。同族結合や村落共同体のあり方や変化について、史料に即した具体的議論［八尾1998；桜井1999a；嶋尾2000, 2001］が提示されるようになった。家譜を用いた同族結合（ベトナムではゾンホという父系親族集団）に関する嶋尾の研究は、文化人類学の成果［e.g. 末成1995, 1998］とも連動しながら、その独自性と歴史性を明らかにしつつある。村落社会についても、桜井がバッコック史の再構成から、ベトナムにおける「伝統的」村落の出現が19世紀前半であるとして、文書館所蔵史料に依拠した前著『ベトナム村落の形成』（1984）での結論を修正した。一方で八尾は、訴訟文書の分析から、東アジア前近代社会と同時代のベトナムとの類似点を指摘し、両者の差異を強調する議論に警鐘を鳴らした[*8]。古老達の証言からは、1960

6――漢文・チューノム研究院（漢字やチューノムで書かれた古文献を専門に扱う研究機関）所蔵の史料に関しては、所蔵記号から仏領期に収集されたものか、独立後に収集されたものかが判別できる。

7――但し、文書や宗教施設の消失についても戦災を挙げることが多く、土地改革や集団化時期の破壊を口にするケースは少ない。

8――但し、八尾はベトナムが東アジアの一部だとして「所属地域替え」を主張しているわけではない。仮に東アジアと東南アジアという2つの地域が実態概念として歴史的に存在したとしても、北部ベトナムはその境界地域に位置するのであるから、類似点があって当然である。

年代に至っても、村落での漢字教育は存続していたことが判明し、さらには革命後の「越南民主共和拾参年」(1957) 付の漢文丁簿（人丁簿）までも発見された[*9]。

これらから窺えることのひとつは、村落における漢字文化の定着度である。戦前の東洋学・植民地学が、ベトナムを中国のデッドコピーと見做した反動として、マルキシズムの影響を受けたナショナリストの歴史学は、漢字文化をまったき外来文明と見做した。外来文明は表層を覆っているだけで、その下には基層文化があり、それこそがベトナム文化の本質だと主張した。そして、そのような「本質」は、儒教をはじめとする中国文化に毒されたハイカルチャーではなく、庶民文化において濃厚に息づいていると考えた。それゆえ、例えばチューノム[*10]を用いた文芸が高く評価されることとなった。

ところが、これらの文書群（と人々のそれへの愛着）は村落レベルにも漢字文化がしっかりと根を下ろしていることを如実に示している。よくよく注意してみると、金石文も20世紀の紀年を持つものが非常に多いことに気付く。庶民文化の中で漢字文化が花開いたのは、実は20世紀ではないかとすら思わせるものがある。漢字・漢文とチューノムとを総称するハンノム Hán Nôm（漢喃：Nômは口語の意味）という単語がある。筆者は寡聞にしてこの語の初出を知らないが、少なくとも上記の諸事例は外来文明（Hán＝漢）と土着文化（Nôm＝喃）とが、それほど截然と区切れないことを教えてくれる。このような成果は、フィールドワークと村落史料の収集（および科学研究補助金をはじめとするそれを支える日本の経済力）なくしてはありえないものであった。

2. 蜀も得てみたら ——「革命」再び——

前節でみたように、バッコック・プロジェクト以降、明らかに日本のベトナム研究は変わったのである。生文書を用いた分析など、かつては全く想像できないことだったが、いまや逆である。研究者は、かなりの高率で村落文書に出会うことが可能だと「予測」して村落に出向く様になった。そして、（自分が期待した種類のものかどうかはともかく）そ

9——2002年12月26日、ナムディン省ヴバン縣DT社（仮称）にて実見。越南ベトナム民主共和国（1945-76）は、現在のベトナム社会主義共和国の前身。いわゆる北ベトナムのこと。

10——ベトナム語を表記するために作られた改造漢字。

の予測はあまり外れない。また、外国人の村落調査解禁とほぼ時期を同じくして、ベトナム人研究者も村落調査へと出かけるようになり、新出史料の発見報告が相次いだ。欧米の研究者も博士論文執筆のためにベトナムに長期滞在し、史料収集を行うことが当然となった。

この趨勢は21世紀に入って益々加速している。とりわけ大きいのは、史料の公刊形態とペースの変化である。従来、ベトナムでの歴史史料の公刊は、様々な制約から、ベトナム語訳（および漢字音をクオックグーで表記した翻音 phiên âm）が基本で、影印や翻刻の形で、原文が提供される形は少なかった。原典主義の日本人研究者は、この段階ではむしろ原文がないことを残念に思い、参考情報としては利用しても、これに依拠して研究を進めることはできなかった。しかしながら、ベトナムの経済成長による経済的余裕と印刷技術の進歩による低廉化がハードルを引き下げた。さらにはドイモイ以降の政策転換によって、村落文書に対する評価が一変して文化遺産と見做されるようになり、ユネスコなど国際機関も出版事業に大量の補助金を支出するようになった[*11]。地方出版も増加し、公刊された史料の絶対数はこの数年で劇的に増加した。

加えて、文書館所蔵史料についても、同様の経緯から公刊が進展した。その白眉は漢文・チューノム研究院の所蔵にかかる10万点以上の碑文拓本を影印本の形で出版する計画［Trịnh Khắc Mạnh et al. 2005-］である。すでに第7巻までが出版され、（索引も目次もないとはいえ）一挙に4000点もの碑文が公開されたことになる。これまでは不完全な目録［Nguyễn Quang Hồng 1992］か先行研究の記載を頼りに、文書館で一点ずつ実見せねばならなかったものが、居ながらにして総覧できるようになったのだ[*12]。

その他の史料の公刊も陸続として進んでおり、いまやベトナム史研究者は、自分たちが直接収集した村落史料も含めて、押し寄せる史料の波に溺れかねない状況となっている。増加した史料群は、前節で述べたように「宝の山」である。現実に量産されているわけではないが、「1870年代の○○ムラの×△について」という論文ならいくらでも書けそうな

11——一例としてハイズオン省のディン族の家譜を影印対訳形式で出版した［Đinh Huy Tụ 2003］。この家譜出版計画はシリーズ化して継続しており、ユネスコの援助も受けている。

12——しかもこれにはやっかいな「おまけ」が付いていた。極東学院が収集した拓本のうち、初期5000点については、10％以上の高率で拓本の年号記載が偽造され、古く見せかけられていることが判明したのだ［Nguyễn Văn Nguyên 2006］。それ以降の収集分は「安全」らしいのだが、そもそも10万点以上にのぼる碑文の原碑を確かめたとも考え難い。また、初期の5000点には原碑が失われたものもあろうが、それについてどうやって確かめたのかもよく分からない。つまり、出版されたそばから「そのままでは使えない」史料に化けてしまったのだ。

気配である。とはいえ、「Aムラではこうだ」という論文は書けても、他にも史料が多数あることが分かっているので、史料への密着度と実証度を重視すればするほど、それより広い範囲を論ずることが難しくなるというジレンマに突き当たる。

ここで採りうる選択肢は、差し当たって2つある。ひとつは欧米、とりわけ英語圏の研究者が以前から採用していた方向性である。博論の執筆やサバティカルなどの機会を利用して現地に滞在し、史料は収集する。そこで収集した史料を用いてモノグラフも執筆する。しかし、基本的方向としては、むしろ史料への密着度を下げて史料への依存度を減らし、大きな枠組みを論じる方向である。そして、このアプローチは世界的に拡大しつつある。

いまひとつは、地域や時代、あるいは問題を限定することで扱う史料の範囲を限定し、それによってそれぞれの史料への密着度を維持した形で研究を進める方向だ。日本のベトナム史研究者にはこちらの方が親和性が高い。これまでの日本人研究者の「ウリ」(の少なくとも一端) もこの点に存した。「ベトナム史研究」に限れば、日本人研究者のもつ利点は中国史・日本史の成果を直接利用できることであろう。これらの分野は日本が比較優位を保っている。とりわけ、史料操作についての蓄積が重要だろう。村落史料だけでなく、文書館所蔵の史料を含めたベトナム史料全般について、未だその史料操作・史料批判の方法論が確立していない。ベトナムにおいては、史料批判や考証といった文献学自体が古文献学者 (ハンノム学者) の仕事として歴史学者から切り離される傾向にある。これ自体は単なる分業であって、必ずしも批判すべき事柄ではないが、清朝考証学と江戸漢学の伝統を受け継ぐ日本の漢文東洋「史」の遺産を活用することで、日本の研究者はベトナムのハンノム学者とは別の視点をもって斯界に貢献することが可能になろう。

このアプローチのもつ問題は、外国人研究者が、日本の地方史 (地域史) 研究さながらに、史料に密着した研究を行ったとして、果たして評価が得られるのかと言うことである。緻密な実証研究に対する評価が他国に比して高いとされる日本の歴史学界においてすら、そのような論文が他地域・他分野研究者の評価を得られるかどうか、やはり疑問符が付く。理系さながらに「学問に国境はない」と主張することももちろん可能だが、それはしばしば先進国の学問作法の押しつけに繋がる[*13]。一方で、「ベトナム人の研究だから」

13——やや文脈は異なるが、フィリピン革命の英雄ボニファシオをめぐる論争とその帰結 [永野2000] は、グローバルな (とはいいながらも事実上先進国が主導する) 学問世界とリージョナルなそれとの関係の孕む問題を考える上で、示唆的である。

「アメリカ流だから仕方がない」などと切り捨てて、日本の中だけに留まることは許されない。それは日本のベトナム史研究が世界から無視されることを意味し、日本の歴史学界においても生き残れないだろう。

もちろん、それぞれのケーススタディは、より大きな問題へ繋がっていくべきものだし、部屋で地図と村落文書だけ眺めていても湯水のように論文が書けるわけではない。しかしながら、大きな問題に繋がること自体を前提とするアプローチは、個別の問題に「その背後にある筈の大きな問題」に対する評価を投影する危険性を孕んでいる。マルキシズムや発展段階論の機械的適用が批判されたのは、ごく最近のことである。それぞれの歴史事象の持つ個別性の重み、それを忘れた歴史学、ひいては人文学は、単に常識をひっくり返すことのみを目的とする衒学へと堕するだろう。実用性（その中味はとてもご都合主義だが）が叫ばれる今だからこそ、その時々の《現場》に密着する個別研究の意義を、その個別性の上において正当に評価する必要がある。

おわりにかえて

個別実証とグランドセオリーとの関係が、相互補完的であることは自明のことである。よって、「どうするべきか」について、筆者の個人の態度は取り立てて新味のあるものではない。地道に史料を読んで、「できるところからやる」だけである。しかし、日本人は個別実証が得意だから、それだけやっていればいいなどと主張したいわけではない。それぞれの地域でそれぞれ個性あるベトナム史研究が展開されており、長所も短所もある。日本の方向性については前節で筆者なりの提言をした。問題は、それらが「分業」「個性」の名の下に、事実上無視し合ってはならないと言うことである。多様なベトナム史研究が、相互に刺激を与え合うことで、先進国基準の押しつけではない、「グローバルなベトナム史研究」を生み出すことは可能だろうか。仮にそれが可能だとしても、本稿はあくまで《日本の》研究者からみた研究状況の一断面である。その意味で、リージョナルもしくはナショナルな視点に立っている。であるならば、さらにその先に、グローバルな学問世界とリージョナルな学問世界との関係はどうあるべきか、という問題が浮上しよう。

バッコック・プロジェクトのリーダー桜井由躬雄は「私たちのベトナム研究は本当になにもないことから始まって、そしてなにもない時代がひどく長くて、わずか数年前、つま

りバッコック研究開始（1994）前後から急激に研究環境の整備を獲得した。」と述懐している［桜井1999b: 2］。さらに後段で桜井は、自分たちの研究（99年頃のバッコック研究を含めたベトナム研究全体）に、「なにもない時代」の自分が持っていたような主張が欠けており、金持ち国の道楽に堕しつつあると危機感を表明している。バッコックから研究をスタートさせた筆者の世代は、（少なくとも量的には）十分すぎる史料を目の前にして狼狽える、ある意味で「なんでもある」「多史料時代」からの出発である。多史料の山にどう立ち向かうか、その姿勢自体がひとつの主張であり、その主張を紡ぎ出すのは研究者個人の仕事であろう。だが、その主張を共有するためには、「何語で発表するのか」といった技術的な問題を含めて、多くの課題が存在している。若手研究集合での場作りの経験はヒントを与えてくれそうだ。

［はすだたかし・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員］

［参考文献］

Đinh Huy Tụ. 2003: *Đinh Tộc Gia Phả: Hàn Giang - Hải Dương*. Nguyễn Văn Nguyên（dịch và chú thích), ĐHQG Hà Nội, TTNCVNGLVH, Chương trình Nghiên cứu Gia phả 1, Hà Nôi: Nxb Thế giới.

桃木至朗 1984：「日本におけるベトナム前近代史研究の成果と課題 —独立王朝期の時代区分をめぐって—」『新しい歴史学のために』175、pp.9-19。

桃木至朗 2003：「東南アジア史研究の過去・現在・未来」早瀬晋三＆桃木至朗（編）『東南アジア史研究案内』（岩波講座　東南アジア史別巻）、岩波書店、pp.1-14。

永野善子 2000：『歴史と英雄 ——フィリピン革命百年とポストコロニアル』お茶の水書房。

Nguyễn Quang Hồng（chủ biên) 1992: *Văn khắc Hán Nôm Viêt Nam: Tuyển chọn – Lược thuật*. Hà Nội: Nxb KHXH.［『ベトナムの漢喃碑刻文 選録・略述』］

Nguyễn Văn Nguyên. 2006: Thực trạng vấn đề ngụy tạo niên đại trong thác bản văn bia Việt Nam. *Tập chí Hán Nôm*. 74, tr. 28-34.［「ベトナムの碑文拓本における年代偽造問題の実情」『漢喃雑誌』74］

桜井由躬雄 1999a：「19世紀東南アジアの村落」浜下武志（編）『アジアの〈近代〉』（岩波講座　世界歴史20）、岩波書店、pp.119-148。

桜井由躬雄 1999b：「はじめに —初志にもどるということについて」『百穀社通信』9、pp.1-3。

嶋尾稔 2000：「一九世紀 —二〇世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」吉原和男＆鈴木正崇＆末成道男（編）『〈血縁〉の再構築：東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社、pp.213-253。

嶋尾稔 2001：「ベトナム村落と知識人」小島毅＆伊原弘（編）『知識人の諸相：中国宋代を基点として』勉誠出版、pp.107-117。

嶋尾稔 2004：「20世紀初頭ベトナムの通史について」根本敬（編）『東南アジアにとって20世紀とは何か ——ナショナリズムをめぐる思想状況——』（AA研東南アジア研究 第6巻）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.167-189。

Shimao, Minoru & Sakurai, Yumio. 1999: Vietnamese Studies in Japan, 1975-96. *Acta Asiatica* 76, pp.81-105.

末成道男 1995：「ベトナムの「家譜」」『東洋文化研究所紀要』127、pp.1-42。

末成道男 1998：『ベトナムの祖先祭祀 ——潮曲の社会生活——』風響社。

高田洋子 1989：「日本におけるベトナム史研究の総括と展望」『アジア・アフリカ研究』29-3、pp.43-80。

Trịnh Khắc Mạnh & Nguyễn Văn Nguyên & Papin, Philippe. eds. 2005-: *Tổng tập thác bản văn khắc Hán Nôm / Corpus des inscriptions anciennes du Việt-Nam / Corpus of Ancient Vietnamese Inscriptions.* Hà Nội: Viện Nghiên cứu Hán Nôm.

山本達郎 1940：「安南の不動産売買文書」『東方学報』東京11、pp.370-383。

山本達郎 1961：「越南の家譜」和田博士古稀記念東洋史論叢編纂委員会（編）『和田博士古稀記念東洋史論叢』、pp.1039-1050。

山本達郎 1963：「嘉隆二年の田土丈量文書」岩井博士古稀記念会（編）『岩井博士古稀記念典籍論集』大安、pp.872-879。

八尾隆生 1998：「黎末北部ヴェトナム村落社会の一断面 —ナムディン省旧百穀社の事例—」『南方文化』25、pp.113-132。

八尾隆生 2003：「もう一つのヴェトナム近現代史 ——ヴェトナム前近代史史料の歩んだ道——」『歴史と地理』566（世界史の研究196）、pp.29-35。

柳澤雅之 2003：「地域研究と村落調査」早瀬晋三＆桃木至朗（編集協力）『東南アジア史研究案内』（岩波講座 東南アジア史 別巻）、岩波書店、pp.111-116。

異質なものの関係を考える
ジャック・ランシエールの哲学から

家高　洋

《要旨》
現代フランスの哲学者ジャック・ランシエールの政治哲学の中心的な概念は、平等である。ランシエールにとっての平等は、その実現が目指される「目的」や「本質」ではなく、「前提」であり、それ自身は「空虚」である。だが、この平等は、カント的な理念でもなく、抵抗的な個々の言動において把握されうる。平等についてのこの独自の概念構成によって、ランシエールは、現代における思想的な批判の一つの可能性を示している。本稿の目的は、政治哲学の主著『不和』と『無知な教師』の行論を再構成することによって、ランシエールのこのような思想の可能性と意義を示すことである。
《キーワード》ランシエール、政治、平等、批判、ディセンサス

はじめに

ジャック・ランシエールは、現代フランスを代表する哲学者の一人である。1940年にアルジェで生まれ、学生時代からアルチュセール派として知られていたが、70年代中頃には師のアルチュセールと訣別し、以後独自の道を歩んでいる。

ランシエールの主なテーマは、政治哲学と、歴史論、美学（文学論、映画論ほか）である。また19世紀フランスの労働者運動に関わる様々なドキュメントを編集して出版したことでも知られている。

近年、ランシエールの思想の紹介が増えてきた。特に最近は政治哲学からの解説が多く、共同体論などの現代フランス思想の文脈で語られている[*1]。しかし、ランシエール

1――例えば、松葉（1999）、澤里（2003）など。

の政治哲学の思想は、政治的なトピックに限定されない可能性があると筆者には思われる。以下、筆者がランシエールに関心をもった次第を説明して、本稿の問題意識を明らかにする。

ランシエールについて筆者が最初に知ったのは、筆者が関わっていたあるプロジェクトにおいてランシエールが招聘された時であった[*2]。このプロジェクトの目的は、(医療を含む)科学技術の様々な領域における専門家と非専門家の関係の再検討や、協働の支援の試行であった。筆者の一つの関心は、専門家と非専門家のあいだのコミュニケーション・ギャップにあった。このようなギャップは、専門知識をわかりやすく非専門家に伝えることでは必ずしも解決されない場合が多い。このギャップを消去していくというよりもむしろ、このようなギャップを介して、専門家と非専門家の関係が変化し新たな関係が生み出されることがあるのではないか、と当時筆者は考えていた。

ランシエールは2004年の1月に来日し、大阪大学で「デモクラシー、ディセンサス、コミュニケーション」という講演を行った(Rancière, 2004b)。そのなかで(コンセンサスの反意語である)〈ディセンサス(le dissensus)〉をランシエールが強調していたことが印象に残った。科学技術における様々なコミュニケーション・ギャップやそこから生じる事件や出来事について、社会的・文化的・歴史的な原因の分析や状況の解明は社会学や科学論において行われているが、ランシエールはコミュニケーション・ギャップや〈ディセンサス〉自身についてのより広い思想的な考察を行っているように思われたのである。

〈ディセンサス〉は、上記の講演で〈不和(la mésentente)〉とも言い換えられているが、この〈不和〉は、1995年に出版されたランシエールの政治哲学の主著の名前でもある[*3]。〈不和〉は、言葉が不正確であるがゆえに生じる誤解(le malentendu)ではないし、無知や故意のごまかしや作為的な錯覚の結果生じる無理解(la méconnaissance)でもない(M. 12)。つまり、わかりやすい正確な知識を補充したり、個人の態度を変更すれば、〈不和〉がなくなるとは考えられていないのである。

〈不和〉における対話者たちは、「同じ言葉で同じ言葉を理解していると同時に理解して

2——— 文部科学省科学技術振興調整費・科学技術政策提言「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」(2002〜2004年)研究代表者:鷲田清一(大阪大学)

3——— これは、Rancière (1995) である。以下、本書からの引用は、文中の丸括弧内にM.と略記し、原著の頁数と併記する。なお、この『不和』には邦訳(松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳、インスクリプト、2005年)がある(本稿での訳文は、必ずしもこの邦訳に従っていない)。

いない」(M. 13) とランシエールは言う。これは、ややレトリカルな言い方あるが、要するに、その対話者たちの言い争いの内容よりもむしろ、言い争いへの参加者があらかじめ限定されていることが〈不和〉なのである。たとえば、誰か抗議しても、それは抗議としては受け取られないような状況そのものに〈不和〉は関わっているのだ。

そして、この〈不和〉を捉えるためにランシエールは〈間違い (le tort)〉という語を一つの軸にして思想を展開しているが、その行論を追っていくうちにディスコミュニケーションの思想的な分析を越えて、より根本的な思想的課題に対してランシエールは貢献しているのではないかと筆者は考えた。

この思想的課題とは、思想的な批判の可能性に関わる問題系である。19世紀末の新カント派以降、哲学においては諸学の基礎付けが大きなテーマの一つとなった。また20世紀前半には知識社会学が勃興し諸学への批判を行い始める。そして、20世紀半ば以降、人類学などの立場から、諸学の正当性に対する自己批判的な動向が生じてきた。その結果、1970年代以降の脱構築的な動向などから、諸学への過剰な自己批判が生じ、そのために現在でも思想的な批判の立場を打ち出すことが非常に困難になっていると考えられる。

というのは、諸学の正当性を批判することが可能であるとしても、その批判的立場自身がまた批判され、そして、このような批判への批判が (原理上) 無限に進行すると考えられるからである。この動向に対しては、思想的な批判の立場自身の暫定的性格を承認するか、あるいは、(言語や概念が到達できない) 経験の絶対的な限界としての「絶対的に他なるもの」を示唆することで、学の存立をその限界的な消失点において保証しようとするかのどちらかの状況になっていると言えよう。これは、哲学だけでなく、(本報告書所収の田沼論文が示しているように) 人類学、科学論、社会学、歴史学なども巻き込んだ動向である。

思想的な批判の立場の可能性というこの課題に対して、ランシエールの思想がどのように関与することができるのか。それを明らかにすることが本稿のテーマである。

本稿の論述は、次のように進められる。まずランシエール独自の〈政治 (la politique)〉の概念を説明する (第1章)。さらに、〈政治〉、〈不和〉という事態の論理的な構造を再構成する (第2章)。そして、ランシエールの思想的な意義と可能性を明らかにし、そのあとで、思想的批判の例を見てみたい (第3章)。

1. ランシエールの〈政治〉について

1.1〈政治〉の二つの例

政治哲学におけるランシエールの関心の中心は、〈平等（l'égalité）〉にある。ランシエール独特の概念〈政治〉は、〈平等〉を実現しようとする際の言動に存している。そして、この言動が引き起こす争論や係争が〈不和〉という状態である。まず、主著の『不和』で挙げられている〈政治〉の典型的な例を見てみよう（M. 45-50）。それは、ティトゥス・リヴィウス（59B.C.-17A.D.）の『ローマ建国史』で取り上げられた平民の反乱の例である[*4]。

> 貴族たちが戦争から戻ってきたとき、ずっと不満を抱いていた平民たちはアウェンティヌスの丘へ逃亡し、立てこもった。元老院の命を受けた一人の議員の貴族が使者としてそこに向かい、平民を説得しようとする。
> そもそも妥協するつもりがない貴族の主張は単純なものであった。平民は話さないという単純な理由から、平民と討議する場はないということであった。平民は、名前を持たない存在であり、ロゴスを欠いた、つまり都市国家への象徴的な登記を欠いた存在であるがゆえに、話さないのである。平民たちは、純粋に個人的な生を生きているのであり、個人的な生は、生命そのものを除いては何ひとつ後世には伝えない。名前のない者は話す可能性がないのである。
> つまり、貴族にとっての平民の言葉とは、はかないものであり、すぐに消える響き、鳴き声の一種、欲求の知らせであって、知性の表明ではないのである。したがって、名前を持ち話すことができる貴族と、名前を持たず声を出すことしかできない平民のあいだには、討論を行う基盤が元々存在しない、と貴族たちは考えていたのであった。しかし、平民たちは、自らを貴族と同じ言葉を持つ「話す存在」であることを使者の貴族に示した。すなわち彼らは、神託を受けるために自分たちの代表を送るときに、その代表に名前を付けたのである。それによって平民たちは、自らを話す存在とし

4——これは、19世紀フランスの社会思想家ピエール＝シモン・バランシュが取り上げたヴァージョンに基づいている（M. 45）。

て、つまり単に欲求や苦痛や憤慨を表すだけでなく、知性を表明する言葉を与えられた存在として姿を見せたのであった。ここには、ローマの都市における新しい秩序の創設が示されているのである。

ランシエールはこの出来事の要点を以下のように考えている（M. 45-50）。元々貴族たちは、貴族と平民では言葉が不平等に配分されていると考えていた。ところが、分配が不平等であることを平民が理解することができた瞬間に、まさしく必然的に平民と貴族とは平等だったのである。

（平民が言葉を理解して話すという）ある特異な示威的な言動（la manifestation）の場面が出現することによって初めて、（平民と貴族とのあいだの）平等が有効になる。この行動が、ランシエールにとっての〈政治〉である。言動としてのこの〈政治〉が生じることによって、貴族が支配する社会秩序は、純粋な偶然性にしか基づいていないことが明らかにされる。というのは、「貴族にしか言葉が配分されていないので、貴族が社会を支配する」という貴族側の前提が、平民の言動によって反駁されたからである。この言動は、平等の証明と同時に、平等の場（討論の場）の設立も行ったのであった。

この平民の反乱の逸話を、ランシエール自身、極端なフィクションであると認めているが、この極端なフィクションのなかに〈政治〉が立脚する対話の構造が明らかになっているとランシエールは主張する（Rancière, 2004b, 5）。問題は、貴族たちは平民の言うことを聞くのを拒否していることにあるのではない。貴族が平民を話す存在だとみなさないことが問題なのである。

もう一つの〈政治〉の例を挙げよう。革命後の19世紀フランスでは普通選挙（le suffrage universel）が行われていたが、その時には、女性の立候補の権利が認められていなかった。1849年ジャンヌ・ドロワンは、（自身が女性であるがゆえに）立候補できない選挙に立候補したとき、普遍性（l'universalité）から女性を排除した普通選挙の矛盾を示した（M. 66）。これも典型的な〈政治〉のひとつである。ドロワンの言動は、女性を、普通選挙権と法の前の平等を享受している主権者たるフランス民衆のなかに当然含まれるべきものとして、それと同時に根源的に排除されたものとして、自ら示し、証明したのであった。

ドロワンの言動においても、社会における不平等な配分の秩序と、話す存在一般の平等な能力の秩序のあいだの相克、つまり〈不和〉が生じている。ドロワンの言葉は、「理解されていると同時に理解されていない」のだ。ドロワンの言葉は聞かれてはいるのだが、

まったく同意されていないのである。平民の反乱の逸話も〈不和〉の一例である。それは、平民が物音しか立てておらず、その物音を言葉だと貴族が認めない状態を指している。このように〈不和〉においては、話すことが二重化されており、この二重になった各々の話すことは、接点がない状態になっているのである。接点のないもの、共約できないものが同時にある状態を、ランシエールは〈間違い〉と呼ぶ。ローマの貴族やフランスの共和制の指導者にとっては、平民が話すことや女性が立候補することは、〈間違い〉以外の何ものでもなかったからだ。

注意しなければならないのは、この〈不和〉は、複数の利害や観念、あるいは価値のあいだで生じる対立ではないということである。利害関係の対立の場合は、利害という点において、お互いに対立し合っているとしても、共通の場がすでに開かれているからである。つまり、〈不和〉におけるような〈話すことの二重化〉が、この場合には生じていない[*5]。

本節では〈政治〉・〈不和〉・〈間違い〉とランシエールが名付ける出来事を二つの例から見てきた。ところで、哲学にとっての思想的な賭け金は、これらの出来事をどのように概念的に把握するのか（あるいは、どのような思想的な枠組みのなかで捉えるのか）ということにある。次節では〈政治〉を、ランシエールのより広い思想的コンテクストに従って位置付けてみよう。

1.2〈政治〉と〈ポリス〉

さて、通常の意味での政治とは、行政や統治と捉えられるであろう。ランシエールは、これを〈ポリス（la police）〉と呼ぶ。本節では〈ポリス〉と対比することによって、ランシエールの〈政治〉をさらに明らかにしていきたい。

ランシエールは〈ポリス〉を「集団への参加と同意、権力の組織化、地位と職業の分配、この分配の正当化のシステムなどが働くプロセス全体」と規定する（M. 51）。この表現において〈ポリス〉は「国家装置」を意味しているように思われるかもしれないが、ランシエールはそれを否定する（M. 52）。というのは、「国家装置」という観念は国家と社会との対立

5——それゆえに、ランシエールの〈政治〉は、ハーバーマスの討議倫理学の枠を越え出ている。ハーバーマスの立場では、「利害関心の普遍化が可能かどうか」が問われているが、その場合には、すでに誰に利害があるのかが決定されているのである（M. 86）。

が前提として考えられており、厳格な国家秩序を社会生活に押しつけるというイメージが先行しているが、ランシエールにとっての〈ポリス〉の秩序は、国家の諸機能に依存するのと同様に、社会関係において前提されている自発性にも依存しているからである。

ランシエールによれば、〈ポリス〉による地位や職業の配分は、それを正当化する「一般的に不文律な法」、すなわち、〈感性的なもの（le sensible）の配置（la configuration）〉に依存している（ibid.）。〈感性的なものの配置〉とは、感性的なものの〈分割＝共有（le partage）〉とも言われている。これについてランシエールは以下のように説明している（Rancière, 2004b, 4）。

> フランス語のpartageは両義的な語であり、共有と同時に分割も規定している。つまり、共有とは万人が同じものの分け前に与ることであり、分割とは各人が分け前（le part、持ち分）の配分に応じて各自の立場に固定されることを意味する。〈感性的なものの分割＝共有〉とは、その人ができることをその人が何であるかに応じて、またその人が何であるかをその人ができることに応じて循環的に規定する、具体的かつ象徴的な区分なのである。〈感性的なものの分割＝共有〉とは、単に主人と奴隷、領主と自由平民、統治者と被統治者をしかるべき立場に置くものだけではない。〈感性的なものの分割＝共有〉によって何よりもまず感性的な世界の諸形式そのものがそれぞれの場所に配置されるのであり、その形式を通して立場が目に見えるものとなり、言説が聞き取れるものとなり、能力や無能力が明白になるのである。

この〈感性的なものの分割＝共有〉は、〈ポリス〉による「身体の規律化」、あるいはむしろ「身体の現れ方の規則」（M. 52）とも呼ばれる。このようにランシエールは、政治哲学のテーマを言説だけでなく、感性的なもの、あるいは感性論＝美学（l'esthétique）の領域にまで拡げる。〈感性的なものの分割＝共有〉を揺るがすような言動が、ランシエールの〈政治〉なのである。

たとえば、都市の交通路でのデモやバリケードを築く示威運動も〈政治〉である（M. 53）。この運動は、交通路にすぎなかった空間を〈政治的な〉公共的空間に変えている。このように、それまで討議に加わることができず、討議のメンバーとしてもカウントされない人々が、自ら討議の場を作り出すことであれば、それは、どのような仕方であっても〈政治〉と呼ばれるのである。

〈政治〉を言説だけでなく、デモなどの身体的な活動まで拡げていくなかで、ランシエールは、「それ自体で〈政治的なもの〉は何もない」(M. 56) とまで言い切っている[*6]。この主張を明らかにするために、〈政治〉と〈ポリス〉、そして〈平等〉の論理的な関係を解明しなければならない。この論理的関係に、ランシエールの思想の核心が示されているからだ。

2.〈政治〉の論理的な構造

2.1『不和』における〈平等〉

ところで、ランシエールは〈ポリス〉に対する〈政治的な活動〉を次のように規定する。それは、「当事者と分け前、あるいはその分け前の不在が規定されている感性的な配置を、定義上その配置のなかに場所をもたないある前提、つまり分け前のない者の分け前という前提によって打破する活動」(M. 53) である。すなわち、〈ポリス的秩序〉における〈感性的なものの分割＝共有〉という前提に基づいて分け前がない者とされた人々が、実は自分たちも感性的なものを共有していることを暴露し、その結果、〈ポリス的秩序〉が偶然なものにすぎないことを明らかにする活動である。これが、ランシエールの言う〈政治的言動〉である。

この場合、ランシエールは、〈政治的言動〉によって〈ポリス的秩序〉を打破し、それに替わる〈政治〉の秩序を設立することを主張しているのであろうか。言い換えれば、〈ポリス的秩序〉における不平等を露わにし〈平等〉を実現することをランシエールは目的としているのであろうか。

しかし、このことをランシエールは否定する。〈平等〉とは、その具体化が目指されるような「本質」や「目的」ではないとランシエールは言うのだ (M. 57)。だが、(前章で挙げた) ローマの平民や、フランスの女性活動家ドロワンは、それぞれの社会のなかの不平等に憤り、平等を目指して〈政治的な言動〉を起こした以上、〈平等〉とは人々の活動の「目的」であると考えられるのではないだろうか。

6——ランシエールは、隠喩的な表現のなかにも〈政治〉を見出し、論証と隠喩との共同性を指摘する (M. 87)。この議論の成否は、ランシエールの文学論との比較検証をしなければならない以上、別稿の課題としたい。

ところで、〈平等〉が最終的な目的とされる場合、不平等な社会秩序を変革することが目的となる。このとき〈平等〉を実現するための活動、たとえば暴力的な革命も、目的としての平等の実現という理念によって正当化されることになるだろう。だが、ランシエールにとっての哲学の営みは、「正当化」には関わらないのである（M. 11）。

> 科学・芸術・政治その他あらゆる形態の人間の重要な活動を反省によって裏付けるものとして、あるいは正当化によって基礎づけるものとして哲学を描くことには、何らの明証性はない。

ここでランシエールは、西洋のある哲学の系譜——プラトン、デカルト、カント、ヘーゲル、フッサール、そして前期のハイデガー——、つまり、反省あるいは正当化による基礎付けを哲学の目的とする系譜から袂を分かとうとしている。では、正当化される基礎的な概念と関わらないならば、どのように思想を展開しようとするのか。ランシエール自身、明らかに〈ポリス〉に対して〈政治〉を賞揚しているように見える。これはどういう立場によっているのか。ランシエールの行論に立ち返って、より詳細に見てみよう。

問題は、〈平等〉の位置付けにある。ランシエールは、〈平等〉を「空虚（vide）」であると言う（M. 57）。この「空虚」は以下のように解されるであろう。

〈ポリス〉のあり方は各々の時代や地域によって異なっている以上[*7]、その不平等な状態も多様であるために、目指される〈平等〉は、あらかじめ特定されない。つまり、〈平等〉だけでは、その時々の〈政治〉の具体的な言動の仕方は導かれないということを意味していると考えられる。

このために〈平等〉と〈政治〉との関係は次のように言い表される。すなわち、〈政治〉は〈平等〉を目指している以上、〈政治〉の唯一の「原理（le principe）」は〈平等〉であるが、しかし〈平等〉は〈政治〉に固有（propre）ではないと言われるのである（M. 55）。この独特の関係性のために、「〈政治〉には〈政治〉固有の対象あるいは問題は存在しない」とも言わ

7——『不和』の第4章で、プラトン、アリストテレス、マルクスにおける政治思想を、それぞれアルシ・ポリティーク、パラ・ポリティーク、メタ・ポリティークとランシエールは名付けて特徴付けている（M. 93-131）。また第5章では、現在の状況をポスト・デモクラシーと名付け、専門家や官僚主導のコンセンサス社会として批判している（M. 133-165）。

れている（ibid.）[*8]。

このことには、〈平等〉がそれ自身自立した理念あるいは概念ではないこと、つまり、〈平等〉から様々な下位の概念や観念が導き出されるのではないことが含意されている。このために〈平等〉は、「本質」や「目的」ではないのだ。もし〈平等〉が、様々な活動の「目的」とされる場合、いまだに実現されていない〈平等〉が、〈ポリス的秩序〉のなかで実現されうることが前提とされている。つまり、〈平等〉と、既存の社会的な秩序（〈ポリス〉）とは、その存在様式においていわば同次元で連続していることが前提されているのだ。だが、このような前提をランシエールは認めない。ランシエールは、〈平等〉と〈ポリス〉、あるいは〈政治〉と〈ポリス〉はお互いに異質であることを強調するのである。これらの関係を解明するために、我々は、『不和』から離れ、『無知な教師』[*9]の行論のポイントを次節で見てみたい。

2.2『無知な教師』における〈平等〉

『無知な教師』では、19世紀フランスの知的解放（l'émancipation）の理論家・実践家ジョゼフ・ジャコト（1770-1840）が紹介されている。この特異な人物[*10]は、19世紀のヨーロッパの教育界において一世を風靡した教育論を展開したのである。

ジャコトは、「人は、自分が知らないことを他人に教えることができる」ということを大学で教えているときにたまたま発見した。これが、「無知な教師」という逆説的なタイトルの由来になっている。ジャコトは、教えるためには知識が必ずしも必要でないこと、そして学ぶに際しても説明が必ずしも必要でないことを自覚し、実践しつつ理論化していった。

ジャコトの理論からランシエールは三つのことを学んだと思われる。まず第一に〈平等〉の位置付け、そして第二に〈平等〉と社会秩序（〈ポリス〉）との関係、第三に「（通常の）教育活動」がもたらす根本的な弊害である。本節では、『不和』の議論とも直接に関係する第

8——例えば、意見＝世論（l'opinion）が、提示された選択肢のなかから回答を選ぶ場合と、誰も立てなかった問いを発明する場合では、まったく別の構造になっている（M. 56）。

9——Rancière（1987）。以下、この著書からの引用は、文中の丸括弧内にMI.と略記し、原著の頁数と併記する。

10——ジャコトは砲兵隊に所属した後、エコール・ポリテクニークに務め、代議士をしてから、王政復古期（1814-1830）に国外追放され、ルーヴァン大学でフランス文学を教えた。

一と第二の論点を見てみたい（第三の論点については次章第2節で述べる）。

ところで、通常の教育においては、教師（知っている人）が、その知識を、生徒（知らない人）に伝える（説明する）という枠組みが中心になっている。ところが、「自分が知らないことを他人に教える」というジャコトの主張は、この枠組みと正反対である。ジャコトが力説しているのは、「生徒自身の知性を使わせるように生徒を強制する」(MI. 29) ことであり、そのようにして自分が知らないことを自分で学ばせようとするのである。

この理論におけるジャコトの確信は、「すべての人は知的に〈平等〉である」ということだ。それゆえに〈平等〉は「目的」ではなく、「出発点」なのである。「平等は到達されるべき目標ではなくて、出発点であり、あらゆる状況において維持されるべき前提である」(MI. 228-229)」。この考え方は、「話す存在の平等」を主張するランシエールにも引き継がれている。

ところで、「すべての人は知的に平等である」ということは、ジャコトにとっては「すべての人は、本質的に共通の知性を持っている」ということとは異なる。「本質」としての「人類共通の知性」を想定しないところに、ジャコトの理論の独自性がある。たとえば、ある子どもが別の子どもよりも問題を解くのが遅かったとしよう。「人類共通の知性」が想定されるならば、その子どもにおいては、知性が十分に機能していないことになる。この想定は、「知的に平等である」という前提に反するのだとジャコトは言う。「神性や、言語の言語によって与えられたコードが存在しないからこそ、人間の知性は自らを理解させ、隣人の知性が彼に示していることを理解するために、彼のすべての技を使うのである」(MI. 106)。ジャコトは知性ではなく、意志に人間の差異を認める。問題が解けるかどうかも、意志の集中力によっているのである（MI. ch.1)。

このように知性を共通的な本質としないために、ジャコトは、〈平等〉を本質として扱わない。〈平等〉の理解も、〈平等〉の「理念」や「観念」自身によって知解されるのではない。〈平等〉がわかるのは、不平等の存在によって察知されるのみである（MI. 148)。

これは『不和』では次のように言い表されている。「ジャコトにとって、それなしにはいかなる不平等も考えることができない以上、〈平等〉の証拠を示すことは常に可能であるが、それはこの証拠がつねに特異な（singulier）ものであること、〈平等〉の立証の純粋な道筋を毎回反復することという、厳密な条件下においてである」(M. 58)。

つまり、〈平等〉は、それぞれの不平等な社会の状況（〈ポリス〉）において捉えられ、〈政治〉という具体的な言動のなかではっきりと表出されるのだ。そしてこの表出は、表現で

あるだけなく、〈立証 (la verification)〉でもある。すなわち、ローマの平民やドロワンの例でも理解されるように、それぞれの〈ポリス〉での〈感性的なものの分割＝共有〉においては、話す存在の〈平等〉と社会秩序の不平等がずれていることが、〈政治的言動〉によって論理的に明示されているのである。表出と立証の二重性のために〈政治〉は、ランシエールにとって哲学の対象となっているのだ。

「〈平等〉は、それを適応する実践のなかにはっきり見分けられるはずの前提でしかない」(M. 57) という簡潔な定義は、ジャコトの所論を引き継いだランシエールの思想的前提である。この前提をより理解するためには、ジャコトの第二の論点〈平等〉と〈ポリス〉との関係もみてみなければならない。

2.3『無知な教師』における〈ポリス〉と〈平等〉

さて、ジャコトの活動が知られるにつれて、賛同者や弟子も増えてきた。また、オランダの王子がジャコトに関心を持ち、軍隊学校の教師としてジャコトを招いた。軍隊学校の学生たちはジャコトに「教育されること」、すなわち説明を望んだ。元々ジャコトの教育は、そもそも個人を対象としたものであり、その限りで成功していたのであるが、集団教育を対象としたものではなかった。つまり、教育の社会的な制度には馴染まないものだったのである。また、弟子たちが広めた「知的解放の方法」も、説明を与えようとする教育であり、ジャコトの活動の正反対のものであった (MI. ch. 5)。「〈平等〉は、社会組織や国家組織の地位に登録されることを望むや否や、逆のものに変わるのである」(M. 58)。

これらの事態を受け継いで、主著『不和』においてランシエールは〈平等〉と社会秩序(〈ポリス〉) は、それぞれ全く異質であるという規定を行うことになる (M. 53)。

〈ポリス〉の機能は、(すでに述べたように)〈感性的なものの分割＝共有〉にある。つまり、その社会のなかで、誰が分け前 (取り分) を持ち、誰が持たないのか、あるいはこの分け前をめぐる討議に誰が参加できて、誰が参加できないのかということを感性的な次元で決定し、計算している (compter) のが〈ポリスの論理〉であるとランシエールは言う (M. 55, 58)。

この〈論理〉を切断し変更しようとするのが〈政治的な言動〉である以上、〈政治的な言動〉は〈ポリスの論理〉のなかにはそもそも存在しないものであり、思いもかけないもの、計算外のものである。それゆえに、〈政治的言動〉は、〈ポリスの論理〉にとっては、根本的に「異質な (hétélogène) 論理」であり、〈間違い〉とみなされるのだ。

それゆえに、〈政治〉は、〈ポリス〉と〈平等〉というまったく異質のプロセスが出会うことによって生じるプロセスであると規定される（M. 53）。ところで、〈政治〉が〈ポリスの論理〉を変えるかどうかは、あらかじめに確定されることはない（M. 59）。だがしかし〈政治〉は存在するのである。

これは、ユートピアを目指すような英雄的な活動ではない。ランシエールの基本的な考えは、ジャコトと同様である。ジャコトにとって（そしてランシエールにとっても）、どのような社会体制も十分な存在理由や根拠を持っていない（MI. 148）[*11]。つまり、その存在は偶然的なのである。だからこそ、ある政体を別の政体に変革しなければならない必然的理由は存在しない（MI. 149）。これは、政治的なシニスムではないかと問われるかもしれない（MI. 159）。そうではないとジャコトは言う。その社会が十分な存在理由がないとしても、その社会のなかで「理性的に」行動することが肝要なのだとジャコトは言うのだ（ibid.）。

ここに〈平等〉と〈ポリス〉とのあいだに必然的な関係がないこと、つまり異質であることが示されている。だが、〈平等〉は、（実現が原理的に不可能とされる）カント的な理念ではない。それは、そのつど毎の〈政治的な言動〉において表出され、立証されると主張するところにランシエールの思想の特徴があると言えよう[*12]。

3. ランシエールの思想的意義と批判

3.1 ランシエールの思想的意義

ここでランシエールの思想の特徴をまとめ、「はじめに」で述べた筆者の問題意識に対するその意義を検討する。

11——しかし、『不和』においてランシエールは、〈ポリス〉のあいだに差異を見出す。つまり「最悪の〈ポリス〉と最良の〈ポリス〉が存在する」と言うのである（M. 54）。〈ポリス〉が心地よく好ましいと思える場合もあるが、しかし、ランシエールの問題意識は、〈ポリス〉の内実ではなく、あくまでも〈政治〉に向けられている（cf. M. 172, n. 1）。〈ポリス〉とは、軽蔑的ではなく「中立的な意味」であるとランシエールが言っているのも、〈ポリス〉自身がランシエールにとっては最終的な問題ではないことを示しているであろう（M. 52）。

12——したがって、〈平等〉をバティウにならって「公準」とみなすこと（酒井, 2006, 53）は、適切ではないだろう。

ランシエールの思想の特徴は、〈平等〉の捉え方に存する。それには、三つの要点があり、相互に関係し合っている。

まず第一に、〈平等〉自身の位置付けである。「すべての話す存在者は〈平等〉である」と公言されていても、ランシエールにとって〈平等〉はそれ自身では「空虚」であるとみなされている。つまり、〈平等〉は、自同的で充実した自立的な概念や理念として考えられていないのだ。〈平等〉が捉えられるのは、ある社会秩序（〈ポリス〉）のなかで不平等が捉えられるときであり、それ自身のみで把握されることはない。したがって、具体的な言動を導いていくような「目的」あるいは「本質」として〈平等〉を捉えることはできないのである。

そして第二に、〈平等〉は、カント的な理念あるいは経験の限界における「絶対的に他なるもの」ではなく、我々に明確に捉えられるということである。つまり、不平等な社会秩序の配置（〈感性的なものの分割＝共有〉）を変動しようとする〈政治的な言動〉において、〈平等〉ははっきりと表出され、自らの存在を立証する。社会秩序の配置＝論理の「間違い」や矛盾を「立証する」ことにおいて、〈平等〉は存在するだけでなく、ある効力も持ちうるのだ。〈政治的言動〉における「立証」を、討議のなかの論理的発言だけでなく、デモ活動など感性的な次元にまで拡げたこともランシエールの特徴である。

第三に、〈平等〉と社会秩序（〈ポリス〉）との根本的な異質性の主張である。この異質性のために、〈平等〉は社会のなかでの実現が目指される「目的」とはならない。これは、〈平等〉がそれ自身「空虚」であるとする規定と連関している。

このような〈平等〉の捉え方は、現代思想のなかでどのような位置にあるのだろうか。筆者は、本稿の「はじめに」で現代の思想的特徴として、諸学における過剰な自己批判を挙げた。それぞれの学は自らの学的基盤を正当化するために、様々な批判的検討を行ってきたが、それが自ら自身に向けられたときに、この批判を回避することができなくなる。それに対して、討議のルールを決めるということも一つの手立てであるし、また、相互的な批判のなかでお互いに修正をし合いながら学的営みを継続していくということも手立てとしては考えられるであろうし、筆者自身もこれらには反対はしない。だが、これらの方向性だけなのであろうか、ということが疑問として残っていた。つまり、思想的な批判の立場の可能性はまだ汲み尽くされておらず、ランシエールの思想にもう一つの別の可能性があるのではないか、ということが筆者の問題意識であった。

この問題意識からランシエールのこれまでの議論をまとめる場合、その要点は二つに絞られる。

まず第一の要点は、立論の始点をどう設定するのか、ということである。伝統的な西洋哲学の「根拠」あるいは「基礎」のように、自立的な正当性を持ち、かつその普遍妥当性を要求しようとする立場は、その正当性に対する批判は常に生じうるであろう。それに対して、ランシエールの始点の〈平等〉はそれ自身「空虚」である。つまり不平等の理解において察知されるように、自立的で基礎的な正当性は持っていない。だが、それは、経験され得ないような限界的存在ではないし、また、抽象的で一般的な概念なのではない。社会秩序における不平等のなかで察知される〈平等〉は、不平等を打破する言動を人々に引き起こさせ、その言動のなかで自ら自身を立証する。〈平等〉をこのように捉えることにおいて、ランシエールは、「根拠」あるいは「基礎」とは異なる思想の始点を築こうとしているのである。

これは、第二の要点、(〈政治〉や〈平等〉という出来事における) 異質性の保持にも関わっている。異質性というトピックに対するアプローチの仕方によって、各々の思想の性格は大きく変わってくると考えられる。

異質性を否定し一元的に社会を捉えようとしている思想として、ランシエールは、フーコーの権力の概念を挙げている (M. 55)。このフーコーの立場に対して、ランシエールはすべてが権力になればどれも権力ではなくなると言っているが、問題はそれだけではない。

フーコーの場合は、すべての事象が権力になり、そのためすべては〈政治〉になり得る。もちろん、このように、すべての事象に権力を見出したり、権力とみなしたりすることは可能である。だが、そうすることで、権力のなかでそれを最も特徴付けるものが捉えられなくなるのではないだろうか。思想を普遍的・一般的に拡げていくことは、その強さではなくて、その力の弱さを露呈することもあるのではないか、と考えられるのである。

このフーコー的な立場と、異質なものの共約不可能性を主張するリオタールに対して (M. 14, 79)、ランシエールは共約不可能な異質なものを思想によって捉えることが可能であると主張している (M. 40)。ここに、批判的思想の可能性についてのランシエールの思想の第二の要点がある。

空虚な前提としての〈平等〉が始点になることと、〈平等〉と〈ポリス〉との根本的な異質性を強調することによって、ランシエールは、正当化や基礎付けを課題とする哲学とは異なる哲学を描き出す。ランシエールにとっての哲学の課題は以下の通りである (M. 11)。

哲学に存在しているのは、特異な対象であり、思考の結び目である。この思考の結び

目は、特殊なアポリアや葛藤、パラドクスといった徴 (le signe) のもとで、政治、芸術、科学やその他の思考活動との出会いから生まれるのだ。

この「特殊なアポリアや葛藤、パラドクス」とは、異質なものの衝突であり、本稿においては〈政治〉のことである。このアポリアから、そしてこのアポリアについて考え続けることが、ランシエールにとっての〈政治哲学〉である。

このような思想を切り開くことによって、ランシエールは、他の思想家とは異なる批判的な思想の立場を示している。そこで、次節で〈平等〉に基づく思想的批判を見てみよう。

3.2〈平等〉に基づく思想的批判

ランシエールの思想の目的が〈平等〉の立証にあるとするならば、その思想的な批判の対象は、不平等を立証する思想であると言ってよいだろう。つまり、不平等から始める(不平等を前提とする)ことによって、不平等を立証し、不平等を立証することによって、結局不平等を何度も再発見せざるを得なくなる「懐疑の思想」がその批判の対象となるのだ (Rancière, 2004a, 96-106)。

この「懐疑の思想」はジャコトの批判の対象でもあった。ジャコトは、「説明」という従来の教育の仕方が、知的な平等を実現せず、知的不平等を再生産することを批判する。「説明」は、まず、教師と生徒のあいだの知的不平等を前提とする。そのうえで、教師は自らの知識を生徒に説明することを通じて、生徒とのあいだに知的な平等を作り上げようとする。つまり、この場合、平等は「目的」であって、前提ではない。

だが、教師と生徒として知性と世界とを二つに分けることによって、その格差が固定されてしまうとジャコトは言う (MI. 15)。つまり、説明を教師が行うということは、生徒は自ら自身で理解することができないことを示しているのである。説明が必要であることは、「神話」でしかない (ibid.)。この神話のなかで、生徒は自ら自身に対する自信を失っていく。「説明」は、無能力をなくすどころか、それを創り出すのである。そうして「知的平等」という目標に近づくどころか、それはますます遠ざかっていく。

その際の教育の重要なイメージ=表象は、「不平等とは遅れである」ということだ (MI. 198)。もう少し学べば、この知的な「遅れ」を解消して、「知的な平等」を実現できると吹き込むことは、「教育学のフィクション」であるとジャコトは言う (ibid.)。だが、この時

間的な差は解消されない。生徒を先導する教師や知的エリート自身ますます先に進むからである。ランシエールによれば、この教育学の思想・時間観が、19世紀以降の「進歩思想」に直結している[*13]。

ランシエール自身の批判としては、社会学者ブルデューに向けられたものを見ておこう。ブルデューに対してランシエールは、『哲学者とその貧困』(Rancière, 1983) 以来ずっと批判の対象にしている[*14]。ここでは1984年の「社会学の倫理」(Rancière, 2003, 353-376) における批判の要点を見ておこう。

ブルデューは、ジャン＝クロード・パスロンとの共著『遺産相続者たち』(1964年刊) において、大学が不平等な社会的再生産を行い続けていることを告発している。そして『再生産』(1970年刊) と『ディスタンクシオン』(1979年刊) において、綿密な調査と構造分析を行うことによって、支配機構を告発するだけでなく、改革や解放への期待や希望も告発した。つまり、社会における不平等の再生産を揺るがすことができないものとして示したのである。

これは、不平等を「立証」するだけでなく、不平等をそもそも「前提」としていることを意味している。そして、この両者が循環的に結合することによって、ますますその論証(不平等の確定) の力を増すのである。ブルデューのこのような分析についてランシエールは次のように言っている (Rancière, 2003, 367)。

労働者階級の若者たちが大学システムからほぼ完全に除外されており、彼らの文化的劣勢が経済的な劣勢の帰結だということはあまりにも明白である。このことを循環的＝同語反復的にブルデューは規定しているが、この状況は若者たちには分かっていないので、それは再生産され続けるのである。

ランシエールによれば、この分析は以下のようにまとめられる (ibid.)。

1. 体制が自らの存在を再生産するのは、この再生産が認識されずに進行するからである。
2. 体制は、自らの存在の再生産を通じて、誤認という結果をもたらす。

13——— ある論者はランシエールを「啓蒙の哲学者」とみなしているが (Michaud, 1997, 442)、ランシエールは進歩史観に同意していないことは明らかである。

14——— この点に関しては、ロス (2004)、ドッス (1999, 375-376) を参照。

ランシエールがブルデューを批判するのは、ブルデューがその分析によって不平等を確定してしまうということだけでない。この不平等が見えているのは、社会学者のみであり、体制の不平等を立証することによって、それを確定しながら、社会学者自身は永遠に「告発者」としての立場を手に入れることをランシエールは痛烈に非難する。つまり、この社会学は不平等によって自らの領域を作り、生き存えようとしているのである（Rancière, 2003, 368）。ランシエールのブルデュー批判は、以上のようにかなり手厳しいものである。

ところで、一貫して〈平等〉から考察されているランシエールの批判自身、〈政治的な言動〉とみなすことができるであろう。というのは、「王としての社会学者」（Rancière, 1983, 239）であるブルデューの理論は70年代以降フランスで幅広い層に受容されており、この理論自身が思想界におけるある秩序、つまり、ある種の〈ポリス〉となっているからだ。影響力のある思想を批判することは、社会秩序としての〈ポリス〉の動向を揺るがせることに通じる。したがって、〈政治〉は、ランシエールにとって、記述と分析の対象であるだけでなく、自ら自身の思想的な言動でもあるのだ[*15]。

おわりに

ところで本稿を終えるにあたって、ランシエールの〈政治〉あるいはランシエールに通底していると思われる哲学者に触れておく。それは、（ランシエールは認めないかもしれないが）ソクラテスである。

周知のようにソクラテスは、アテネの知識人や有名人に対して、「徳とは何か」「勇気とは何か」などを問い続けた。ソクラテス自身がわからなかったので問い続けたのであるが、しかし、その対話において問答の相手はアポリアに陥った以上、ソクラテスはまったく何も知らなかったということはあり得ない。だが、「〜とは何か」の答えをソクラテスはそれ自身で知っていたのではなかった。問い続けるという言動のなかでしか、これには触れられなかったのである。だからこそ、ソクラテスは問い続けたのであった。

このようなソクラテスの存在は、アテネでは煙たがられていた。つまり、アテネの人々

15——ランシエールは、歴史修正主義に対しても批判を行っている（M. 173-183）。ランシエール（1995）とランシエール（1997）も参照。

の通念という秩序を常に揺るがせる存在であった。ソクラテスはアテネの市民の風習を批判したが、それを変革することが目的ではなかった。だが、風評に基づいてソクラテスは告訴され、刑死したのであった。

ここで着目したいことは二つある。まずソクラテス自身の存在が特異であり、ランシエールがいう〈政治〉的な存在であったということである。さらに、ソクラテスの「無知の知」とランシエールの〈平等〉は、その「空虚」さとその「力」において類似していることである。つまり、両者とも、実際に言動を行うなかでしか、思想のリアリティが生じなかった。このようにランシエールの思想には、政治哲学や共同体論にとどまらず、ものを考えていくことの根幹に接している一面があると思われるのだ。

第二は、ソクラテスという特異な存在が、プラトンに衝撃を与え、プラトンはソクラテスを主人公とする対話篇を書き記したことである。言うまでもなく、ソクラテス自身は何かの「問題」を解決したのではない。これは、何かの難事や問題があったとしても、それを「解決する」ことのみが重要であるとは限らないことを意味している。

第1章で挙げたジャンヌ・ドロワンは、立候補した翌年に逮捕され、その二年後にイギリスに亡命している。ドロワンの生前にはフランスの女性参政権は認められなかった。だからといってドロワンの言動は意味がなかった訳ではない。ドロワンの〈政治的な言動〉は社会の矛盾を明らかにし〈平等〉の新たな実現に資するものであった以上、それを「伝える」ということも重要な意義を持つのである[*16]。

さらに、「伝える」だけではなく、それを解明し、位置付け、他の事柄と連関する素地をつくることによって、多様に「つなげていく」ことが重要であろう。ここに〈人文学〉の一つの存在理由がある。このような〈人文学〉の営みによって、様々な「現実の問題」に対して「解決」の視点以外からもアプローチが行われるようになり、「現実」についての様々な討議・検討の場が開かれるようになるのである。

本稿での問題意識（〈共有される問い〉）は、「現在の思想的批判の可能性はどこにあるの

16———「伝える」ということにおいて元の事態や情報がそのまま伝達されることは困難である。たとえば、プラトンの対話篇でも、ソクラテスとプラトンのあいだ、（対話中の）話し言葉と書き言葉のあいだに既にギャップがある。そして、プラトンと我々のあいだにもまた大きなギャップがある。これらのギャップは消去されるべきものではなくて、ギャップにおいてこそ哲学が始まり、この始まりをプラトンの対話篇は示そうとしていると納富は強調している（納富, 2002）。

か」であった。これに対しては、ランシエールの思想がその一つの可能性を示していると考えられるであろう。

だがこのことは、ランシエールの思想は我々の思想的な批判の規範になるということではない。ランシエールはジャコトの思想を捉え直し、自らの思想的営為において変形しつつ具体化したように、ランシエールの思想を我々なりに捉え直すという課題が我々に示されているのである。

（いえたかひろし・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員）

［参考文献］

ドッス、フランソワ（1999）『構造主義の歴史　下』中澤紀雄訳、国文社.

松葉祥一（1999）「「ポリスの論理」と「政治の論理」」、『現代思想』1999年5月号所収、青土社、104-113.

Michaud, Yves (1997) « Les pauvres et leur philosophe », *Critique*, juin-juillet 1997, 421-445.

納富信留（2002）『プラトン』、NHK出版.

Rancière, Jacques (1983) *Le Philosophe et ses pauvre,* Fayard.

Rancière, Jacques (1987) *Le Maître ignorant,* Fayard.

Rancière, Jacques (1995) *La Mésentente*, Galilée.

Rancière, Jacques (2003) « L'éthique de la sociologie », *Les Scènes du Peuple*, Horlieu. 353-376.

Rancière, Jacques (2004a) *Aux Bords du Politique*, Gallimard［原著は、1998年にÉditions de La Fabriqueから発行］.

Rancière, Jacques (2004b) *Démocratie, dissensus, communication,*［2004年1月24日大阪大学での講演原稿。なお、邦訳は以下の通りである。「デモクラシー、ディセンサス、コミュニケーション」松葉祥一・山尾智美訳、『現代思想』2004年4月号所収、青土社、28-41］.

ランシエール、ジャック（1995）「歴史修正主義と現代のニヒリズム」安川慶治訳、『現代思想』1995年4月号所収、青土社、16-37.

ランシエール、ジャック（1997）「「可能」なる歴史を断ちきって」コリン・小林訳とインタビュー、『現代思想』1997年9月号所収、青土社、104-113.

ロス、クリスティン（2004）「無知な教師」松葉祥一・山尾智美訳、『現代思想』2004年4月号所収、青土社、185-197［Rancière（1987）の英訳序文］.

酒井隆史（2006）「政治・平等・出来事」、『VOL』01号所収、以文社、50-59.

澤里岳史（2003）「もう一つの民主主義——J・ランシエールの政治哲学」 仲正昌樹編『脱構築のポリティクス』お茶の水書房所収、123-140.

シャガールの作品はなぜ「あんなこと」になったのか？
芸術創造の源へのアプローチ

樋上千寿

《要旨》
シャガールの芸術は、ふたつの意味において越境的であるといえる。つまり、①ユダヤ教を基盤としつつもロシア正教、キリスト教など他宗教が混交した文化をその背景にもち、民族が共有してきた記憶（離散や迫害、改宗など）と、作家自身が体験した時事的な事件（ナチズムや世界大戦、亡命など）が通底し合い、地理的、文化的、宗教的、時間的に越境しているものと、②美術と音楽文化（クレズマー）、言語文化（イディッシュ）など、芸術諸領域を横断するという意味での越境性を帯びているものとがある。これらを解読するためには、美術史で扱われてきた様式論やキリスト教美術理解に有効な方法論では限界があり、体系的なユダヤ教史の研究成果を参照するなど、新たな文脈の設定が必要となる。また、異文化を背景に創作された作品読解と成果共有のためには、その文化に属する音楽文化や言語文化など美術以外の諸芸術を立体的に理解する努力も必要となる。このような越境的な本質をもつ芸術理解のための研究方法と成果共有方法の可能性について論じる。
《キーワード》越境性、芸術学、美術史、ユダヤ教、異端審問、マラーノ、クレズマー音楽、イディッシュ

*

はじめに：〈問い〉の共有のために

なぜシャガールの作品は「あんなふうに」描かれたのか——つまり、シャガールがどんな理由で、作品の特殊性を決定づけているテーマやモチーフ、色彩や形態を選び、それらを構成したのか。本稿の題目として掲げたこの〈問い〉こそが、筆者の研究を進める最も重要な動機となっている。芸術創造の源へとアプローチする研究活動において、作品創作の着想源へと迫ることは、個々の作品解釈に欠かせない過程であるが、そのためには、ど

のような知識を必要とし、どのような方法で共有するべきなのか。またその追究はどのように学問・学科の領域を越えていくことになるのか。本稿では、膨大な数の作品から一例を挙げ、それぞれの作品が内包する越境性を考察することにより、このような〈問い〉に迫りたい。そして、美術史学のみならず、ひろく人文諸学との連携を視野に入れた新たな取組み方、視点の必要性を提示したいと思う。

《アレコ》と、FM番組「シャガールと音楽」

2006年7月に開館した青森県立美術館で、シャガールのアメリカ亡命後初めての大掛かりな依頼作品、チャイコフスキー作のバレエ「アレコ」の舞台背景画全4幕が、我が国では初めてそろって展示された。1942年9月にメキシコで初演されたバレエ「アレコ」では、シャガールの舞台背景画をバックにオーケストラ演奏が流れ、ステージでは踊り手たちが軽やかに、またしなやかに舞い、そして輪舞したが、背景画そのものには音楽的な要素があふれている訳ではない。むしろ、ヴァイオリンを持った熊を除いては、個々のモチーフよりも色彩のフィールドが広大な幕のうえに広がる印象を抱かせる。美術と音楽、そして演劇が融合したこの舞台芸術作品を出発点に、シャガールは1945年のストラヴィンスキー作「火の鳥」舞台美術、さらに1965年にはモーツァルト作「魔笛」の舞台美術を担当し、総合芸術家としての功績を世に認められるところとなる[*1]。けれども、シャガールと音楽、そして演劇との深い関わりは、これらのバレエ作品をまたずとも、1920年のモスクワ時代にすでにその出世作が生み出されている。すなわち、東欧ユダヤ人のイディッシュ文化を背景に制作された《ユダヤ劇場壁画》7点（1920年）には、東欧ユダヤの音楽文化である「クレズマー」や「イディッシュ民謡」といった伝統的な民族音楽の響きが共鳴しているのである。そしてまた、これらの民族音楽とシャガール作品との深い結びつきは、さらに初期の、1910年前後から制作された数多くの「ヴァイオリン弾き」のモチーフにすでにあらわれていたのである[*2]。

1――《アレコ》に関しては、展覧会カタログ「シャガール　『アレコ』とアメリカ亡命時代」青森県立美術館、2006年7月13日～9月24日を参照。

2――Ziva Amishai – Maisels, Chagall's Murals for The State Jewish Chamber Theatre, in *Marc Chagall, The Russian Years 1906-1922*, Schirn Kunsthalle, Frankfurt, 1991, pp.107-127.

――,*Chagall : Dreams and Drama, Early Russian Works and Murals for the Jewish Theatre*, The Israel Museum,

このような、シャガールと音楽との関わりについて、「アレコ」舞台背景画をきっかけにして概観したのが、青森のFM局による番組「シャガールと音楽」であった。青森県立美術館での《アレコ》公開を控えて、2006年6月下旬に放送された当番組の編成会議では当初、絵を見せられないFM番組でなぜシャガールを紹介できるのか、との疑念が出されたという。けれども、「非専門家」を代表するインタヴュアーのアナウンサーと専門家である担当学芸員との間で行われた質疑応答形式による《アレコ》の詳細な解説と、シャガールが担当した上述のバレエ作品の楽曲や原曲、そして、東欧ユダヤ音楽「クレズマー」の演奏を織り交ぜることにより、当の作品を一切見せることなく、「音」のみでシャガールの芸術世界をリスナーの眼前に現出させるというこの試みは、一定の評価を得た[*3]。実際に展覧会が公開された7月中旬以降、これらの楽曲に関する聴覚的な予備認識が作品の鑑賞という視覚的体験と結びついたとき、その有効性は倍加する。番組が視覚的情報を直接的に用いることなく、聴覚的な情報のみでシャガールの芸術的背景を伝達できたとすれば、それは彼の芸術が美術の分野だけに完結するものではなく、視覚的情報を切り離してもなおその作品世界を十分に感得させるほど他（多）領域横断的な越境性を内包しているからであろう。そうだとすれば、このような彼の芸術解釈にもまた、それに相応した、領域横断的な研究方法が要請されることとなるのではないか。つまり、シャガール研究には、新たなフィールドが設定し直される必要があるだろう。

筆者がここ数年にわたり進めてきた領域横断的な研究の成果を共有するために、以下に作例を示しつつ、次のような手順に従って解釈を進めて行きたい。

研究成果の共有のために、

①表現されているメッセージを読み解くために作品のテーマ、モチーフにアプローチする。

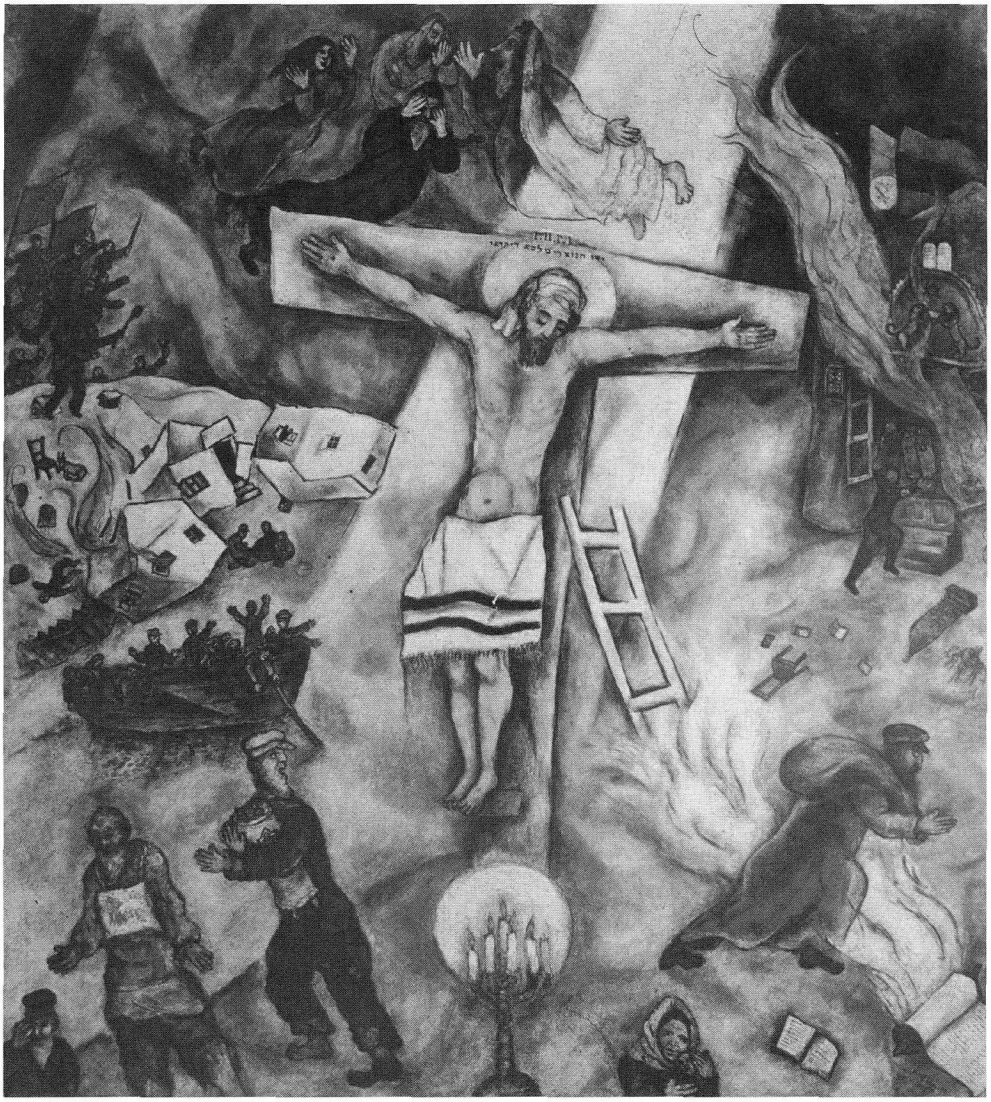
②それらの解読に際して立ち現れてくる問題系を示す。

③それらの問題系への接続を容易にするための発表方法を提案する。

Jerusalem, 1993, pp.21-39.

Benjamin Harshav, *Marc Chagall, The lost Jewish world*, Rizzoli, California, 2006, pp.71-82.

3——— エフエム青森制作の当番組は会期途中の8月初旬にも再編集・再放送され、また青森駅と美術館を結ぶシャトルバス内でも毎日編集版が放送された。



［図 1a］ 白い磔刑 1938

1「磔刑」のテーマ

はじめに、地理的、文化的、宗教的、そして時間的に越境していくテーマを含む作品を取り上げ、その越境性を考察してみたい。つまり、ひとつの美術作品を成り立たせる精神史的な背景が、領域横断的と考えられる例である。

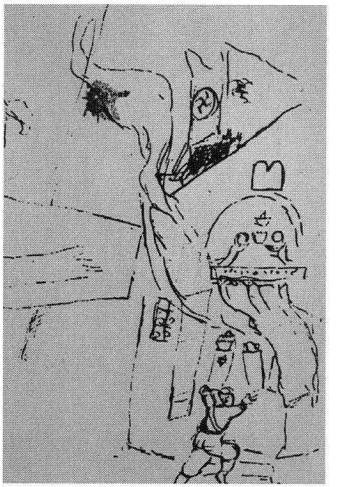
モデルとなる作品：《白い磔刑》、《殉教者》

*

《白い磔刑》

[図1a＝1938年制作、カンヴァスに油彩、縦155cm、横139.5cm、シカゴ・アート・インスティチュート所蔵]

中央に十字架に架けられたキリスト像と、その周りに描かれた人物像や群像、戦災に遭う町やシナゴーグなどで構成される。ユダヤ教の祈祷用のショール「タリート」を腰に巻いていることにより明確にユダヤ人であることを強調したキリスト像は、キリスト教的な「救い主」ではなく受難の渦中にあるユダヤ人を表わすと考えられる。画面上方の上空にはユダヤの長老たち、あるいは預言者たちが子孫の受難を嘆き、左側の集落は火を放たれ、ボートには避難民が溢れる。右側にはナチ党員と見られる男性がシナゴーグに放火する。地上では逃げ惑うユダヤ教徒達の姿が描かれ、聖典トーラーが煙の中を転げ落ちる。放火されるシナゴーグについては下絵［図1b］の段階では明確に鍵十字のナチ党旗が描かれており、本作の制作年である1938年11月9日の「水晶の夜」におけるドイツ全土の300を越えるシナゴーグへの放火・破壊の事実に基づいていると考えられる。

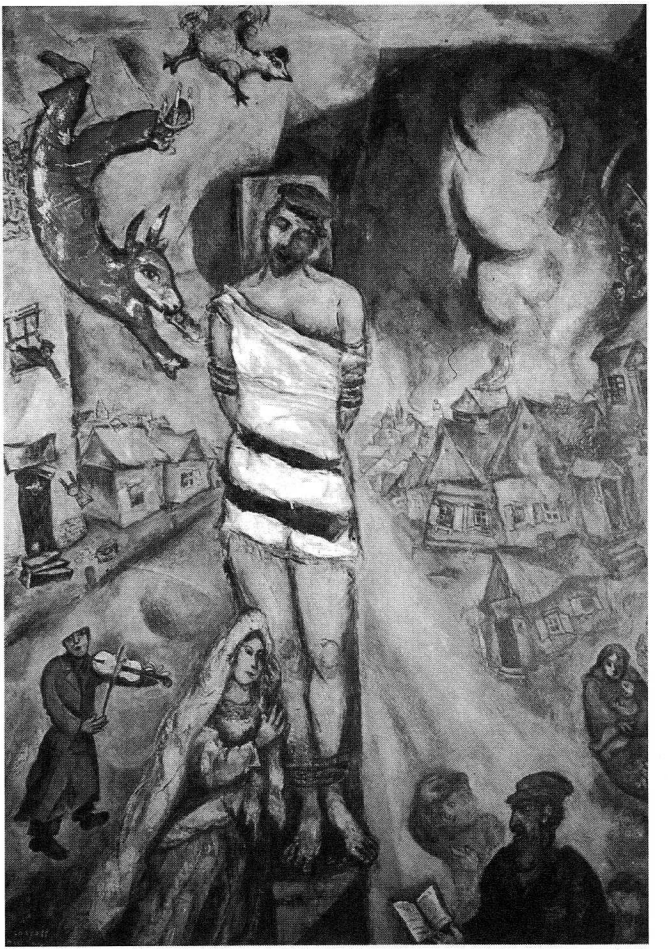


［図1b］
白い磔刑下絵（部分）

《殉教者》

[図2＝1940年制作、カンヴァスに油彩、縦164cm、横114cm、個人蔵]

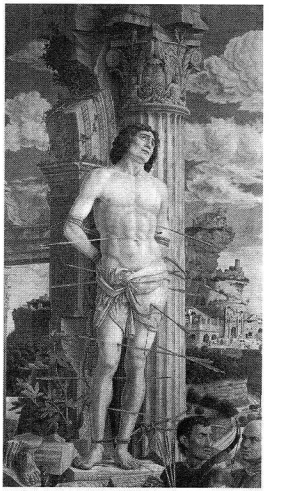
故郷ヴィテブスクと思われる町の通りに立てられた杭に、祈祷用ショールを身体に巻いた男性（ユダヤ人）が縛り付けられている。右側では集落から火の手と煙が上がり、母と子がうずくまる。左側ではユダヤ人の住宅が蹂躙されている。殉教者の周



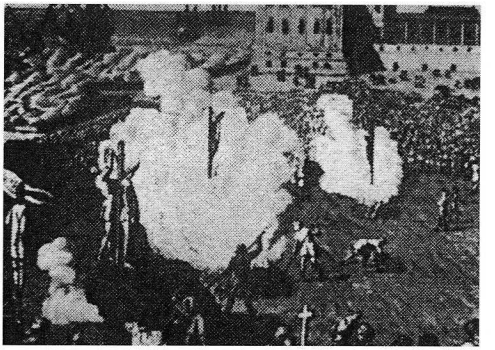
［図2］ 殉教者 1940

りには足元でフィアンセと思しき女性が寄り添い、頭の上部を削られた楽師がメロディーを奏で、被造物である動物も想いを投げかけている。右下の男性は死者を弔う哀歌「カディッシュ」を唱え、騒然たる場面を構成している。杭のモチーフは、キリスト教美術で作例の多い「聖セバスティアヌスの殉教」の図像（参考図、杭や柱に縛られた聖人が幾本もの矢を身体に受けつつ天を仰ぐ図像）に遡ることが出来るが、それよりも異端審問所が執行していた異端者の焚刑Auto da féのイメージ［図3］とのつながりが深いと考えられる。

シャガールに先行するユダヤ人画家エフライム・モーゼス・リリエンの《キシネフの殉教者に捧ぐ》［図4］は、1903年にウクライナ・キシネフで起きた大規模なユダヤ人襲撃（ポグロム）を題材として制作されたが、祈祷用ショールを纏ったユダヤ人の殉教のイメージを描いた先行例と考えられる。



［参考図］
アンドレア・マンテーニャ
聖セバスティアヌスの殉教 1456-59
ルーブル美術館蔵



［図3］　異端審問所による焚刑

［図4］　E.M.リリエン
キシネフの殉教者に捧ぐ 1903

*

問題系1-ステップ①：「反ユダヤ主義」

これらの作品のテーマは、直接的には、1930年代以降、ナチズムの台頭に伴って激しさを増して行った「反ユダヤ主義」への反発である。「反ユダヤ主義」はナチズムにおいて、中世以来の宗教的な性格から、血統そのものを問題視する人種的なものへ、つまり「改宗」の強制ではなく一民族の「根絶やし」という「最終解決」へと変貌した。これらの作品が示してくるのは、ナチズムの暴力性、そして扇動される大衆、群集（multitude, mob）が持つ潜在的な暴力性の問題である。あるいはまた、ナチズム以前の宗教的な「反ユダヤ主義」の問題へと遡及する。つまり中世西欧（特にスペイン、ポルトガルのカトリシズム）において、キリスト教にとっての外的な敵であったイスラム勢力の追放と、内的な敵とも言えるユダヤ教徒の「異端審問所」主導によるカトリックへの「強制改宗」は同時に達成されるべき大きな課題であった。しかし1492年の国土再征服運動「レコンキスタ」の「完成」は、西欧のユダヤ教徒（セファルディーム）にとっては新キリスト教徒「マラーノ」としての生を強制される発端となった。スペイン国内に留まるために改宗するか、さもなければ国外追放、あるいは異端として処刑されるか、という厳しい選択を突きつけられたユダヤ教徒たちは、表面的にカトリックへと改宗したものの、心の内奥においては、密かに祖先からの信仰を保ち続ける「隠れユダヤ教徒」として生きることとなる。こうして、彼らの内面には「面従腹背」の宗教的二重性と、信仰という精神的ルーツを絶たれた精神的流謫（ディアスポラ）状況をもたらし、ディアスポラ（離散地）での身体的流謫（ディアスポラ）とあいまって、彼らの不安は一層深く拭いがたいものとして受け継がれていくのである[*4]。

---

4 ――「マラーノ」の発生、および宗教的混交に関しては、以下の文献を参照した。
- 小岸昭『スペインを追われたユダヤ人　マラーノの足跡を訪ねて』人文書院、1992年、27-31頁ほか
- イルミヤフ・ヨベル『スピノザ　異端の系譜』人文書院、1998、33-64頁（Yirmiyahu Yovel: *Spinoza and Other Heretics*, Princeton University Press, 1989）
- 樋上千寿「マルク・シャガールにおける『マラーノ性』」京都大学総合人間学部1996～1998年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書『ブラジルと日本におけるポルトガルの領土拡張政策と宗教活動に関する総合的な研究』1999年3月、107-121頁

問題系1-ステップ②：「反ユダヤ主義」→隠れユダヤ教徒「マラーノ」

「マラーノ」の発生

スペインではユダヤ教に寛容だったイスラムの統治下で、ユダヤ人たちは500年にわたって彼らの信仰に忠実な暮らしを営むことができた。しかしカトリックの国土再征服運動「レコンキスタ」が徐々に成功を収めるに従って、彼らの運命も次第に険しいものとなっていった。1391年、経済的危機、そして政治的危機の原因糾弾の矛先が、商業活動の中心的役割を担っていたユダヤ人に向けられたとき、カトリックの聖職者に扇動された民衆は暴徒化し、カトリックへの改宗、つまり、洗礼を拒めば死、という「死か洗礼か」の二者択一を迫り、彼らに襲いかかったのである。

約100年にわたり、ユダヤ教徒と旧キリスト教徒との間に共存していた「マラーノ」の運命をさらに決定的にしたのは、「レコンキスタ」を完成させたカトリック両王フェルナンドとイサベルである。1492年3月31日、国内のユダヤ教徒は残らず、向こう4ヵ月の間にカトリックに改宗するか、さもなくば国外追放、という選択を迫った。このとき十字架の圧力に抗しきれなかった多くのユダヤ人は、生きるためにカトリックへと改宗し、新たに大量の改宗者、すなわち新しい「マラーノ」がスペインに現出するところとなったのである[*5]。

「マラーノ」の中にはすっかり旧い信仰を捨ててしまった者もいたが、密かにユダヤ教の儀式を執り行う者もいた。けれども、内面の信仰は別として、少なくとも外面的にはキリスト教徒となった彼らは、法的にも従来のキリスト教徒である「旧キリスト教徒」とまったく同等の権利を得るところとなり、その商才と「モーセ以来受け継いだ由緒正しき血筋」とを売り物に、商産業のリーダー的存在となる者、高位聖職者に登りつめる者、あるいは旧キリスト教徒との婚姻により貴族階級の仲間入りをした者もいた。しかし、このような彼らの目覚ましい躍進ぶりは、またしても旧キリスト教徒からの嫉妬をかうところとなった。こうして、「反ユダヤ主義」は、その対象が「ユダヤ教徒」でなくなったのちも、なお新たな攻撃対象を求めながら受け継がれていくのである。信仰上の理由から彼らを排除す

5——ユダヤ教からカトリックへの改宗者は、「新キリスト教徒」「コンベルソ」あるいは「豚を食う奴ら」という意味で侮蔑的に「マラーノ」などと呼ばれた（ユダヤ教には厳密な食事規定があり、豚は禁忌されている代表的なもの。また豚は「キリスト教徒」を暗喩するモチーフでもある）。

ることが出来なくなったとき、次には彼らの「信仰」ではなく「血統」が問題とされた。「悪質」で「不純」なキリスト教徒という新たなレッテルを貼り付けられた新キリスト教徒「マラーノ」を、公職や聖職、名誉職から追放すべきである、との声があがった。この根拠なき純血法は、遥か後のナチスの「人種法」にそっくりそのまま受け継がれることになる。

「マラーノ」の宗教混淆

1496年にポルトガル王マヌエル一世がフェルナンドとイサベルの娘と結婚して、イベリア半島全体がスペインの勢力下に置かれると、ユダヤ人追放令も半島全域に発効することとなった。ポルトガルに異端審問所が設けられたのは、それから40年のちの1536年のことである。というのも、ポルトガルにおいては当初、ユダヤ人の経済への貢献度を重視して、法令の発効時点でユダヤ教徒である者は、その信仰を許容するものの、彼らの子の世代からはカトリックの洗礼を受けさせる、という懐柔策が取られたからである。が、いったん異端審問所が稼働しだすと、スペインと同様に異端者を生きたまま薪の山へ送り込むというその処刑方法＝焚刑 Auto da fé の苛酷さでたちまち「マラーノ」たちを震撼させることとなった。

「マラーノ」たちがまだ正統派のユダヤ教徒と秘かであったにせよ、確かなパイプで情報の遣りとりが出来た時代が完全に終わり、正典「トーラー」に関する正しい知識が彼らから切り離されると、「マラーノ」が秘かに執り行うユダヤ教の儀式に変化が表れるようになる。「マラーノ」研究者のイルミヤフ・ヨベルによると、その際つぎのような三つの過程が進行していったという。

第一段階：書物や手引きがないので、隠れユダヤ教の正統的な内容は、年月を経るにしたがいますます乏しくなっていった。

第二段階：人々が記憶にとどめていた数少ない戒律は、異端審問所に見つかれば命に関わるという危機感から遵守されなくなっていった。ここから妥協的な態度が生まれ、ある戒律の一部は守るが、他の戒律は無視する、あるいは、より守りやすい他の習慣を採用して重要な慣習の実践を断念してしまうという態度が生じた。

第三段階：「マラーノ」が保持していたユダヤ教の痕跡の脈絡のなかに、だんだんキリスト教の象徴や見解が充満するようになり、それが「マラーノ」の意識の深層に作用を及ぼすようになっていった。つまり、この段階になると「マラーノ」の隠された

本質をなすユダヤ教それ自体が、キリスト教の見解やそのさまざまな象徴に支配された世界に存在していたのである。

「マラーノ」のこうした宗教的混淆は、正統派ユダヤ教から隔絶された、隠れユダヤ教徒としての隠密の営みと、カトリック社会への表向きの同化という二重生活の中で、当初の頃こそは意識的であったにせよ、世代から世代へとこの習慣が受け継がれていくにつれて、彼ら「マラーノ」にとっては自分たちの、それこそ正真正銘の「正統な」ユダヤ教として何の不自然さをも感じることなく信じられるようになってしまっていたのである。Y.ヨベルによると、「救済はモーセの律法にこそあれキリストのうちには存在しない」という、「マラーノ」に特有の常套句は、キリスト教の常套句をユダヤ教の要素で満たしたものであり、ユダヤ教の枠組みのなかにカトリック的な要素や解釈が入り交じるという宗教的混淆が簡潔な形で表現されているという。「救済」を根本問題とするカトリックの環境で教育された「マラーノ」たちは、こうしたカトリックの思想の上にユダヤ教の解釈をおおいかぶせた、というのである。

16世紀を通じて多くの「マラーノ」が移住していった離散地のひとつ、オランダ・アムステルダム近郊のアウデルケルクに今も残るポルトガル系ユダヤ人墓地の墓碑のいくつかは、「マラーノ」がイベリア半島から携えていった彼らの宗教観を衝撃的に伝えている。ここにはバルーフ・スピノザの両親や、スピノザの師でカバラ主義者にしてラビのメナセ・ベン・イスラエルなどの、正統派ユダヤ教の戒律に則った文字だけの簡素な墓石と並んで、「イサクの犠牲」など聖書の一場面を浮き彫りにしているものも少なくない。中でも特筆すべきはサムエル・シニア・テイシュイラの石棺の上部に刻まれた饒舌な浮き彫りである。疑いようもなく、刻まれているのは神それ自身の姿なのである。宗教的に寛容なオランダで、ユダヤ教をオープンに信仰する自由を得た元「マラーノ」たちが「取り戻した」ユダヤ教とは、もはや正統派のユダヤ教とは相容れない、多分にカトリック的な象徴が深く織り込まれた、新しいユダヤ教、いわば「マラーノ教」とでも呼ばざるをえない側面を色濃く帯びたものとなっていたのである。

問題系1-ステップ③：「反ユダヤ主義」→「マラーノ」→「シャガール」へ

異端審問所による焚刑auto da féの記憶は、イベリア半島の「マラーノ」だけのものでは

なく、シャガール自身の体験でもある。というのも1933年、ナチスによって「退廃芸術」指定を受けた、マンハイム美術館が所蔵するシャガールの作品が公衆の面前で焼き払われているからである。作品が、作家自身と同等の重みを持つものであるならば、この焚刑auto da féは、シャガール本人に処された焚刑auto da féという意味を持つ。幸い作家本人とその家族は、プラド美術館による仲介とニューヨーク近代美術館からの「招待状」を頼りに、マルセイユからイベリア半島最西端の港、リスボンを経て大西洋を西へと——まさに450年前の「マラーノ」とまったく同じように——船で脱出することとなった。しかしこのとき、シャガールの脳裏に「マラーノ」の「追放」、そして、命賭けの船出の記憶が蘇ることがまったくなかったと、果たして言えるだろうか。シャガールと「マラーノ」とのつながりは、ポルトガルの異端審問所による焚刑auto da féと、リスボンからの「追放」の記憶をひとつの水脈に、強く結びついてくるのである。このことは、シャガールの「磔刑」のテーマにおける「ユダヤ的キリスト」という、宗教混淆現象を説明する根拠のひとつとなると考えられる。

キリスト教において「磔刑のイエス」はアダムとエヴァによる「原罪」を贖うべき「救済者」として信仰の対象とされてきた。西洋美術史においてもまた、このようなキリスト教的文脈での作品解読が有効とされてきた。しかし、上述ように、上記2点の作品解読から導き出される問題系は、このような「解読マニュアル」から大きく外れた文脈の設定を要請してくる。またキリスト教史が近年まで語る事を忌避してきた、闇に葬られた影の歴史的問題へのアプローチをも要請してくるのである。こうして、浮かび上がってくる問題は「美術史」の領域に、「反ユダヤ主義」「宗教的不寛容」「ユダヤ・ディアスポラ」などの問題系を接続させていくのである。

問題系1との接続のために：異領域成果の参照

このような、地理的、文化的、宗教的、時間的な「越境的テーマ」を包含する作品解釈とその成果発表には、これまで一領域内で共有されてきた共通認識だけで十分な説得力を持たせることは困難であり、これらの問題系に即した新たな文脈の構築が必要となる。つまり、中東欧地域のみならず、ヨーロッパ・ユダヤの歴史・文化に関する研究の蓄積を合わせて参照しつつ、作品のテーマ、モチーフとを結びつけていくようなプレゼンテーションが準備されなくてはならないだろう。美術史では扱われることのない「マラーノ」の精神史への参照も、本章で扱った作品のテーマが、作品の解釈とその成果発表の際に必然的

に要請してくる方法なのである。

次に、視点をやや変えて、作品が、他の芸術領域、つまり音楽文化や文学などとも響き合いながら創造されている作例を扱いながら、芸術諸領域の横断・越境という、シャガール芸術のもうひとつの越境性について考察したい。

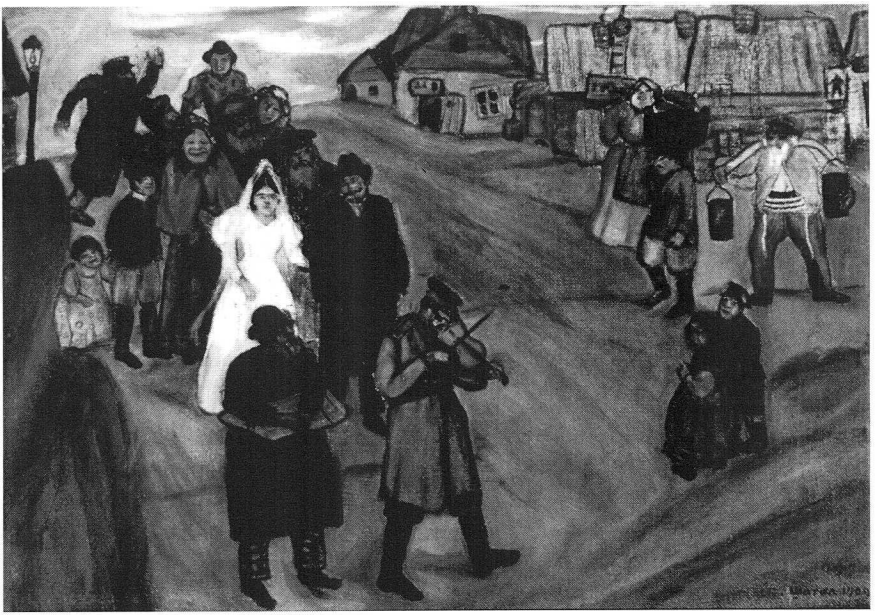
2「クレズマー」を描いた作品

中東欧のディアスポラ（離散地）では、ゲットーやシュテートル（いずれもユダヤ人強制居住指定地域）に隔離された閉鎖的なユダヤ人共同体で中東欧ユダヤ人（アシュケナジーム）の宗教的な文化が醸成されて行った。しかし、1648年のコサック兵の首領ボグダン・フメルニツキーの乱[*6]など、頻発する反ユダヤ的暴動・虐殺という過酷な現実に有効な解決法を示せない非現実的で厳格な律法至上主義に対する反発として、神秘主義的な信仰運動ハシディズムが大衆の支持を得て発展する。この宗教的運動は、後述するように西欧の改宗ユダヤ人「マラーノ」の精神的支柱となった神秘主義思想カバラの流れを汲む宗派である。このカバラ的ユダヤ教を媒介として、西欧のユダヤ教徒「セファルディーム」と中東欧のユダヤ教徒「アシュケナジーム」の精神的なつながりを辿ることができる。したがって、一見すると直接的な関連性がないように思われるシャガールのアシュケナジームの文化に根ざす芸術的源泉とセファルディームの歴史とは、前述の「マラーノ」と焚刑の記憶という水脈と共に、カバラを媒介としたもうひとつの水脈でつながっていることが看て取れる。

6——17世紀半ば、ポーランドはローマ・カトリックの勢力下にあり、ギリシャ正教徒であるコサックを蔑視し圧力をかけた。それに対し、コサック兵の首領ボグダン・フメルニツキーに率いられたコサック兵たちが反乱を起こした。その際、ポーランド貴族の「手先」として徴税吏を務めていたユダヤ人がポーランド人と共に標的となり、10年間続いた反乱で約10万人のユダヤ人が虐殺された。この事件は、イディッシュ文学においても、結婚式当日に虐殺された新郎新婦の霊が時代を超えてさまよう、といったエピソードのかたちで世代を経て生き続け、記憶に刻まれ続けた。

H. H. Ben-Sasson, *Geschihite des jüdischen Volks, Von den Anfangen bis zur Gegenwart,* Verlag C.H.Beck, München, 1995, S.802-803.

上田和夫『イディッシュ文化　東欧ユダヤ人のこころの遺産』三省堂、1996年、154-155頁



［図5］ ロシアの結婚式 1909

［図6］ 婚礼 1911
パリ、ジョルジュ・ポンピドー・センター蔵

モデルとなる作品：「結婚式」のテーマ

*

《ロシアの結婚式》

[図5＝1909年制作、カンヴァスに油彩、縦68cm、横97cm、E.G.ビューレ財団所蔵]

故郷ヴィテブスクと思われる町の通りを花嫁が父親に付き添われ、二人の楽師に先導されて式場（花婿の家）へと向かう場面である。シュテートルの町並みと、水運び人夫など、そこで生計を立てるユダヤ人達の風俗が描かれている。同じモチーフを《婚礼》[図6] でも扱っているが、西欧化の進んだサンクト・ペテルブルグでの修業時代と、パリでの新しい芸術思潮の実体験を経て著しい色彩感覚の開花が看て取れる。先導する楽師はクレズマーと呼ばれ、結婚式では必ず演奏を担当した。独特の旋律を組合せ即興的に演奏される楽曲から、誰もが親しんでいる民謡まで、幅広いレパートリーを持っていた。披露宴では彼らの演奏により全員参加の大演舞会が繰り広げられる。

*

問題系2：「中東欧ユダヤ文化」→イディッシュ音楽「クレズマー」

ここでは、シャガールが生まれ育ったユダヤ人集落「シュテートル」でのハレの日の様子がテーマとなっている。これらの作品解釈に必要とされる問題系は、まず、中東欧のユダヤ文化が受け継がれていった場、シュテートルという存在がどういったものだったかということ、そしてそこでの生活＝宗教的な生活の在り方である。そしてまた、その生活は固有の音楽文化と深い結びつきを持つものでもあった。

東欧ユダヤ音楽、つまりイディッシュ音楽[*7]「クレズマー」は、中東欧ユダヤ人の結婚式などの祭儀で、場の雰囲気を盛り上げたり、歌や踊りの伴奏をするために演奏された音楽で、この音楽の名称と同じく「クレズマー」と呼ばれる職業的音楽家たちによって担われた。ところで、中東欧ユダヤ人のシュテートルでの日々の生活は、ハシディズムと呼ば

7――― イスラエル建国＝1948年以降のユダヤ音楽、とりわけ、1967年6月の第3次中東戦争以降のナショナリズムと結びつきやすいイスラエルのフォーク音楽と区別するため、本稿では第二次世界大戦以前の東欧ユダヤ音楽を指す名称として意図的に「イディッシュ音楽」を用いる。

れる、ユダヤ教神秘主義カバラの流れを汲む神秘主義的な信仰に基づいて営まれていた。モーゼス・ベン・シェムトーブ・デ・レオン（1250? ～1305）の手になるといわれる著書『ゾーハル（光輝の書）』に強い衝撃を受けたイサーク・ルーリア（1534～1572）は、神の創造的行為を「容器の破壊（シュビラート・ハ・ケリーム）」理論としてまとめた。弟子のハイーム・ヴィタール（1543～1620）がその著書『神聖の門』に整理したルーリアのカバラはスペイン、ポルトガルを追放された「マラーノ」たちの信仰の支えとなったばかりでなく、アルプス以北からポーランドやリトアニア、ロシアなどの中東欧へ流謫したユダヤ人（アシュケナジーム）にも大きな影響を与えた[*8]。というのも、ルーリアのカバラで説明される「容器の破壊」理論が「追放」「流謫」やポグロムによるユダヤ民族の離散とそれに伴う苦難の体験、そしてそれらを乗り切った後に訪れる「祖国の回復」と「メシアの到来」を説明したものと解釈され、離散地で暮らすユダヤ人に受け入れられたからである。このようなルーリアのカバラに影響を受けた、ウクライナ出身のバール・シェム・トーブ（「善き名の師」を意味する通称、本名イスラエル・ベン・エリエゼル、1699～1760）の説く教義は大衆に非常に理解しやすいものだったので、約10万人のユダヤ人が犠牲となったコサック兵の反乱「フメルニツキーの乱」（1648）やポーランド分割（1772、1793、1795）の結果、反ユダヤ主義が勢力を増していた中東欧で、不安と隣り合わせの生活を営んでいたシュテートルのユダヤ人の心を捉えたのだ。ハシディズム信仰の特徴は、毎週の「シャバット」（安息日）や律法に定められた祝祭時、結婚式などの席で繰り広げられる歌と踊りによって魂の昂揚を得て神に近づくことができる、と考えるところにある。

> 世界の創造に際し、神の放った閃光の破片は地上のあらゆるものに付着している。完全なる神が創造したはずのこの世界に善とならんで悪も跳梁しているのは、閃光を受け留めるはずの「容器（ケリーム）」が破壊されたからである。したがって、この世を理想的状態にするためには四散した光を集め、「修復（ティクーン）」しなければならない。しかも、それができるのはあなたがた人間だけである。それは神の恩寵をいつも忘れることなく、心に留めながら食べたり飲んだりすることによって、また歌い踊ることによっても成し遂げられるのだ。あなたがたは学のあるなしにかかわらず、

8――ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』山下肇ほか訳、法政大学出版局、1985年、159頁（Gershom Scholem, *Die Jüdische Mystik in ihren Hauptströmungen*, Rhein-Verlag u. Alfred Metzner Verl. Frankfurt a.M./Berlin, 1957）

いつ、どんなときでも神の近くにいることができるのだ[*9]。

「クレズマー」の役割はこのようなハシディズム信仰にはなくてはならないものだった。シャガールが「結婚式」をテーマに描いた作品の世界は、こうしたハシディズム信仰によって営まれていた中東欧ユダヤ人の日常風景である。したがって、視覚芸術としての美術作品の解釈において、これら精神的文化を支えるための重要な要素であった民族音楽の関わりは無視できない。それどころか、その音楽の発する旋律は、単に作品の背景だけでなく、文化そのものを言葉に代わって雄弁に語るものなのである[*10]。

問題系2への接続のために：音楽演奏という方法

通常、イディッシュ文化全般や、クレズマーに関する事柄の理解には、多くの諸外国語文献資料へのアプローチと体系的な聴覚的資料の収集、試聴などに膨大な時間を要する。この作業そのものを共有することはあまり現実的ではなく、また有効な手段とも思われない。研究者によるこれらの作業から得られた成果と合わせて、この音楽文化を創造源としてもつ作品へとアプローチする方法として、本稿の冒頭でも述べたように、音楽そのものに注目することは有効であろう。「クレズマー」をモチーフとした作品、つまり、イディッシュ文化を背景にして創作された作品群の、非言語的解説として、クレズマー演奏会を催すなど、絵と言葉を越えた成果発表方法を組み合わせることにより、問題系への接続は容易になるのではないだろうか。

この考えに基づいて催行を試みたのが、2006年10月15日のCOE国際シンポジウム「インターフェイスの人文学」第6セッション「モダニズムと中東欧の藝術・文化」でのクレズマー音楽に関するレクチャー・コンサートである。このセッションでは、ベルリンを拠点に欧米各地で演奏活動や講演、教育的プログラムを推進している演奏家、アラン・バーン氏とクリスチャン・ダヴィッド氏を招聘し、レクチャー・コンサートを行った（写真）。約90分と、コンパクトながらも、非常に要を得た「クレズマー概説」と、貴重な録音資料によるレクチャー、そして、何よりも二人の演奏家による息の合った迫力のある芸術的演奏が参加者にもたらした効果は、イディッシュ文化の「説明」以上の価値を持つものと

9――― ゲルショム・ショーレム、前掲書、444頁、上田和夫、前掲書、157-160頁

10――― Henry Sapoznik, Pete Sokolow, *The Complete Klezmer,* Tara Publications, Cedarhurst, N.Y. 1988, pp.5-18.

なった。「クレズマー」がどういうものなのかを、居合わせた全員が、体験を通して共有する絶好の機会となったはずである。

「モダニズムと中東欧の藝術・文化」でのレクチャー・コンサート

アラン・バーン氏（左、アコーディオンとピアノ）、クリスチャン・ダヴィッド氏（右、クラリネット）2006年10月15日、大阪大学中之島センター交流サロンにて（筆者撮影）

おわりに：シャガール芸術のフィールド

このように、彼の芸術の全体像を包括するべきフィールドは、単に複数の学問領域や芸術分野を横断・越境していさえすれば十分なのではない。これまで述べてきたことに付け加えるなら、彼が生を受けた19世紀末期の白ロシア・ヴィテブスクのユダヤ人シュテートル（「町」「街」を表すイディッシュ語）での体験は、折からのハスカラ（東欧ユダヤ人の西欧化教育運動）の影響を受けてヨーロッパの東西文化が隣り合い、交じり合い、かつまたロシアの伝統とも密接な環境のなかで積み重ねられた。さらに彼の体験は20世紀初頭

の西欧化が著しい芸術の都ペテルブルグへ、そして西欧における芸術文化の一大中心地、パリへと歩みを進めるに従い、芸術的体験、そして彼の芸術を支える文化的背景も、さらに重層的で越境的なものとなっていく。したがって、作品解釈においても、ユダヤ教と、隣接するキリスト教文化、そしてロシアの民族文化、宗教文化を横断・越境していくような視点をも付加して考察していかなくてはならないし、成果を共有するためにも、それに応じた領域横断的なあたらしい発表方法が構築されて行かなくてはならないだろう。

*

本稿を通して共有されるべき「問い」

①芸術作品創作の動機となる着想源へと迫るためには、どのような知識が必要となるのか、またどのような方法でそれを共有することが可能なのか。

②上記のような着想源へと迫る追究の道筋は、どのように既存の学問や学科の枠組を越えていくことになるのか。

*

［ひのうえちとし・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員］

人々をつくりあげるとはどういうことか

上田　達

《要旨》
本稿は、マレーシアで実施されているルクン・トゥタンガという住民自治組織に注目して、その中で「マレーシア国民」がどのように構想されているかについて考察する。筆者が調査したコタキナバルのルクン・トゥタンガを事例に、「マレーシア国民」を目指すものとして導入された隣人性というコンセプトをめぐる運営側と人々のそれぞれの解釈を示す。どのようにして人々がある種のカテゴリーに属するとされ、また、それらのカテゴリーが人々にとって意味のあるものとなるかについて明らかにしたい。
《キーワード》ルクン・トゥタンガ、マレーシア、隣人、作り上げる、住民自治組織

はじめに

本稿は、マレーシアで実施されているルクン・トゥタンガという自治組織に注目して、その中で「マレーシア国民」がどのように構想されているかについて考察する。いわば、想像の共同体としてのネーションがいかに実際の社会的な文脈で模索されているのかを示すことを目指す。どのようにして人々がある種のカテゴリーに属するとされ、また、それらのカテゴリーが人々にとって意味のあるものとなるかについて明らかにしたい。

共同体としてのネーションをめぐっては、ナショナリズムとして、時に血のメタファーとともに想起される。しかし、筆者が想定するナショナリズムは、独立や抑圧からの解放を目指す政治治動としてのナショナリズムだけではない。より広義に、国民というカテゴリーをもとに思考する方法として捉える。ナショナリズムという言葉で一般に想起される人々を熱烈に駆り立てる情動をも含めて、思考の単位としてネーションが定位されているものをナショナリズムと考えている。ナショナリズムという言葉のもつ磁場に引きよせら

れることなく、国民というカテゴリーがどのように作られていくのかを明らかにするのが本稿の目的である。

ところで、ネグリとハートは20世紀末からの〈帝国〉なるものの出現と、それへ対抗しうるものとしてのマルチチュードについて述べた文章の中で、非西洋諸国のナショナリズムの役割について次のように述べている［ネグリ＆ハート2003］。「共同体に関するあらゆる想像はネーションとして過剰にコード化されてしまい、そのため、共同体に関するわたしたちの構想もひどく貧困なものになってしまったのだ」[*ibid.*: 147]。彼らは非西洋諸国のナショナリズムが持つ進歩的な側面を認めつつ、それが国民国家の建設とともに抑圧的な機能に変わるとして、ナショナリズムにかわりマルチチュードに解放的な力を見出す。しかし、想像される共同体が国民のみになっているとするネグリとハートの主張を全面的に受け入れることはできない。政府が国民概念を構想しつつ実施する各種のプログラムにおいて、目指されているものには多様な解釈を生み出す余地が残されている。

1.「作り上げる」

本論では、イアン・ハッキング［2000（1986）］による人間の分類に関する論考で言及された「人々を作り上げる（making up people）」と呼ぶものを取り上げる。ハッキングによると、創出されたカテゴリーが分類する人々に働きかけると同時に、人々もまた、そのカテゴリーに働きかけていく。国民というカテゴリーが導入されようとするときに、人々の間で何を通じて、国民のみならず、どのような共同体が想像されているのかを実際の社会的文脈の中でみていきたい。

人間を分ける諸類型がどうやって生じ、それがどうやってリアリティを獲得していくのか、についてハッキングはより広いパースペクティブから俯瞰している。イノセントな実在論を採用しない限り、種々のカテゴリーは名付けを待ってそこに自然に実在するものではない。人間の行う言語行為が分類を作りだすとする主張は新しいものではない。人を分かつカテゴリーについても同様のことが言える［Hacking 1999］。

民族なり、エスニシティなり、ある種の集団カテゴリーを人々が日常的に使用することは想定しやすいだろう。しかし、これらが国家の影響から自由ではないことも想定しておく必要がある。近代国民国家が、領域内に住む人々を、民族学者等の専門家による知識に

もとづいてカテゴリーを創出し、その中に人々を分類しようとしていたことはよく知られる。たとえば、植民地時代のインドのカーストやマレーシアの民族集団がその例として挙げられよう。統治技術の精度が上がるにつれ、国民国家が専門家の知識をもとに創出するカテゴリーは、さまざまな機構を通じて人々をその中に含めていく。民族やエスニシティだけにとどまらず、多くのカテゴリーが作られていく。[*1]。

しかし、ハッキングはそうしたカテゴリーが人々の記述によってのみ新たに生み出されるとするわけではない。つまり、人間を分類していく場合、観察する側が創出する分類が、特定の集団をつくり出すと同時に、分類の対象まさにそのものが分類のしかたそのものに働きかけることがあることを指摘する。フーコーの影響を受けて研究を進めてきた彼は、ある種の人間を構成する言説を分析することの重要性を認めつつ、言説だけではなく、言説分析を踏まえた上でそれが作用する実際の局面に注意を向けよ、と主張する。

フーコーの影響を認めつつ、ハッキングはその対極にゴフマンを挙げている。対面的な状況における社会的な相互作用に着目するゴフマンと同様のものとしてエスノメソドロジーを挙げることができるだろう。ガーフィンケルらは、「自己執行カテゴリー」という概念をもちいて、社会で支配的なラベリングを自らの手で組み換えていくさまを記述する。ただ、カテゴリーの（ときに革命的な）使用に関するミクロな状況は記述できても、そもそも、そうしたカテゴリーを生み出す社会的文脈については不問に付される。つまり、カテゴリーの社会的な流通が見過ごされているのだ。エスノメソドロジーの分析が、ミクロな局面の客観的な分析のみに傾倒していくとする浜本［1984］の短い指摘を思い出す。

ハッキングは、フーコーに由来する言説やミクロな相互作用のみがある種の人々を作り上げるのではなく、それら二つが相互に及ぼす「ループ効果」について見ていく重要性を主張する。ただ、彼は「作り上げる」方法に関して一般的な説明をすることを避け、それぞれの事例の中で検討していかねばならないとして、研究の領野を開いて筆をおく。

以下では、ハッキングの導きにしたがい、ある種の社会的カテゴリーに属する人々を「作り上げる」ことの具体的な事例として「隣人」というカテゴリーに注目して、それらがどのように作り上げられているのかを検討する。具体的には、マレーシアで導入されている住民自治組織ルクン・トゥタンガの事例を用いる。「隣人」といった言葉を公的な言

1——— フーコーの影響を受けて、統治性に関して社会学的／人類学的な見地から検討する興味深い研究がなされてきている。たとえば［Gane et al. 1993］など。

説だけではなく、実際の社会関係の中で検討して、それらがどうやって人々の間でリアリティを獲得しているのか、あるいは、いないのかを示したい。

2. ルクン・トゥタンガ

ルクン・トゥタンガ（Rukun Tetangga）はマレーシア語で、「隣人同士の約束」、「隣人の誓い」を意味する。しかし、ここでいうrukunは規則の集合のようなものではない。ルクン・トゥタンガとは、マレーシア政府が提唱し——これは語義矛盾であるが——「政府が実施するマレーシア最大のボランティア組織」を指す。2002年にはマレーシア全体で2440が組織され、770万人の人が参画していると管轄である国家統合・社会発展省（Kementerian Perpaduan Negara dan Pembangunan Masyarakat）の報告書は謳う（Annual Report 2002, Kementerian Perpaduan Negara dan Pembangunan Masyarakat）。その主な活動は、1970年代に発足したときから実施されている見まわり（ronda-ronda）の他に、「統一幼稚園」、女性組織（Jiran Wanita）と若者組織（Jiran Muda）の形成と指導、サッカーやバドミントンといった各種スポーツ大会や親睦活動の開催などが挙げられる。

マレーシアでルクン・トゥタンガが初めて導入されたのは1975年である。当時のラザク首相が党大会でこの構想を打ち上げた。導入の契機となったのは、マレーシア独立前後の時期から政府と対立しつづけてきた共産党ゲリラの存在である。ベトナムとカンボジアにおける共産党勢力の伸長が国内の共産主義勢力の拡張を招くことをマレーシア政府は懸念した[*2]。この時に現実的だった脅威に対抗すべく、政府が実施したのがルクン・トゥタンガである。1969年に勃発したマレー系と華人系の民族対立の脅威が未だ過去のものとならず、治安を維持するために警察力を補完する自発的な組織としての役割が期待された。

しかし、治安維持機構として導入されたルクン・トゥタンガは時代の経過とともに、その役割を変えていく。政府の広報には次のようなキャッチフレーズが記されている。ルクン・トゥタンガの変遷をたどるのに明解な表現だ。

2——— 1975/06/22のBERITA HARIAN参照。

安全	1975年から1982年まで
隣人らしさ	1983年から2000年
共同体の建設	2001年から

マレーシアにおける共産主義勢力の退潮とともに、ルクン・トゥタンガは地域の治安を維持する「隣組」的な役割を果たす組織から住民同士のつながりを深める組織へと変質した。すなわち、同一地域に住む人々を有機的に結びつけ、「隣人」をつくり出すことに主眼がおかれるようになった。そして、2001年に国家統合局（Jabatan Perpaduan Negara）によって出された「ルクン・トゥタンガ21コンセプト」によって、ルクン・トゥタンガは新たな役割を付与される。このプロジェクトの中で、ルクン・トゥタンガは上記のキャッチフレーズにもあるとおり、隣人ををつくることから、「共同体の建設」へと主たる役割が移行した。ここでいう「共同体」は、地域の隣接する住民の集合という従来の「隣人」概念に加えて、民族集団ごとに分け隔てられてきた「マレーシア国民」を指す。マレーシア政府が5年ごとに掲げる国家計画にも、このことは明確に述べられている。

「急速なペースで進むグローバリゼーションは、家族構造の統合と伝統的な共同体にインパクトをもたらすのみならず、文化的な諸価値や社会統合と国民創造の諸規範に影響を及ぼすであろう。さまざまな努力がなされて、社会が否定的な諸価値に耐え得るだけの弾力を持つことを期待される。この目的のために、共同体発展のプログラムが都市と村落で強化され、自助努力（self-reliance）の精神を教え込むと同様に、さまざまな共同体間での隣人（neighbourliness）と調和のとれた生活を促進することに重点をおく」
（Eighth Malaysia Plan 2001-2005, Economic Planning Unit, p.530）

かくして、ルクン・トゥタンガは隣人というコンセプトを通じて「マレーシア国民」を作り上げることを目的とするようになった。

ルクン・トゥタンガの役割の変遷を捉えるために、「マレーシア国民」、あるいは「マレーシア人」という言葉が現代マレーシアでもつ位相について説明しておきたい。マレーシアは住民が文化的な多様性を持つ「多民族国家」として知られる。例えば、2002年の統計をひもとくと、マレーシアの人口約2400万人のうち、マレー人が54%、華人が26%、インド人が8%、サバ州やサラワク州に住むその他の民族が12%を占めている（Statistics

Handbook Malaysia)。もちろん、マレーシアが国家としてある以上、そこにマレーシア国民が存在していた。しかし、少なくとも人々にとって意味のある、聖餐のイメージを供給するものではなかった。それが植民地時代に作られたものであるにせよ[*3]、独立後に支配層が保持しようとしたにせよ、上述の民族集団が人々にとって意味のあるカテゴリーであった。

第二次大戦後に独立した国の多くが国民を創造することに腐心してきた一方で、マレーシアは国民的同質性を積極的に生み出そうとはせずに、主要民族集団がそれを補填した。マレー人と華人との暴力的な衝突が1969年に起こってからは、マレー人を優遇する政策を実施することで、均質な国民の創造は二次的な位置をとる。しかし、アファーマティブアクションのもたらす競争力の低下などの弊害が表面化するにしたがって、マレーシア政府は1990年代以降マレーシア国民を再び目指すようになる。時の首相マハティールが唱導するかたちで、民族に分け隔てられていない統合された「マレーシア国民」の創造が述べ立てられた。マハティール首相が掲げた「2020年ビジョン（WAWASAN 2020）」によると、2020年までにマレーシアは先進国に比肩するくらいになり、互いに分けられていない「マレーシア国民」がそれを担うだろう、という［Mahathir 1999］。つまり、マレー人や華人に代わる新しい共同体の想像が目指されることになった。いくつかの政策、例えば、それぞれの民族集団を特徴づける祝祭を「国民の祝祭」に「格上げ」といった政策が実施されるようになった。

こうして、いわゆる多民族国家であるマレーシアにおいて、「マレーシア国民」というものが新たな政治的アジェンダとなった。ルクン・トゥタンガは、マレーシア政府によって現在進められている、国民形成を促すいくつかの関連する政策の中の一つに位置づけることができる。マレーシア政府が5年ごとに発表する国家計画「マレーシア計画」においても、ルクン・トゥタンガはその意義と目標が述べられている。ルクン・トゥタンガがマレーシア計画で初めて言及されるのは第6次マレーシア計画（1991年～1995年）においてである。その成果は第7次マレーシア計画の報告書の中で、447のルクン・トゥタンガの委員会が新しく設立され、全国でルクン・トゥタンガの数は1514であると述べられている。具体的な成果として「多目的ホール」や「スポーツコンプレックス」が建設されたと

3――植民地の知（colonial knowledge）を巡って、マレーシア人の人文社会科学者らはいくつかの論文を発表している。例えば、［Shamsul 1998］など。

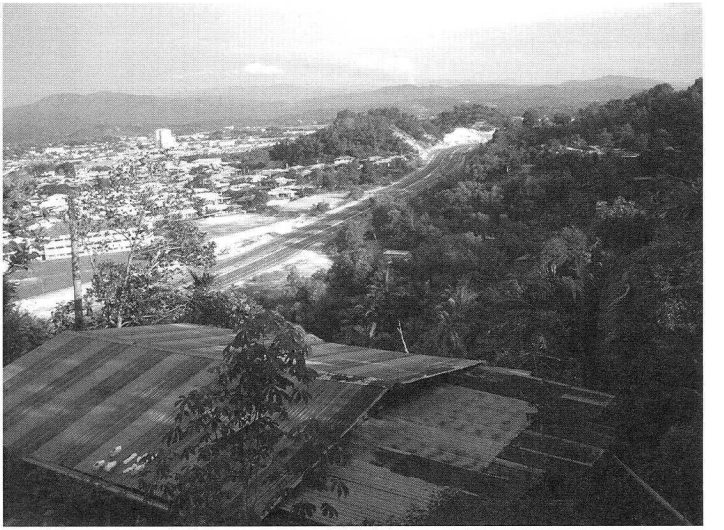
報告される。さらに、ルクン・トゥタンガの行う相互協力（ゴトンロヨン）や、近隣巡回などの活動が、「国民統合、相互尊重、それに調和のとれた生活を促進する目的で実施されている」とむすぶ（Seventh Malaysia Plan 1996-2000, Economic Planning Unit, 1996, p.569）。第7次マレーシアプランでは、さらに471のルクン・トゥタンガがつくられ、その数は2000を越えたとされ、参加した人数は660万人と謳われる（Eighth Malaysia Plan 2001-2005, Economic Planning Unit, 2001, p.513より）。

［写真1］ ルクン・トゥタンガが実施されている地区であることを示す看板。

筆者が調査している地域で実施されるルクン・トゥタンガの年次報告書の「目的」も明確にマレーシア人に言及している。同地域のルクン・トゥタンガの目的は、「ルクン・トゥタンガによる隣人らしさのコンセプトを通じて、統合の精神を育て、確固たるもの」にすることとされる。ここでいう統合の精神は、次の箇条の中でさらに具体的にされる。「統一したマレーシア国民の形成に向けた協力の精神と共に、人々の相互理解、寛容さを育てる」。ルクン・トゥタンガは、それまでの地域の親睦を深めるための、「隣人」を作り上げるものから、想像の共同体であるマレーシア国民、そしてその成員としての「隣人」を作り上げるものへと変化した。

3.「隣り合うこと」の齟齬

筆者が2005年度より調査を始めたのは、マレーシア・サバ州のコタキナバルという都市にある一つのルクン・トゥタンガである。それは、農村部から都市を目指してきた移民が作った、せいぜい2、30年の歴史を持つに過ぎない新しい「村」であるK村と新興住宅地とを包接する地区に作られた。「村」と「住宅地」では人口構成が大きく異なる。つまり、K集落ではサバ州の「原住民」にあたるドゥスンが大多数を占める一方で、住宅地においては華人が半数を占める。



［写真2］　調査地の村から臨む住宅地。道路を隔てて右側が村で左側が住宅地。

ルクン・トゥタンガの活動の中心は、90年代末に建設された新興住宅地内の敷地にルクン・トゥタンガのコミュニティホールである。建物の前にはバドミントン、セパタクロー、バスケットボールができるくらいの広場が用意されている。この地区でのルクン・トゥタンガの主な活動は、統一幼稚園の運営である。統一幼稚園は、マレーシア政府が幼年層から国民的な調和を涵養するために実施に移されているものだ。他の活動として、近

くの公立病院から医師と看護婦を招いて健康診断を実施したり、地区の子供達をつれて遠足にいったり、近隣の防犯見まわりを行っているという。

運営する責任者の一人に話を聞いたところ、ルクン・トゥタンガのプロジェクトはきわめて順調に実施されている、という。ルクン・トゥタンガの理想に描かれているのは、それまで近くに住んでいたのに相互に往来のなかった、分け隔てられた地区の住民たちを社会集団として相互に関連づけることにある。だが、責任者は、地区のルクン・トゥタンガの目的、実施状況について誇らしげに述べて、隣人であることをコタキナバルに21個あるとされる他のルクン・トゥタンガ同士のつながりに求める。地区内部に関することを質問すると、「問題もなく順調に実施されている」とだけいう。

あるとき、代表の女性は写真を見ながらイスラム教徒の断食明のパーティを紹介した。見せてくれた写真にはイスラム教徒であるマレー人のみならず、華人やインド人の姿も写っている。彼女によると、そのパーティにはコタキナバルにある16のルクン・トゥタンガのメンバーが参加したそうだ。彼女は言う。「ムスリムの断食明のお祭りなのに、華人、インド人、カダザンもいる。すべての人を呼んで、お互いの文化・慣習をわかり合うのだ。私達はいつもこうやって何かイベントをするたびに他の地域といつも協力し合う。そして、行ってみて、何か手伝うことがあれば手伝うし、運営のために我々が知らないことがあれば勉強する。」ここでは、ルクン・トゥタンガの目的である同一地区内の諸集団の接続が、それぞれのルクン・トゥタンガのユニット間の関係に置換されて、成功が語られる。

彼女にとって、政府が謳う隣人同士の友好的なつながりは、各地区同士の友好的なつながりとして理解されている。ルクン・トゥタンガ相互の間に読みかえられた「隣人」の関係は、政府が発する調和のとれた国民のイメージを演出することが可能になっている。しかし、それは対面的な状況を想定しておらず、いわば政府の刊行する文化観光のパンフレットのように虚ろである。ルクン・トゥタンガの内部にある隣りあう関係は語られることがない。

一方、「村」の住民によるルクン・トゥタンガへの評価は責任者のそれと大きく異なる。あるインフォーマントは「ルクン・トゥタンガといって隣人と言われても、住宅地の住民とは住む場所が違う。彼らは滅多に村にこないし、人の往来もない」という。多くの住民にとって、ルクン・トゥタンガの理念に謳われる「隣人」は、これまでの区分である居住区の中の顔の見える関係を意味する。「私達の村にも自分達のルクン・トゥタンガが欲し

い。いつか提案したいと思っている。でも、リーダーがいない」。彼らにとってルクン・トゥタンガの理想に謳われている、友好的な隣人を想定することはさほど困難ではない。だが、彼らが求める「隣人」は政府が構想する民族集団を越えてつながりあう者同士ではなく、ドゥスン族が大多数を占める集落内部での関係である。こうした隣人像からは政府のいう「マレーシア国民」は生じない。彼らにとって「隣人」は集落の壁を超えることはなく、あくまでも、字義通り、隣に住む、ローカルな言語を解する人間を指すからだ。彼らの顔が見える関係から紡ぎ出される隣人性は国民という共同体につながらない。彼らが隣人から想起する共同体は、言葉の通じる、そして集落に住んでいる大多数の住民をゆるやかに包接するドゥスンという共同体のことである。民族集団を越える紐帯をつくり出すコンセプトとしての隣人性は、特定の民族集団を想像するためのツールとして人々に理解されているのだ。

隣人という言葉をめぐり、運営する側は組織としてのルクン・トゥタンガ相互のつながりに「隣り合うこと」を見付け、政府のイメージどおりのマレーシア国民がいるとする。他方、住民はルクン・トゥタンガにある一方の集落内の関係に「隣り合うこと」を見付け、そこからエスニックグループという共同体が帰結する。隣人という言葉をめぐり、それに独自の解釈を施した結果、異なる共同体の像を結ぶことになる。

4. まとめ——問いの共有に向けて

これまで、マレーシアにおける1990年代以降のネーションの形成について、いくつか研究がなされた。冒頭で言及した2020年という統合された未来を設定したワワサン2020やマレーシア国民（バンサ・マレーシア）についてその公的なディスコースに注目した研究は多く出されている（例えば［Williamson 2002］）。昨年度に刊行された二篇の論文で筆者が論じたもの［上田 2006a, 2006b］も同列に置くことができるだろう。

しかし、国民であれ、民族であれ、ある種の人々が作られるときには、それらに関する公的なディスコースを検討するだけでは十分ではなく、そうした分類をめぐって人々がどのように働きかけているのか、そしてある種の齟齬が生じているかについて、さらに微視的な視点から描き出すことが必要である。言い替えれば、想像されたものがどうやって人々の日常に接合されているのかを具体的なプロジェクトの中で見ていくことである。本

論では、これまでに行った調査を元にして、ネーションの想像を謳う隣人という言葉を巡って生じる齟齬を指摘するにとどまるが、今後はさらに調査を進めて、一見して矛盾に写るものをめぐって人々がどのように対処していくのかについて明らかにしていきたい。

本稿では隣人性という概念を通じて作りだされるネーションを、政府がつくり出す制度や枠組の一例として論じた。しかし、制度なり枠組に関する事例は国民創造だけにとどまらない。計画する動物として、人間はさまざまな制度を思考し、案出する。本稿を閉じるにあたり、継続中の調査を含めて、筆者が取り組んでいきたいと考える「問い」を示したい。「ある制度／枠組みがリアリティを持つとはどういうことか？」この問いに答えるためには、人々が創出する制度や枠組が時に受け入れられ、また、時に失敗に終わっていくプロセスを、実施される現場に身をおきながら分析・記述していく方法をとぎすませていかねばならない。瑣末に見える微細なことを射程に捉える方法の探求によって、社会的な思考の産物としての制度や枠組がどのように人々の間でリアリティを獲得していくかを示すことが可能になると考えている。

謝辞

本研究のデータの多くは文部省科学研究費補助金（基盤研究B（海外））「境界の生産性とトランスナショナリティに関する文化人類学的研究」を受けて2005年11月から12月にかけて行った現地調査、および公益信託澁澤民族学振興基金「大学院生等に対する研究活動助成」により2006年8月に行った現地調査の際に収集した。記して関係諸機関へ感謝の意を表したい。

［うえだとおる・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉
リサーチ・アシスタント］

［参考文献］

文献

上田達2006a
「遠き眺め——マレーシア・ナショナリズムの語り方」大阪大学21世紀COEプログラム報告書『ポスト・ユートピアの民族誌』。

上田達2006b
「遠き眺めを見つめる」大阪大学21世紀COEプログラム報告書『インターフェイスの人文学——05年度〈若手研究者集合〉報告書』。
サックス、ハーヴェイ1987
「ホットロッダー——革命的カテゴリー」山田富秋他編訳『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房。
ネグリ、アントニオ&ハート、マイケル2003
『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲ほか訳、以文社。
ハッキング、イアン2000
「人々を作り上げる」『現代思想』28（1）：114-129。
浜本満1984
「現象学と人類学」綾部恒雄編『文化人類学15の理論』中央公論社。
Gane, Mike et al. (eds) 1993
Foucault's New Domains, London and NY: Routledge.
Hacking, Ian 1999
"Kind-making: The Case of Child Abuse" in *Social Construction of What?*, Cambridge, MA: Harvard UP.
Hacking, Ian 2002
"Making up people" in *Historical Ontology*, Cambridge, MA: Harvard UP.
Hacking, Ian 2004
"Between Michel Foucault and Erving Goffman: Between Discourse in the Abstract and Face-to-face Interaction." *Economy and Society* 33(3): 277-302.
Mahathir Mohamad 1999
Jalan ke Puncak, Subang Jaya: Pelanduk Publications.
Shamsul Amri Baharuddin 1998
"Debating about Identity in Malaysia: A Discourse Analysis" in *Cultural Contestations: Mediating in a Changing Malaysian Society* edited by Zawawi Ibrahim, London: ASEAN Academic Press.
Williamson, Thomas 2002
"Incorporating a Malaysian Nation", *Cultural Anthroplogy* 17(3): 401-430.

政府刊行資料および新聞資料

Annual Report 2002, Kementerian Perpaduan Negara dan Pembangunan Masyarakat
Seventh Malaysia Plan 1996-2000, Economic Planning Unit, 1996
Eighth Malaysia Plan 2001-2005, Economic Planning Unit, 2001
Statistics Handbook Malaysia 2003 (Buku Maklumat Perangkaan), Jabatan Perangkaan Malaysia.

BERITA HARIAN (1975/06/22)

ラシーヌ：「古典主義」と「バロック」のあいだに

藤本武司

《要旨》
フランス17世紀の古典主義は、もとは国家文化政策を背景に成立したものであるが、その後20世紀にいたるまでフランス文化の基盤として作用した。ジャン・ラシーヌはその古典主義を代表する悲劇詩人としていわば聖別され、後世の文学につねに影響を及ぼし続けた。しかし20世紀後半にいたり、ラシーヌの文学史上の地位に異議申し立てがなされるとほぼ時を同じくして、古典主義がそれまで黙殺してきた17世紀のひとつの文学潮流が、バロックとして文学史上に権利を主張することになる。両者いずれの動きもひとときの激しい盛り上がりの後、衰微または転位し、17世紀文学研究は一時閉塞状態に陥るが、1980年代からさまざまに形を変えて再度問い直されつつある。ラシーヌをめぐる古典主義とバロックの問題も、いまやこの新たなパラダイムの中で再検討される必要があろう。
《キーワード》ラシーヌ、古典主義、バロック、批評、真実らしさ

1. 古典主義とラシーヌ神話

フランスにおける古典主義とは、狭義においては、ルイ14世の治世下に輩出した作家・思想家の作品が示す傾向を指すが、より広義には、17世紀の枠を超えて、理性と節度を伴う理想的美学の傾向をもつ多くの作家たちにも適用される。その提要に従えば、第一に、美的判断のよりどころは理性であり、ために明晰で論理的な表現が求められ、それが描く内容は自然で普遍性をもつ真実でなければならない。虚構としての文学においては、これが「真実らしさ」(vraisemblance) の要求となる。次に、オネットム (honnête homme) のよき趣味に合致すべく、低俗、極端を排して節度を保つこと、つまり「礼節」(bienséance)

にかなったものでなければならない。また、理想的美学はすでに第一級の（classique）古代作家によって示されており、それは普遍的なものとして常に模範とされねばならない。これらの要求を実作に適用するため様々な規則が設けられる。作品のジャンルは峻別され、そこに序列がつけられる。17世紀第一のジャンルである演劇、とりわけ悲劇においては、時・場・筋の単一性、つまり三単一の法則などの厳守が求めらた。これに異を唱えつつも独創的な論を展開したコルネイユによって、古典主義悲劇の基礎が築かれる。ボワローの『詩法』（1674）がこれら古典主義の理論を集大成し、モリエールやラシーヌの諸作品において古典主義は完成をみた、とされる。

しかしながら、「古典主義の完成者ラシーヌ」という表現は「ラシーヌの美しい詩句」と言うのと同様、形容過剰であり、「ラシーヌはラシーヌだ」というバルトの挑発的言辞が示すのと同じ、トートロジーでしかないとはいえないだろうか。古典主義の規則にかなったラシーヌ、モリエールらの作品をモデルとしたものが、古典主義に他ならないのであるから。当時古典主義という言葉はまだ存在しなかったが、それは決して無意識的な文学現象ではなかった。リシュリューの発案によって創設されたアカデミー・フランセーズ――コルネイユの『ル・シッド』が「規則」に反するとの批判についての裁定を行った――やのちにルイ14世がそれまでの劇場を統合して発足するコメディー＝フランセーズ――ラシーヌをはじめとする「規則」にかなった規範的作品を主たるレパートリーとした――に代表されるように、その文学潮流は国家による文化統制と密接に関わっている。もっともこの上からの改革によって演劇そのものの地位が向上したことも事実ではあるが。

しかし、持ち前の強大な想像力と闘いながら、一部の作品においてかろうじて規則を受け入れたコルネイユとは異なり、ラシーヌにとってそれらの規則は彼の劇作の内的必然性でもあった。喜劇の分野におけるモリエールがやはりそうであったように、彼はむしろ例外であったのである。古典主義の勝利は、例外的な才能の力を借りて規則派が勝ち得たものに過ぎなかった。従って、ラシーヌの死後、彼に匹敵する後継者は出ず、ために悲劇は衰退の一途をたどる。続く18世紀において、ラシーヌを熱愛する啓蒙主義者ヴォルテールが「ルイ14世の世紀」を聖別すると同時に、その時代に屹立する古典主義の範例ラシーヌの神話化が始まる。『レ・ミゼラブル』の作者が、古典主義の規則に公然と異を唱えた際も――「古典主義」という語は彼等ロマン派の発明である――、打倒すべき敵のシンボルとはなったものの、ラシーヌの作品そのものはさほど傷を負ったわけではなかった。俳優の時代でもあったこの世紀は、ラシーヌの作品を無視することなく、俳優たちは人口

に膾炙したその名台詞の朗誦に心を砕き続けた。19世紀に成立した実証主義的学問体系、とりわけ大学における講壇批評によって、ラシーヌと古典主義の評価が今一度確認され、これまでラシーヌを参照し、それについて述べられてきた言説の総体はひとつの秩序のなかに押し込められ、それが学校教育制度のもとで広く規範として伝えられる。ここに古典主義悲劇詩人ラシーヌの神話が完成する。

2. ラシーヌ神話の崩壊

ところが、20世紀後半に始まったいわゆる「新批評」の流れのなかで、このラシーヌ神話に対する異議申し立てが行われる。心理分析をラシーヌ解釈に応用したシャルル・モーロン、マルクス主義の影響を受けて、ラシーヌが教育を受けたジャンセニストの「悲劇的世界観」を作品の中にあとづけようとしたリュシアン・ゴルドマンといった研究者のなかで、この神話の徹底的な破壊を企てたのが、もっぱらラシーヌの劇作品テキストをもとにして、「ラシーヌ的人間像」の構造主義的シェーマを提示したロラン・バルトであった。バルトは、『ラシーヌ論』(1963) において、作品の内部に繰り返し現れるテーマや、空間・時間の組織のされかたといったテクスト内の要素のみによって、作品の構造を浮かび上がらせた。一例を挙げれば、ラシーヌ劇の構造は、エロスの力関係と権力の力関係の捩れに還元されるというもの。1. AはBに対し全権を有する。2. AはBを愛するが、BはAの愛を拒絶する。これがAの情念を破壊的なまでに拡大し、悲劇を形作る。ただし、エロスの関係は作品によって流動的で、作品中に明示されない場合や、逆転が起こる場合もあり、どちらかというと副次的である。結果、恋愛をテーマとした精緻な心理劇とされてきたラシーヌ劇は、すべて迫害の劇、暴力の劇へと還元されることになる。

バルトの『ラシーヌ論』は、アカデミズムの側からは拒絶される。ソルボンヌ大学のレーモン・ピカールが『新批評または新欺瞞』という冊子を出版し、修辞的なバルトの言葉が検証不可能であること、誇張されていることなどを挙げ、彼を「システム人間」と断じた。そもそもバルトは、作品を「外部」の要素に安易に還元する、旧来の批評を拒み、読者のまなざしがテクストと出会う現場を回復しようとしたのであるが、そもそも、作品の内部に留まってテクストそのものを読む方法は、文献学の伝統を遵守するアカデミズムの場からは排除され続けてきたから、この結果は当然であった。ピカールはまた、バルト

の解釈が、ラシーヌの作品をごくありきたりの日常的レヴェルに引きずりおろし、耐え難い表現が用いられていることを非難した。このあたりには、アカデミズムがバルトの主張を古典主義の完成者ラシーヌに対する一種の涜聖の行為と受け取ったその感情的怒りの反映を見ることができる。

続いてバルトはピカールに対する反論として『批評と真実』を発表する。その中でかれは、「旧批評」を「真実らしい批評 (vraisemblable critique)」と呼んだ。これは古典主義の重要な規則のひとつである「真実らしさ (vraisemblance)」を意識しつつ、「真の批評」を標榜しながら、隘路に陥っているアカデミズムを皮肉る表現であろう。この「真実らしさ」を保証するもの、伝統的ラシーヌ研究の立場からすれば、それは同じ17世紀の規範であるが、それはさまざまな時代と社会において異なるコードにより支配されるものであって、ましてや制度と神話が強いるいわば「みせかけ」に過ぎないこの判断基準は、結局のところ恣意的な選択の所産であるといわざるを得ない。一読者としての批評家の立場をとるバルトにしてみれば、現代における日常の出来事を支配するコード——これは17世紀の人間の日常と全く無縁であろうか——もまた、選択の候補であり、実証研究の有効性はあくまでこの選択の後に来るものだということになる。

バルトの反論にピカールは応えず、両者は結局物別れとなる。新批評の流れはラシーヌ研究を超えて独自の道をたどり、バルトも構造主義を離れて変転してゆく。一方で旧ソルボンヌを中心とするアカデミズムはいっそう自己の中に閉じこもることとなる。

バルトの論があまりにシステマティックであることは確かで、その図式だけによってラシーヌの作品を説明しようとすると、多くの例外を認めざるを得ない。アカデミズムの側では、1980年代の末になってもまだ、このような点についてあら捜しとしか言いようのない論文が書かれている。バルトに対する怨恨とも言えるこういった不毛な反論に比べれば、バルトの提示した図式は、多くの場合ラシーヌ悲劇の特性をよく言い当てているのも確かであり、そこから作品解釈に多くの示唆を与えてくれるのだ。実際、学問的こだわりのない劇場上演の場では——20世紀は演出家の時代であった——いち早くその成果が取り入れられ、その当否はともかく、「古典の読み直し」に大きく貢献したのである。

その後のラシーヌ研究は、歴史に向かっていると言える。ラシーヌの実証的伝記研究はすでにピカールによってやり尽くされた感があり、より大きな歴史的コンテクストの中でラシーヌを捉えようとする傾向が顕著となっているのだ。そこでは、マルク・フュマロリによる研究のように、社会学的視野に立ち、文学・教育制度から、詩人の生成を再検討す

る手法が大きな成果をあげている。また、ラシーヌ研究の定本となる批判版は、従来、詩人の生前最後の校訂本を主テキストしてあげるのが基本であった。しかし、ラシーヌ没後300年を機に発刊されたフォレスティエによるプレイアード新版は、それぞれの初版本を基本テキストとし、当時の句読法を忠実に再現、また、完全な時代順の配列となっている。これは、作品を完成体としてではなく、流動的な相のもとに見、そこから創造の現場を検証する、草稿研究の出現と軌を一にしているともいえよう。

3. 古典主義とバロック

20世紀のフランスにおいて、ラシーヌ研究、というよりも17世紀の文学研究に大きな影響をあたえたもう一つの事件は、文学におけるバロックの発見であった。

古典主義の理論家が、国家の文化政策と足並みをそろえて文学の規則を検討していた際に、彼らが克服しようとしていたそれまでの時代の文学潮流、これが20世紀において初めて「バロック」と呼ばれることになったものである。従来は「前古典主義」と呼ばれていたこの時代の文学には、同時代のマニフェストは存在せず、文学史はただ、ルネサンスと古典主義の間に見出される過渡的な歴史現象として語るのみであった。演劇についてその特徴を述べれば、理性の桎梏を逃れて飛翔する想像力が紡ぎだすプロットはロマネスクなもので、「真実らしさ」は一顧だにされない。「礼節」をわきまえた文人であれば目を覆いたくなるような残酷な場面が観客の視覚を刺激する。時・場・筋の一致は無視され、悲劇と喜劇がない交ぜになって作品は一種のキマイラに比せられるものとなる。これらバロックの時代における様式上の特徴は、それぞれが、古典主義の理念と対立する形で呼応しているのは当然である。さらに当時の世界観を反映してそこにバロック特有のテーマが見出される。それは、人生の無常観そして人生劇場の思想である。全てが絶えず変化しとどまるところを知らず、人間はその中で翻弄されるのみ。また、人生は舞台上の演劇と同じで、仮りそめのものにすぎず、視覚を欺くただの見せかけ。後者の思想は、バロック演劇における劇中劇となって現れる。所詮虚構にすぎぬ芝居のなかにさらに芝居を入れ込むことで、虚実の境はいっそう不分明なものとなる。

「ゆがんだ真珠」を意味するバロックという語は、17世紀のフランスでは宝石用語としてのみ辞書にあがっていたが、18世紀半ばごろまでに「奇妙な」、「不規則な」、「不均衡

な」といった比喩的意味が加わっている。やがてこれが、風変わりな建築に対する否定的形容として一般化していった。19世紀末から20世紀初頭にかけて、これをより積極的、肯定的な意味で芸術様式の名称として用いたのが、美術史家ブルクハルトとヴェルフリンであった。ヴェルフリンは、バロックを特徴つける新たな「美の基準」概念として、「気まぐれな」、「奇妙な」、「常軌を逸した」といった形容詞を挙げ、規則を逸脱したものに対する人間のいだく喜び、不定形なものの持つ魅力に言及、加えて『美術史の基本原理』では、完成されたものの代わりに、動き、変化を求める傾向をあげ、これらは後の文学におけるバロック研究においても基本概念となっている。その後第二次大戦中にレーモン・ルベーグがバロックの概念をフランスの「前古典主義」時代の演劇に適用、そして戦後1950年代にいたって、ジャン・ルーセによる『フランス・バロック期の文学』(1953)、ヴィクトル＝リュシアン・タピエの『バロックと古典主義』(1957) が出版された。いち早くこの用語を受け入れたドイツ、イタリアとは異なり、古典主義がその文化的根幹に断固居座っていたフランスの反応は鈍かったのだが、これらの著作の発表を経てようやくバロックという語に門をひらき、1960年代バロックのブームがひきおこされることになる。

20世紀フランスにおけるバロックの発見がもつ重要な意味は二つある。一つは、古典主義という、17世紀の国家文化政策にはじまり、近代の学問体系によって維持されてきた理念がこれまで抑圧し、抹殺してきたものを明るみに出したこと。もう一つは、20世紀における世界大戦の戦中・戦後の混乱に続く時代がはじめてそれを発見したということ。つまり、そこには、近代が崩壊したあとの人間が直面している世界の状況が、投影されている可能性が高く、20世紀と17世紀を結びつけるひとつの線をそこに見出すことができるのである。このことはまた、これらの研究がその対象とする時代のみならず、研究者の位置する時代の影響をのがれることができないことを示すものといえる。

ジャン・ルーセの主張は、単にバロックを古典主義のゆがみとして見るだけでなく、そこに独自の秩序を見出そうとめざすところに特徴がある。しかもその秩序は古典主義を補完するものとしてのそれだという点であった。

ところが、1960年代のバロックブームは、その後急速に衰えていく。流行というものの常ではあるが、バロックという語はそのあいまいな定義のままに乱用され、拡散してゆく。それがもともと美術史学からの借用語であったこと、しかもそこでは、バロックはルネサンス古典美術のあとに位置するものであって、フランスでは時代が逆になっていること、さらに、バロックに特徴的な技法の名称であるマニエリスムという語との相克と混用

といったさまざまな悪条件が重なって、この新しい用語は凋落してしまうのである。

しかし、1968年に発表された『内部と外部』の最終章「バロックとの決別か？」においてルーセは、バロックのブームと混乱の時代への反省とともに、古典主義とバロックとの関係に関する問題はいまだ解決されておらず、古典主義とはどうしても相容れない想像力が17世紀には認められ――想像力とは17世紀においては、理性に対立する概念であり、古典主義の立場からは当然排除されるべきものであった――、その解明はまだこれからであることを確認する。ルーセの意図はその後,ドイツのヴィルフリート・フレックによって引き継がれ、1980年代も終わりにいたってディディエ・スイエの『ヨーロッパのバロック文学』の中で、あらたな研究へ向けた仕切りなおしが行われることになった。つまり、文学におけるバロックを用語の借用元である美術史学から切り離すこと、代わりに、比較文学そして、歴史学との協働に向かうこと、さらに研究対象の国境を取り払って、その視野をヨーロッパ全体に拡大すること。この指針は、先にも述べたマルク・フュマロリの広汎な文化制度史の研究によっても実行に移されつつある。

4. ラシーヌとバロック

ラシーヌが1677年の『フェードル』を最後に一般の劇場演劇から手をひいたとき、人々を魅了していたのは、オペラであった。オペラはその本質からいってバロック的な傾向を逃れ得ないジャンルである。それは古典主義理論の成立と並行して、ジャン・バティスト・リュリらにより、フランス独自の形態を獲得し、「音楽悲劇」として完成をみた。ラシーヌはつねにこのジャンルを唾棄してきたが、それに対抗するあらたな総合芸術の形式を模索していたふしがある。例えば最後の劇作品『アタリー』は、コルネイユの古典主義的にしてバロック的な『ポリュクト』とともにこの時代における宗教悲劇の傑作とされる。合唱隊を導入しキリスト教の神秘を描いたこの作品は、リュリらの「音楽悲劇」とは確かに違うが、オペラとしての特徴は否定できない。そして後世にはまさにオペラとして受容されるのである。

いまここで、バロックとラシーヌについて、再検討を行うことは無意味なこととは思われない。すでにバロックブームの時代にラシーヌにおけるバロック的要素を扱った研究書はある。しかし、古典主義の規範であるラシーヌの作品にバロックの要素があると主張す

ることは、半世紀前なら近代の学問制度を背景としたラシーヌ神話に対するアジテーションとしての意味を少なくとも持ちえたかもしれないが、現在においては屋上屋を架すことにしかならない。これから問題としたいのは、ラシーヌの作品の「完成性」である。ラシーヌの作品に、ポリフォニックに表れるバロック的要素は少なくないが、様式としてのバロックをラシーヌに適応することはやはり困難である。しかし、バロック精神とでもいうべきもの、つまり、古典主義という制度がラシーヌの作品の属性として主張しつづけてきた調和・完成・静謐といった常套句に対して、衝突と不均衡、未完成もしくは未解決であること——劇のプロットとしての未完結性のみならず、そこには作品に対して読者もしくは観客が付け加えうる補完的要素という別次元の問題がある——、そして絶えず変化して止まない動き——劇において描写される世界の無常、不確かさのみならず、時代を超えて絶えず読み直しを迫り、またそれに耐えうる深さを持っていること——が、ラシーヌ作品の中でいかに評価されうるかということである。それによって古典主義とバロックという、歴史上においては常に敵対してきた文学の二精神が止揚される可能性を探ることができるのではないか。

*　*　*

本稿は〈若手研究集合〉によって2006年度に行われた一連のディスカッション・ドラフト検討会において、提出した論文「ラシーヌ『ブリタニキュス』の終結部に関する一考察——ヴェスタ聖女ジュニーをめぐって——」に付した註をまとめて書き改めたものである。検討会では、ラシーヌという、日本ではあまり知られていない劇詩人についての論文を紹介するにあたり、歴史上有名なローマ皇帝ネロを扱った作品『ブリタニキュス』をとりあげ、原註を適宜整理し、本稿のもととなったいわば研究史に関する説明のほか、作品の登場人物や劇の筋について、新たな註を加えた。専門を異にするメンバーによる討議のためには、止むを得ない方策ではあったが、専門を同じくする聴衆を前にした発表しか経験のない筆者には、きわめて貴重な体験となった。

〈若手研究集合〉による統一テーマ：「人文学討議空間のデザインと創出」に対するささやかな提案として、古典主義規則の一つであり、あらゆる演劇において、脚本家、演出家、俳優と観客の対話を保証する要素、つまり「真実らしさ」をテーマに、二つの問題提起を行いたい。

・「真実らしさ」は日常的なコミュニケーションではどのように「利用」・「評価」できるのか？
・「真実らしさ」を共通基盤としないコミュニケーションとは？

とりわけ後者は、この〈研究集合〉のような異分野間での討議、さらには、専門家と非専門家との間のコミュニケーションのかたち——演劇という芸術ジャンルは常にこの両者の対峙と内的コミュニケーションから成り立っている——を模索するうえで、示唆を与えてくれると考えている。

［ふじもとたけし・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任助手］

社会心理学における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉
アクション・リサーチにおける〈インターフェイス〉の設えをめぐって

加藤謙介

《要約》
本稿は、「インターフェイスの人文学」の主題である〈インターフェイス〉うち、〈臨床性〉に焦点を当て、社会心理学（特にグループ・ダイナミックス）を題材として議論を行うものである。まず、〈臨床性〉について、社会心理学の伝統的な研究手法の1つである「アクション・リサーチ」を取り上げ、その動向と現状を概観する。次に、「アクション・リサーチ」における様々な〈インターフェイス〉の設え方について、「概念」「手法」「道具」の3点から整理する。加えて、筆者自身のこれまでの研究をふりかえり、どのような〈臨床〉の場で、いかなる〈インターフェイス〉を設えてきたのかを概説する。最後に、共同的実践を継続するための〈インターフェイス〉について、筆者の展望を述べる。
《キーワード》〈臨床性〉、〈インターフェイス〉、社会心理学、グループ・ダイナミックス

はじめに

大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」では、〈臨床的な知（臨床性）〉、〈横断的な知（横断性）〉、〈インターフェイス〉の3つが主たるテーマであるとされている（鷲田、2003）。改めて整理するならば、〈横断的な知〉とは、「異なる複数文化のあいだの接触や交叉や軋轢を国家・地域横断的にとらえてゆくもの」とされている。一方、〈臨床的な知〉とは、「文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋してゆくもの」と定義づけられている。そして、〈インターフェイス〉については、「異質なものがたがいにその界面（＝顔）をふれあわせる出来事、あるいはその場面」という独特な位置づけがなされている。本COEでは、この3つを焦点として、人文

学の既存のディシプリンの枠組み、及び、専門家／非専門家の境界、この2種類の〈インターフェイス〉について探求することが、そもそもの目標とされている。

本稿で筆者は、〈臨床性〉と〈インターフェイス〉を題材として取り上げる。これには2つの理由がある。第1の理由はとても単純ではあるが、〈横断性〉については、2005年度の報告書論文（加藤、2006a）として、既に筆者なりの見解を示したから、というものである。もちろん、先の論文で示した横断的な知のあり方（issue-orientedな学知の再編）についての展望は、まだまだ議論の余地が残されてはいるが、まずは大まかな方向性を示したということで、現時点ではよしとさせて頂きたい。

もう1つは、〈臨床性〉及びその〈インターフェイス〉が、社会心理学において極めて重要なテーマの1つとして位置づけられているから、という理由である。後述するように、〈臨床性〉に臨む研究枠組みの構築は、旧来の社会心理学のディシプリン自体を問い直し、その変更を迫るものとなっている。本COEが、〈臨床性〉〈横断性〉〈インターフェイス〉の3つの軸からディシプリンの再編を企図するものであるなら、筆者なりの見解を、〈臨床性〉〈インターフェイス〉の2つの軸についても述べなければならないと考える。

なお、本COEプログラムでの〈インターフェイス〉には、学知と社会との接点という意味以外に、〈横断性〉の問題として議論される学知同士の連関の意味がある。本稿では、前者にしぼって議論を進めることとする。

1 社会心理学における〈臨床性〉

社会心理学は、その成立期から、実践的志向を強く持つディシプリンであった。その中でも、グループ・ダイナミックスは、その創設者クルト・レヴィンの有名なことば、「良い理論ほど実践的なものはない」（レヴィン、1979）に端的に表されているように、学問的知見の実践への応用に強い関心を持っていた。

グループ・ダイナミックスの古典的テキストのひとつにおいて、カートライトとザンダーは、その特徴として次の4点を挙げている。即ち、(1) 理論的に意味のある実証的研究の重視、(2) 現象のもつ力動性と相互依存性に対する関心、(3) 他の学問諸分野との関連性、そして、(4) 研究成果の社会的実践への応用可能性、である（カートライト&ザンダー、1974、pp.6-11）。特に、第4の特徴が、〈臨床性〉と関連がある。社会心理学ではこ

れを、「アクション・リサーチ」と呼んでいる。以下では、アクション・リサーチの定義や動向について概説する。

1-1 アクション・リサーチ

心理学でもっとも一般的な辞典の1つである『心理学辞典』(中島 他、1999) では、「アクション・リサーチ」について、「社会環境や対人関係の変革・改善など、社会問題の実践的解決のために、厳密に統制された実験研究と現実のフィールドで行われる実地研究とを連結し、相互循環的に推進する社会工学的な研究方法」という定義がなされている。また、保坂 (2004) は、アクション・リサーチの最もシンプルな定義として「変化を試みて、その次に何が起こるのかをみる方法」(p.176) という言葉を紹介している。

アクション・リサーチの手順について、「心理学辞典」では以下の5つのステップにまとめられている。

(1) 計画段階：変革の対象となる事態の正確な観察と分析を行い、改善目標を設定するとともに、過去の研究知見を参考にして目標達成のための方策を検討し仮説をたてる。
(2) 実践段階：仮説に従って具体的な活動を実践するが、必要ならば前もって訓練・教育を行う。
(3) 評価段階：活動の有効性と仮説の妥当性を検証するために、目標達成度を客観的科学的測定に基づいて行い、活動内容や方策に改善すべき点の有無を検討する。
(4) 修正段階：改善すべき点があれば修正を行って再度同様の過程を繰り返すが、このとき実験研究の知見の有効性を実地研究で確認し、実地研究で示された知見の理論的妥当性を実験研究で検証するという具合に実験室と現場をリンクさせながら進める。
(5) 適用段階：目標が達成されたら、その成果を異なる社会事象にも適用してみて、その方策の効用と限界を見きわめる。

要するに、何らかの実践現場に対して「科学的」な調査を行って確固たる「一般原理」を模索しつつ、その知見を実践の場に還元し、実践を通して学的な知見に修正を加えて陶冶

を図る、という一連の営みが、伝統的な心理学における「アクション・リサーチ」として位置づけられていると言える。

「アクション・リサーチ」という用語自体は、1930年代末に、レヴィンによって提唱されたものであるが、社会問題の実践的解決を目指す研究手法のルーツは、社会心理学に留まるものではない。小林（1984）は、アクション・リサーチの起源が、第2次世界大戦を中心とする1940年代後半から1950年代前半にかけての社会の動きそのものにあるとし、以下の4つの流れを紹介している。第1に精神医学・心理学的な実践であり、第2次世界大戦中・戦後に実施された神経症患者および帰還捕虜の治療とリハビリテーションなどの実践の流れを汲むものである。この取り組みでは精神医学者、心理学者、人類学者などの連携が見られた。第2に、オペレーションズ・リサーチの流れである。オペレーションズ・リサーチは、数学、エンジニアリング、物理的諸科学の知見を、交通問題、生産問題、組織における意思決定などの複雑な課題に対する解決手法として開発されたものである。第3に、グループ・ダイナミックスが、そして第4に、応用人類学が挙げられている。社会問題が山積する当時の社会状況に加え、それらの解決を目指す学問的風潮が相まって、アクション・リサーチという研究方法が確立されていったと言えるだろう。

アクション・リサーチは、職場、教育現場、コミュニティなど、様々な実践的集団に対して実施されてきた。古くは、例えば、レヴィンらが行った「食習慣変容実験」と呼ばれる研究が挙げられる[*1]。レヴィンは、第2次世界大戦中のアメリカにおける一般市民の食生活を変えるために、単に新しい食習慣を紹介するだけに留まらず、民主的な「集団決定法」を導入することで実質的な変化をもたらすことを、主婦のグループを対象として検証した。レヴィンは、個々の事例を一般化し理解するために「われわれはそれを変えようとするときにのみ、その何かを理解することができる」との構成概念を生み出し、プロセスをつかむために変化を創り出し、その効果を観察することで新しいダイナミクスを見出すというアプローチを洗練させていった（保坂、2004）。

日本では、三隅の研究が著名である。三隅は、組織のリーダーシップの機能を、課題解決・目標達成に関する機能（performance function：P機能）と、集団の存続や維持に関する機能（maintenance function：M機能）より成り立っているとし（「P-M理論」）、リーダー

1――レヴィンのアクション・リサーチについての社会心理学史的な位置づけに関しては、吉森（2001）などに簡潔に整理されている。

シップの類型とその効果について、企業組織、官庁、学校など様々な場面で研究を重ねた（例えば、三隅、1966）。三隅らのグループはその後も精力的に研究を続け、造船所などの職場における組織開発（三隅、1975）や、緊急避難時における2つの避難方法（「指差誘導法」と「吸着誘導法」）の比較検討（杉万・三隅・佐古、1983、1984）など、様々な組織・集団・状況において知見を重ね、それを実践に還元することを努めた。

現在では、アクション・リサーチは、教育学、看護学、経営学、組織科学、人間関係トレーニング等、社会心理学以外の分野でも幅広く活用されている。心理学の文献検索エンジン「PsychInfo」によれば、「action research」をキーワードとする学術論文は1680件に上っている。また、和文論文検索エンジン「MAGAZINE PLUS」では220件がヒットした（2006年7月27日現在）[*2]。学術雑誌としては、その名も「Action Research」が2003年よりSage Publicationから刊行されている[*3]。また、日本でも、2006年12月に公刊予定の「心理学評論」49巻3号において、「質的心理学とアクションリサーチ—パーティシペーション、ナラティブ、フィールド共同実践の融合的視点」と題された特集が予定されている[*4]。

このように、アクション・リサーチに対する関心は、現在でも高いものである一方、出自の1つであるはずの社会心理学では、それほど盛んではなくなってしまっているように見える。例えば、最近の社会心理学の一般的なテキスト（Gilbert, Fiske, & Lindzey, 1998）では、「action research」という語そのものがインデックスから外されてしまっている。

後述するように、アクション・リサーチということばを積極的に使ってはいないが、学知の社会への還元や、当事者との協働を目指す学問分野は少なからず存在するため、一概にアクション・リサーチが廃れてしまったと言うことはできない（筆者も、自身の研究論文において「アクション・リサーチ」ということばを使ったことは一度もないはずである）。日本グループ・ダイナミックス学会第53回大会（2006年5月27日開催）においても、「アクション・リサーチの新展開」と題されたワークショップが開かれるなど、社会心理学の内部でも依然として関心は低くはないと思われる。

2——研究の動向を知るためには、検索結果をもとに、論文のテーマや件数を分析し、その傾向を見ることが望ましいが、詳細なレヴューについては今後の課題とさせて頂きたい。

3——筆者は同誌の論文内容については詳細に検討できていない。ウェブ上で公開されているアブストラクトを見ると、心理学のみならず、社会学、政策科学、医学・看護学など、幅広い分野の研究者が寄稿しているようである。

4——「心理学評論」誌の公式ウェブサイト（http://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/hyoron/）を参照されたい。

しかしながら、日本グループ・ダイナミックス学会の学会誌「実験社会心理学研究」に掲載された過去10年間の論文を概観すると、そのほとんどが基礎的な概念の検討を目的とした実験室実験や質問紙調査であり、現実の社会場面への知見の応用や当事者との協働を目指した研究論文は多くはない。

この理由については、筆者はまだ十分に先行研究をレヴューできておらず、確信を持って何かを述べることはできない。ただ、推測するに、2つの理由があると考えられる。1つは、アクション・リサーチの基礎となる研究があまりにも方法論的な厳密性を求めるあまり、その知見を実践の場に還元することが困難になったのではないか、という点である。もう1つは、そもそも社会心理学者たちの研究が、諸々の実践から乖離してしまっているのではないか、ということである。前者は「心理学辞典」にも解説がなされており、一般的に知られた事実でもある。また、後者については、加藤（2006a）でも紹介したように、「専門離人症」というありがたくない病名まで頂いている。このような現状は、ある学問分野が実践と関与し続けることの難しさの一端を表していると言えるだろう。

1-2「アクション・リサーチ」の変遷

こうした現状がある一方、「アクション・リサーチ」という用語を使わずとも、研究を通して（調査対象である）現場や社会への積極的介入を志向する方法論の開発と蓄積は進みつつある。ここでは、その例をいくつか紹介しよう。

教育学や発達心理学の流れを汲み、ヴィゴツキーをはじめとするロシア心理学を源流とする「活動理論」（エンゲストローム、1999; 山住、2004）では、研究を、仕事や組織の実践活動の「発達」（development）をめざす「介入」（intervention）の試みであると位置づけている（山住、2004、pp.70-71）。そして、実践者が自身の「活動システム」を分析し新たにデザインすることを手助けするような介入の方法論として「発達的ワークリサーチ」という方法論が提唱・実施されている。研究者は、実践活動の組織やコミュニティの実践家らと信頼関係を築き、その上で、彼らの活動を集団的な対象志向的活動システムとして捉え、そこに現れる矛盾・葛藤を記述・分析するとともに、実践家と協働で新たな活動システムを構築することを目指している。そのための具体的な方法として、「チェンジ・ラボラトリー」と称した、研究者と実践家の議論の場作りの仕方についても論じられている。

また、発達心理学においても、参与観察的手法を発展させ、調査地に積極的に関与する

手法が提唱されている。例えば、當眞は、「(研究者が) 現場の人とは異なる役割を担いながら、現場の人びとともに実践を形成していく過程に研究を織り込む試み」として、「形成的フィールドワーク」という用語を提案している。

これらに加えて、筆者の専門である「人間科学としてのグループ・ダイナミックス」(e.g., 杉万、2006) では、協同的実践 (あるいは協働的実践) ということばを用いて、研究者と当事者との関係を、研究のパラダイム全体を組みかえる中に位置づけている。従来の心理学的なアプローチでは、自然科学的手法を遵守し、研究者と研究対象者 (被験者) との間に一線を画し、研究においては、コントロール不可能な相互作用をできるだけ与え合わないよう努めてきた。しかし、「こころ」を研究するには、研究者と対象者が言説を交わし、互いに影響を与え合うのは原理的に不可避である[*5]。そうであるならば、この相互影響過程を「協同的実践」と位置づけ、研究者と研究対象者 (当事者) とで積極的に「一緒に何かを行う」ことを学問的使命とするのが、杉万らの主張する「人間科学」のスタンスである。このような研究は、様々な「活動 (アクション)」に対する「研究 (リサーチ)」の意識的な介入であり、この意味で、実践の現場ではアクション・リサーチならぬ「リサーチ・イン・アクション」が研究の位置づけとなる (矢守、2006)。

こうした様々な試みは、広義の「質的研究法」への関心の高まりと相即していると考えられる。質的研究法とは、単に定量的データの代わりに定性的データを取り扱う方法論ではない。やまだ (2004) は、質的研究法について「具体的な事例を重視し、それを文化・社会・時間的文脈の中でとらえようとし、人びと自身の行為や語りを、その人びとが生きているフィールドの中で理解しようとする学問分野」であると述べ、次の5点の基本的特徴があるとしている。即ち、(1) 客観主義の基盤になってきた「素朴実在論」への懐疑、(2) 観察者と観察対象の相互作用や社会的相互行為の重視、(3) 社会・文化・歴史的文脈を抜きに抽象的に仮定されてきた「普遍性」と「グランド・セオリー」への懐疑、(4) 人びとが生きる世界の多元性と多様性、変化プロセスの重視、(5) 意味やナラティヴの重視。要するに、質的研究法は、従来の科学的研究の基礎となっていた人間観や認識論を問い直す「ナラティヴ・ターン (物語的展開)」の影響を多大に受けている、とやまだは述べている。

言うまでもなく、質的研究法の全てが実践への介入を志向するものではない。しかし、

5——— 例えば、Sugiman (2006) では、社会構成主義をメタ理論とし、研究者と研究対象者の二分法が原理的に成立し得ないことを論じている。

質的研究法の背後にある、学知のあり方全体に関わる大きな流れは、研究方法論としてのアクション・リサーチの位置づけにも大きな影響を与えている[*6]。アクション・リサーチは、質的研究法、及びその根底にある理論的・思想的背景の広まりとともに、調査対象との積極的交流を是とする研究方法論としてその内容が改訂され、社会心理学のみならず、既存の様々なディシプリンの枠組み自体に大幅な変更と修正を迫っている。

2 社会心理学における〈インターフェイス〉

実践を志向し、学知の社会への還元を追及してきた社会心理学（特にグループ・ダイナミックス）では、学問的知識と社会とを接続させるための様々な手法について検討してきた。前述のカートライトとザンダーは、知識の実践への変換について論じる中で、グループ・ダイナミックスの研究者が多くの仕方で社会的実践に影響を与えることができると論じている。

一方で、カートライトとザンダーは、基礎的な研究の成果を実践に応用することについて、次のようにも述べている。「原理というものは実践なり手続きなりに変換されなければならない。（中略）問題は、基礎的知識を有用ならしめる過程に多大な努力が傾注されなければならないということを、研究者も実践家も十分に認識していないということである。（中略）きたるべき時代には、確固たる一般原理の上に立って、集団生活の新しい技術をいかにして発明するか、そしてまた、それらの技術を一般的実践に移す前にそれらがもたらすであろう実際の諸結果をいかにして評価すべきか、という挑戦的課題に直接取り組むところの新しい専門分野の興隆が望まれるのである。」（カートライト＆ザンダー、1974、p.76）。

カートライトとザンダーは伝統的なグループ・ダイナミックスの直系であり、筆者の立場とは異なる部分もあるため、筆者は全面的に彼らの意見に賛同するわけではない。しか

6――実際、アクション・リサーチに関する論考は、近年は社会心理学ではなく、広く質的研究法の文脈の中に位置づけられることが多い。ここでは紙幅の都合で一部しか取り上げないが、例えば、質的研究法の辞典における用語解説（e.g., Schwandt, 2001）や、質的研究法の概説書における論考（e.g., Kelly, 1999; Whyte, Greenwood, & Lazes, 2001）などが挙げられる。中には、アクション・リサーチという研究法を通して大学と社会との関係を問い直す論文（Greenwood & Lewin, 2003）もある。

し、このことばを筆者なりに解釈すれば、「研究者と実践家との協働の中で、両者の〈インターフェイス〉をいかに設えるか」、という問題提起がなされていると言えるだろう。このように捉えると、40年以上前の彼らのことばは、現在でも非常に意味のあるものであると言える。

学知と実践とをつなぐ〈インターフェイス〉の設え方には様々なあり方があると考えられる。以下では、「概念」「手法」「道具」の3点から、〈インターフェイス〉について整理をしてみよう。

2-1 『概念』の開発

「研究者と当事者の協同的実践において、研究者が、研究者として、なすべき貢献は、一にかかって、理論に基づく貢献であろう。理論に基づく貢献を除外すれば、研究者としての貢献と研究者以外の人の貢献に、本質的な違いはないはずである」。これは、「人間科学としてのグループ・ダイナミックス」の提唱者である杉万（2006、p.42）のことばである。アカデミックな資源を利用し、抽象的な言説（概念）やその体系（理論）を築き、それをもって実践に貢献することは、アクション・リサーチの始まりから求められてきたことでもあり、実践との関係を抜きにしても学界の常識であると言える。むしろ、実践との関係が注目される今だからこそ、改めて強調されるべき事柄だと、筆者は強く思う[*7]。

社会心理学では、集団と個人との関係から「こころ」を探求する中で、膨大な数の概念・理論が生み出されてきた。概念や理論は、様々な個別具体的な事象を抽象化した言説であるため、アカデミックな場面以外でそのまま使うことが難しい場合が多い。理論の「翻訳」が重要となる所以である。しかし、理論の内容によっては、それを直接実践の場に還元することができた例もある。例えば、前述した三隅の「P-M理論」は、組織のリーダーシップ機能をパフォーマンス（P）とメンテナンス（M）の2つの機能から整理をして論じたものであり、そのシンプルさから、企業のリーダーシップ研修などで大いに活用されてきた。

概念や理論は、そのまま実践のための〈インターフェイス〉となることは少ないだろう。

7――一方で、実践との関係において、理論が有する意義・価値自体もまた、大きく変化することとなる。例えば、Gergen & Zielke（2006）での議論を参照されたい。

しかし、理論の簡便さによっては、ほぼそのままのかたちで実践に活用されることもありうる。

2-2 『手法』の開発

学知の実践への応用に関して、社会心理学は様々な『手法』の開発を試みてきた。それは、具体的な実践方法であったり、あるいはトレーニング手法や体験型学習のパッケージであったりする。

例えば、緊急時における避難行動について、杉万ら（1983、1984）は「指差誘導法」（「あそこが非常口ですよ！」と指示する手法）と「吸着誘導法」（「私について来て下さい！」と誘導する手法）を検証し、後者の方がより短時間に多くの避難者を誘導することができることを示している。これは、避難誘導という群衆行動の制御メカニズムを解明することを通して、より有効な避難方法を開発するというアクション・リサーチの結果である。

また、防災まちづくり活動について、渥美（2001）は、子どもたちが町を歩き、防災マップを作ることを通して自分の街への愛着を持つようになり、結果的に防災意識が高められるという「わが街再発見ワークショップ」を企画した。「防災とは言わない防災」をキャッチフレーズとするこのワークショップは、従来の「地域防災」のような合目的的活動ではなく、一見無関係な活動を通して結果的に目標が達成されることを目指しており、その背景には、近代社会と現代社会における活動と目標の関係に関する理論的考察がある。

これらに加えて、具体的なイシューを対象としているわけではないが、「人間関係トレーニング」を目的とする様々なワークショップ手法の開発も行われている。例えば、南山大学人文学部心理人間学科では、人間関係トレーニングに関する様々な手法が研究され、多くの著作が刊行されている（例えば、津村・山口、2005）。社会心理学のなかでも初期に開発された様々な手法（例えば、集団決定法など）は、個別具体的な事象を離れて、方法のみが汎用化されていく例がしばしば見られる。

このように、社会心理学では、様々な知見を実践に移すための〈インターフェイス〉として、多様な「手法」の開発がなされてきた。

2-3 『道具』の開発

上述した『手法』の開発をさらに推し進め、学知を『道具』として〈インターフェイス〉化したものもある。厳密に言えば、「『手法』の開発」と「『道具』の開発」は重複する部分が多いが、ここでは、モノとして独立して扱えるものを「道具」と呼ぶことにしよう。

最近注目を集めているのは、防災教育のための「防災ゲーム」である。矢守・吉川・網代（2005）は、阪神・淡路大震災の被災地で綿密なインタヴューを重ね、その結果から見られた意思決定場面をカード化し、参加者に実際に意思決定を体験してもらう「カードゲーム（名称「クロスロード」）」を開発した。カードには、例えば下記のようなコンフリクトの例（矢守・吉川・網代、2005、p.104）が書かれており、参加者はイエスかノーかの決定を迫られる［Figure 1］。カードゲーム形式であるという手軽さもあいまって、「クロスロード」は、全国の自治体などから問い合わせが相次いでいる。

- あなたは、食料担当の職員
- 被災から数時間。避難所には3000人が避難しているとの確かな情報が得られた。現時点で確保できた食料は2000食。以降の見通しは、今のところなし。まず、2000食を配る？

YES（配る）／NO（配らない）

［Figure 1］ クロスロードにおける意思決定の例
（矢守・吉川・網代、2005、p.104より）

災害については、社会心理学に限らず、自然科学・社会科学の双方から膨大な知見の蓄積があるが、それを一般市民に適切に伝えることが常に課題になっている。「災害は忘れた頃にやってくる」の言葉通り、常時災害について考え続けるのは困難だからである。こうした課題に対して、矢守らは、リスク・コミュニケーションにおいて、このようなゲーミングの手法が有効であると考えている。また、災害場面は意思決定の連続であることから、あえて「正解」のない（しかし、被災地で実際に起きた）コンフリクト場面を実際に参加者に考えてもらうことが、効果的な防災教育につなげていけるとも考えている。加えて、カードゲームという、一般市民にもなじみのある形態としたことも、優れた〈イン

ターフェイス〉となった所以であろう。

以上のように、社会心理学では、学知と実践をつなぐ〈インターフェイス〉について、様々な研究・実践がなされている。本稿では紹介したものはそのごく一部に過ぎないが、それでも、学知をさまざまなかたちに変えて実践に還元することについて長い歴史と蓄積、様々な工夫を持っていることは、見て頂けたであろう。

3 グループ・ダイナミックスにおける〈インターフェイス〉の設え：筆者の研究より

ここでは、上述した社会心理学の全般的な動向を踏まえ、筆者自身のこれまでの研究について、〈臨床性〉と〈インターフェイス〉の観点から整理を行う。筆者は「人間科学としてのグループ・ダイナミックス」を専門とし、「実践」を志向した研究を志してはいる。しかし、「協同的実践」と呼ぶに相応しい、洗練された何かができているができているわけではない。だが、筆者自身の研究を題材とすることで、研究者が臨む〈臨床性〉の場、及び、そのための〈インターフェイス〉について、具体的なトピックを読者諸賢の議論に供することができるのではないかと考え、本稿で改めて整理することとした。

筆者はこれまで、動物やロボットを媒介とする様々な人々の集まり（集合体）の全体的性質（集合性）の変容過程について検討を行ってきた。研究手法としては、参与観察・インタヴューなどとともに、必要があれば質問紙の統計的分析やビデオデータに基づく行動分析など、定量的な研究手法も併用してきた。いずれにせよ、ディシプリンの理念上、また採用した手法の特徴上、研究を進める上で、常に当事者や実践家と対話をする必要があった。

以下では、筆者が取り組んできた3つの研究事例を題材として、グループ・ダイナミックス研究における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉について、筆者自身の経験・知見を整理する。本節は、厳密な学術論文というより、やや随想的な体裁になっていることをご了承頂きたい。また、個別の研究内容について深く立ち入る紙幅の余裕がないので、関心がおありの向きは節題で示している拙稿を参照されたい。

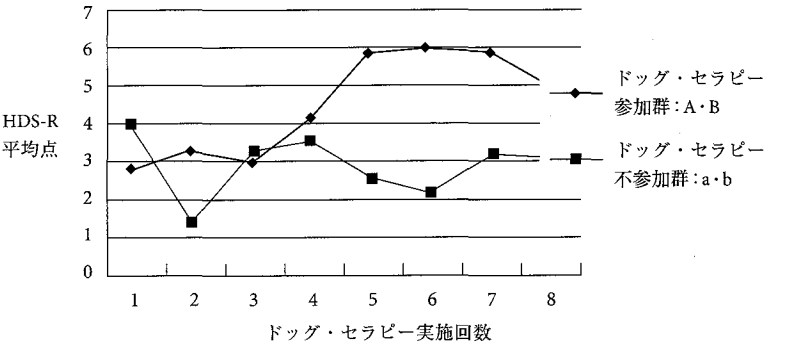
3-1 老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグ・セラピーの事例（加藤・渥美、2002）

本事例は、筆者が大学院に進学して初めて関わったものである。筆者は、1998年4月から1999年5月頃まで、多くの認知症患者が入院する病院での、犬を用いた動物介在療法（ドッグ・セラピー）の事例に関わり、調査を進めた。当時はただただ無我夢中だったが、振り返ってみるに、理論の面白さと難しさ、フィールドで生起する事象の解釈、「大学」と「現場」のギャップ、フィールドの凄みなど、研究に関わる多くを学んだのがこの事例であった。筆者は、この現場での参与観察を行うとともに、関係者へのインタヴューを実施した。また、後述するように、心理尺度の結果の統計的分析も行った。

〈臨床性〉の場：この事例で筆者が関わったのは、同病院で高齢者ケアに従事する介護職員・医師・看護師、ドッグ・セラピーを実施するボランティア団体（当時）のスタッフ、そして、同病院に入院してリハビリに励む高齢者（当事者）であった。特に、ドッグ・セラピーの実践に携わる病院職員・ボランティアスタッフと、ドッグ・セラピーをめぐって様々な議論を交わした。この事例では、ドッグ・セラピーの実践、及び高齢者のケア実践は、筆者ではない実践家が担当していた。筆者は、ドッグ・セラピーの実践に対して調査を行うとともに、その結果を、随時、実践家に対して報告した。

〈インターフェイス〉の設え：筆者は、実践家との対話の中で、何とか自分の考え（理論的言説）を「翻訳」するよう努めた。しかし、初学者であった筆者にとって、何らかの学知に基づいて事象を分析することはもちろん、それを当事者の視点からわかりやすく説明すること自体が大変難しく、お世辞にもうまくいったわけではなかった。

そのような中、1つの「グラフ」が、インパクトをもって迎えられた。この事例では、実践家よりドッグ・セラピーの「効果検証」が要請されたため、対象者の認知症の程度を測定するため、高齢者施設で広く使われている心理尺度（改訂長谷川式簡易知能評価スケール：HDS-R）が用いられた。テストを実施したのは実践家であったが、筆者はその結果の統計的な処理を任された。筆者は、ドッグ・セラピー開始から3ヶ月が過ぎた頃、中間報告として、このテストに対するドッグ・セラピー参加者・非参加者の各回の平均点（対象者間2水準）×ドッグ・セラピーの実施回数（対象者内8水準）の分散分析を行った。その結果、ドッグ・セラピーに参加した群の方がHDS-Rの得点の変化に伸びがあることが確認された（$F(7,105)=5.273, p<.01$）。この結果をグラフ化したのが、以下のFigure 2である［Figure 2］。



［Figure 2］　ドッグ・セラピーの事例における〈インターフェイス〉の一例
（加藤・渥美、2002より転載）

このグラフは、ドッグ・セラピー導入の結果、病院、特に対象者集合体に生じた変化の一部を、心理尺度の得点の変化として示したものである。このようなグラフの提示は、アカデミックな場でこそ通用する〈インターフェイス〉であるかのように見える。しかし、高齢者施設で一般的に使用されている心理尺度（意義について一定の共通理解が得られている尺度を用いること）の結果に、ある統計的分析を行い（学的な操作を加えること）、その結果をグラフ化する（一目見て分かるかたちに整理する）ことは、特に社会心理学的な知識を持っているわけでもない実践家にとっても、ドッグ・セラピーの「効果」を端的に表すものとして受け入れられた。むしろ、「これまで漠然と何かが変わったと感じていたが、これでハッキリした（だから、この調子でやっていけばいいのだ／ドッグ・セラピーにはやはり「効果」があるのだ）」と、ドッグ・セラピーに従事する実践家らを勇気付けることとなった[*8]。その結果、病棟職員・ボランティアスタッフら実践家が、ドッグ・セラピーで生じた「変化」を「効果」として認識するようになり、彼らがいっそう実践に励むようになる、という変化がもたらされることとなった。

筆者は他にも数多くのエピソードを記述し、定性的な結果として実践家らに報告した

8――実際には、このグラフからは、得点の低さ、及びテスト自体の精確さの問題により、「ドッグ・セラピーの結果、高齢者の認知症が軽快した」と結論づけることはできない。重要なのは、この分析結果が、ドッグ・セラピーの「効果」を正確に表しているかどうかではなく、このグラフを見た実践家らをして「ドッグ・セラピーには効果があるのだ！」と強く納得せしめたことである。

が、結局、上記のグラフほどのインパクトを与えることはなかった。これは、高齢者医療・福祉の現場という「evidence」が重視される現場において、定量的な結果こそが〈インターフェイス〉として機能したためと考えられる。本事例での〈インターフェイス〉(定量的分析結果のグラフ化)は、筆者のディシプリンにおいては広く使われるものであるが、この事例では、それこそが有効であったと言える。とは言え、この事例では、現場への還元の結果を踏まえて、自身の理論的観点の陶冶をもたらすまでには至らなかった。これは、ひとえに、当時の筆者の力量不足によるものである。

3-2 高齢者施設におけるロボット介在活動の事例(加藤・渥美・矢守、2004)

筆者は、2002年5月から2003年2月まで、有料老人ホームにおけるロボット介在活動(Robot Assisted Activity：RAA)の事例に関わった。本事例で筆者は、研究者であるとともに、ロボット介在活動の実践家としてこのフィールドに関わった(より正確に言えば、調査をさせてほしいので、ボランティアでRAAをやらせてもらえなか、と施設に頼み込んだ)。筆者は、ロボット介在活動の導入に伴い、施設の集合体にどのような変化が見られるかを検討するとともに、認知症患者を含む高齢者に対するレクリエーションの実践に従事した。調査にあたっては、活動の場全体を撮影できるようビデオカメラを設置し、RAA場面の音声・動画を記録し、参加者の様々な行動の生起率について定量的分析を行った。また、関係者にインタヴューを行うとともに、実践に並行して観察記録も付けた。

〈臨床性〉の場：この事例で、筆者は、この施設で高齢者ケアに従事するケアマネージャー、レクリエーションスタッフ、事務職員、及び、施設に入居し、RAAに参加してくださった高齢者(当事者)と関わりをもった。この事例では、筆者は、RAAで生じる変化を検討する研究者であるとともに、ボランティアとしてRAAの実践にも従事していたため、研究者・実践家として二重の〈臨床性〉の場に臨むこととなった。筆者は、RAA前後に施設職員とミーティングを行い、実践・研究について様々な意見交換を行うとともに、そうした議論の結果も踏まえ、入居する高齢者に対して、少しでも良いレクリエーションを提供しなければならなかった。筆者はそれまで、研究者として高齢者ケアの現場に参与したことはあったが、筆者自身が何らかのプログラムを実践することは初めてであったため、これまでとは全く違う戸惑いを感じることとなった。

〈インターフェイス〉の設え：このフィールドで筆者は、RAAについての学知の還元と、

より良いRAAの提供という二重の〈インターフェイス〉を設える必要があった。調査・実践の開始当初は、とにかくこの事例を考察するための理論的枠組みが何かを考え続け、その上、毎回のレクリエーションを進行させなければならなかったため、〈インターフェイス〉まで用意する余裕はほとんどなかった。

しかし、研究・実践を進め、実践家・当事者らとの対話を重ねる中で、RAAに特徴的な事柄が徐々に筆者にも見えてくるようになった。ロボット介在活動は、その名が表すとおり、実践に際して、直接的な〈インターフェイス〉となったのはペット型ロボット(SONYのAIBO)であった。しかし、実践を進める中で、また、RAAの進行をサポートして下さった施設職員らの言動から、ロボットの動きそのものよりも、参加者相互のインタラクション、特に会話こそが重要なのではないか、と考えるようになった。専門的な用語を使うなら、RAAに際して生じるロボットの挙動に対する解釈(心の読み取り)を参加者相互に聴き合い(解釈の共同的承認)、ペット型ロボット/RAAをめぐる物語を共同で作り上げていくことこそが、RAAにおいて重要なのではないか、と筆者は考え始めた(もちろん、このように理路整然とまとめられたのは、調査が一段落し、研究論文を執筆してからであったが)。

こうした知見自体は、高齢者ケアの実践においてそれほど目新しいものではない。古くから傾聴の重要性は繰り返し指摘されているし、最近では「ナラティヴ・ベイスド・メディシン」のように、物語論を医療現場に導入しようとする動きも出始めている。しかし、RAAの実践においてこのような観点を積極的に採用することで、筆者は、RAAで何が生じるのか、どのように実践すればよいのか、などの疑問に対して、ある程度の指針が見えてくるようになった。要するに、ロボットの動きばかりに気を取られず、(実践家でもある)筆者自身が参加者の会話の輪に参与し、ともに物語を作っていくことこそが重要であると考えられるようになった。そこで筆者は、こうした考えについて施設職員らに説明するとともに、できるだけ筆者自身が積極的に参加者の会話に参加するよう、実践の手法を変えていった。

［Figure 3］　ロボット介在活動の事例における〈インターフェイス〉の一例
（加藤・渥美・矢守、2004より転載）

参加者らとの会話を意識してRAAを進めることで、（当然ではあるが）RAAプログラムは参加者にとって多少は楽しいものになったように見受けられた。また、RAAに関する筆者の説明（会話に参加することこそが重要）については、実践家から強く賛同してもらうことができた。

本事例では、理論的な分析と実践とがほぼ同時並行で行われたため、現場で生じた変化が研究・実践の双方にもたらした影響について、簡潔に分けて整理することは難しい。また、先の事例のように、調査を通して得られた知見を定量的に分析したものを示したわけではなく、施設職員らとの会話や、筆者によるRAAの実践そのものを通して、研究の成果を伝えていくことがほとんどであった。本事例では、研究・実践を通して得られた学的な知見を、筆者自身の身体・行動を通して具体化していくことが、〈インターフェイス〉となっていたと言えるだろう。

ただ、筆者の「アクション」は、残念ながら、施設での従来のケアに大きな変化をもたらすほどのインパクトがあったものではなかったようである。筆者によるRAAが終了した後、何かが積極的に変わったなどの意見は、職員からは聞かれなかった。この点で、本研究でのRAAの実践は、この施設でのケアにおいて、「なくてはならないもの」とまではならなかったように思われる。これも、筆者の力量不足であろう。一方、研究面では、集合体の変容過程に物語論を接続させて論じることができ、集団を見るための視点を広げることができ、筆者にとっては収穫であった。

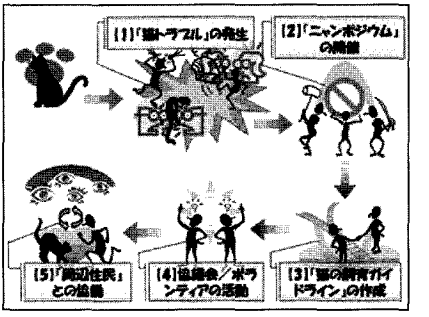
3-3 横浜市西区における『地域猫』活動の事例（加藤、2006b）

筆者は、2004年8月から現在に至るまで、横浜市における『地域猫』活動に対する調査を行っている。特に、西区の事例では、2005年5月より、同区の『地域猫』活動の推進組織の実践に関わるようになり、組織運営について参与観察を行っている。また、地域住民やボランティア、保健所職員などへのインタヴューを行うとともに、過去の住民会議の議事録に対する言説分析を行い、『地域猫』活動そのものの特徴を抽出することを試みている。

〈臨床性〉の場：この事例で筆者は、『地域猫』活動の推進組織のボランティアスタッフや保健所職員らと関わりを持っている。筆者は、大阪からやってきた一調査者として、推進組織の定例会議に出席して議事録を作成するとともに、PRイベントの手伝いなどを行っている。最近では、組織が活動資金を得るための助成金申請書類を作成するなど、少しずつ、組織の運営方針について意見を述べつつある。

〈インターフェイス〉の設え：本事例では、活動の中心人物である保健所職員が、『地域猫』活動の発案者として数々の講演や学会発表を行うとともに、自身で著書も執筆するなど、「考えて、話すことのできる」実践家であった。このため、筆者としては、実践家とは違う視点から、『地域猫』活動の全体像を描く必要があった。

そのような中で、筆者は、2005年度の若手研究集合報告書論文（加藤、2006b）を執筆する直前に、『地域猫』活動全体を一連のプロセスとしてまとめた1枚の図を作成し、インタヴューやミーティングの場で実践家に提示し、筆者の考えを伝えた。



［Figure 4］『地域猫』活動における〈インターフェイス〉
（加藤、2006bより転載）

［Figure 4］は、『地域猫』活動を、対立する2つのクレイム（ここでは、「猫擁護派」と「猫嫌悪派」のそれぞれの主張）を持つ地域住民が、それぞれのクレイムを多声的に組み込みつつ住民同士で『対話』を進める、5つのフェーズを持つプロセスとして描いたものである。この図（及びその背景となる理論的枠組み）自体は、まだアカデミックなレヴューを受けてはおらず、筆者の思いつきの域を出ていない。実際、研究者にこの図を示すと、「単純すぎる」「リニアモデルなら誰でも考え付く」など、批判的なコメントが多かった。理論的な洗練は、筆者の今後の大きな課題となっている。

一方で、『地域猫』活動に関わる人々（ボランティア、保健所職員など）には、「とても分かりやすい」「その通りですね」「（この図に描いてあるように）『地域猫』活動がプロセスであることが、（地域の人に）なかなか分かってもらえない」などの感想を得るなど、大変好評であった。また、この図を含む報告書論文も同様に好評であり、西区役所内で「回し読みされている」とのことであった。

現時点では、この図が、『地域猫』活動の実践に対して何らかの劇的な変化をもたらしたわけではない。しかし、筆者はそれ以降、この図をもとに、組織運営や活動の方向性について、自身の見解を述べるようになった。それによって、筆者の主張したいことが、実践家らにはよく伝わるようになったことを実感している。『地域猫』活動の筆者なりの見解を、あえてデフォルメして1枚の図にまとめてみることで、図、及び、報告書論文そのものが、筆者と実践家とをつなぐ〈インターフェイス〉として機能していると考えられる。

『地域猫』活動は、ノラ猫問題に関して、地域住民全体に働きかける活動である。このため、当然ではあるが、この図だけでは、研究面でも実践面でも、〈インターフェイス〉として不十分である。昨年度の知見をもとに、活動の各フェーズにおける様々な〈インターフェイス〉を考案する必要を感じている。

以上のように、筆者の研究では、様々な〈臨床性〉の場に臨むことがあり、その中で〈インターフェイス〉の設えが重要になった。改めて整理をしてみると、筆者の研究には、研究はもとより、実践への働きかけとしても、まだまだ課題が多く残されていることが分かる。筆者の研究／実践について、読者諸賢のご意見・ご批判・ご叱正を頂ければ幸いである。

とは言え、このように、一概に動物（あるいはペット型ロボット）を媒介として様々な集合体に変化が現れる事例といっても、フィールドごとに、また筆者の立場ごとに、直面

する〈臨床性〉の場も異なれば、有効な〈インターフェイス〉の設え方も大きく異なることは整理することができたと言える。また、未熟な研究事例ではあったが、研究者が実践家との関わりを持ち、〈臨床〉の場に臨む際には、その知見をディシプリンに根ざすかたちで加工し直接的に伝えること、実践を通して伝えること、日常言語に近いかたちで整理することなど、様々なかたちの〈インターフェイス〉の設えが重要になることも、見て取れたのではないだろうか。

4 今後の展望：『現場を立ち去らない』ために

本稿では、〈臨床性〉とその〈インターフェイス〉に関して、社会心理学を題材として、現状と課題を整理した。第1節では、「アクション・リサーチ」の特徴と現状についてまとめ、社会心理学が臨む様々な〈臨床性〉について整理した。第2節では、学知の実践への応用のかたちとして、「概念」「手法」「道具」の3点を整理し、学知の実践への応用に向けた〈インターフェイス〉の特徴をまとめた。第3節では、筆者自身の研究における経験を整理し、〈臨床性〉〈インターフェイス〉の具体的な事例について提供を試みた。

アクション・リサーチのような、実践への介入を志向する研究方法論を進めることは、自ずと、従来の（科学的）研究方法自体を問い直すことにつながる。その結果、「良い研究とは何か？」「研究者が『現場』に介入することの意味は何か？」「研究者が『現場』で果たすべき役割は何か？」と言った、これまで自明であった、あるいは問われもしなかったような事柄が、議論の俎上にあげられることとなっている。こうした問題に対して、筆者はすぐに厳密な回答を用意できるわけではない。ここでは、「研究者として『現場』に関わること」について、改めて筆者自身の考えを述べたい。

筆者が協同的実践を志向していることが知られると、しばしば、「社会問題の解決に関心があるから『現場』に入るのか？」との質問を受けることがある。つまり、研究と実践のどちらの関心から『現場』に関わっているのか、という問いかけである。この背後には、「当事者でもないのになぜ『問題』に介入するのか？」との質問者の思いが見え隠れしているように、筆者には思われる。

ここで、「当事者」ということばから、『現場』とのかかわりを考えてみよう。中西・上野（2003）は、「問題を抱えた人」がすなわち「当事者」というわけではない、と述べてい

る。その上で、「ひとは自己定義によって、当事者になれる。というよりも、問題を自分で引き受けたとき、人は当事者になる」(中西・上野、2003、p.196) と主張している。

筆者自身は、高齢者でもなければ、動物愛護運動家でもない。また、ケアワーカーでもなければ、自分の地域で猫トラブルに頭を悩ませているわけでもない。この意味で筆者は、「問題を抱えた人」ではない。加えて、『現場』に入った当初は、社会問題の解決というよりはむしろ、理論的な関心を持って研究上の「面白さ」を探している、と言う方が正直なところである。

しかし、研究者として『現場』に関わる中で、否応なく、彼らの「問題」に気づくこととなる。そして、この気づきを通して筆者は、『現場』において、研究者でありながら「当事者になる」ことを志向するようになる。ここが、ディシプリンのお題目を越えて、筆者が『現場』への介入を強く意識し始める端緒である。

一方で筆者は、「問題」の解決策を模索するあまり、研究者であることを完全にやめて社会運動家になる、という選択肢を、現時点では採ることを考えていない。やはり筆者は、理論的な問題に、関心の軸足があるからである。

ここにおいて、「当事者になった」筆者が、研究者の立場から何ができるのかが問われることとなる。研究者として『現場』に臨むとき、「〈インターフェイス〉の設え」が大きな課題となるのは、理論的な関心を持ちつつ「当事者になる」ことを志向する筆者が、どのように『現場』に関わることができるのかが問題として顕在化するからである。筆者は、『現場』において、研究者として当事者らと言説をつむぎ続けるために、様々な〈インターフェイス〉の設えを行うこととなる。こうした筆者のスタンスは、『現場を立ち去らない』研究者のあり方、とまとめることができよう。

そして、協同的実践が、『現場』での言説の交流の中から生まれることを鑑みると、その意義は、単に「問題の解決」のみに収斂されるわけではない。このことは、「アクション・リサーチにおける『良い研究』とは何か？」という問題[*9]と関連している。研究者と当事者との言説の交流は、単に知識や意見の交換というだけではない。それは、研究者(の属する集合体の集合性)と当事者(の属する集合体の集合性)が交わりあうプロセスで

9——この問題についても様々な議論がある。例えば、保坂(2004)は、「現場に変化をもたらすことを通して、新たな知識の創造をもたらすことができたとき、『よい研究』であったと言えるだろう」(保坂、2004、p.181)と述べている。

ある。そこでは、従前の集合性にある暗黙かつ自明の前提が問い直され、（当事者も、そして研究者も）それまで「問題」とも考えていなかったような事柄に焦点が当てられ、知が更新されることとなる。こうした言説の交流過程は、「問題の解決」を目指す言説の源泉の1つとなるが、問題解決のみを目指す議論とは全く異なる言説をも生み出すこととなる。むしろ、後者の言説が、『現場』により豊かな実践をもたらす可能性を秘めているとも言える。それゆえ、「問題の解決策」は、言説の交流の結果の1つに過ぎず、「問題」をめぐって言説を交し合い、実践の選択肢を豊かにするそのプロセスこそが、重要であると言えるだろう[*10]。

今さら断るまでもないが、筆者は、実用的でない学問に意味はない、とか、全ての人文学は〈インターフェイス〉の開発に精力を注ぐべきだ、などと主張する気は毛頭ない。研究者は学知の探求と蓄積こそが本懐であり、アカデミックな成果を上げることが第一に求められる（それゆえ、中途半端に実践に口出しをすることは、研究においても実践においても有害であるとさえ言える）。

しかし、人文学を取り巻く現在の状況において、学知と社会との接点を問題化する〈臨床性〉も、またそのための〈インターフェイス〉も、遠からず、無視して通ることのできない課題として直面することになると予想される。その時のために、各人が説得力のある「答え」を用意しておくことは、本プログラムの参加者全員の、言わば「責務」なのではないかと思っている。

最後に、本稿を通して、最終的に筆者が追求したい『問い』を以下に挙げる。

『現場を立ち去らない』ために、いかなる〈インターフェイス〉が可能か？

この『問い』には、ただ1つの正解があるわけではないだろう。おそらく、『現場の数だけ〈インターフェイス〉のかたちがある』というのが、議論の出発点になるはずである。

10——ゴールよりもプロセスを重視し、場を立ち去らないことの意義については、若手研究員とプロジェクトリーダーらとの座談会（2006年6月29日開催）においても議論された。このことは、人文学そのものの価値に関する議論と深い関連がある。詳細は、三谷・金水・メディアラボ（2006）を参照されたい。

だからこそ、『現場』に臨む研究者は、そこから立ち去らず、〈インターフェイス〉を模索し続けることが求められると言えるだろう。

［かとうけんすけ・大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員］

［引用文献］

渥美公秀，2001，『ボランティアの知——実践としてのボランティア研究』大阪大学出版会.

Cartwright, D. & Zander, A., Eds., 1960 "Group dynamics: Research and theory". Tavistock Publications.（＝三隅二不二・佐々木薫　訳編，1974，「第1章　グループ・ダイナミックスの起源」『グループ・ダイナミックスⅠ（第二版）』誠心書房. 3-39.）

Engestrom, Y., 1987, "Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research." Helsinki: Orienta-Konsultit.（＝山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏　訳，1999，『拡張による学習——活動理論からのアプローチ』新曜社.）

Gergen, K. J. & Zielke, B., 2006, "Theory in action," Theory & psychology, 16(3): 299-309.

Greenwood, D.J. & Lewin, M., 2003, "Reconstructing the relationship between universities and society through action research," Denzin, N.K. & Lincoln, Y.S., eds, The landscape of qualitative research: Theories and issues. Sage. 131-167.

保坂裕子，2004，「アクション・リサーチ——変化から見えてくるもの」無藤　隆・やまだようこ・南博文・麻生　武・サトウタツヤ　編『質的心理学——創造的に活用するコツ』新曜社，175-181.

加藤謙介・渥美公秀，2002，「動物介在療法の導入による集合性の変容過程——老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグ・セラピーの事例」『実験社会心理学研究』41（2）：67-83.

加藤謙介・渥美公秀・矢守克也，2004，「ロボット介在活動における物語生成——有料老人ホームにおけるペット型ロボットを用いた活動の事例」『実験社会心理学研究』43（2）：155-173.

加藤謙介，2006a，「社会心理学の「歴史」と〈横断性〉——人文学のインターフェイスの『道具』として」〈若手研究集合〉報告書編集委員会　編『2005年度〈若手研究集合〉報告書』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」139-155.

加藤謙介，2006b，「『対話』をめぐるグループ・ダイナミックス——地域における人と動物の関係の事例より」〈若手研究集合〉報告書編集委員会　編『2005年度〈若手研究集合〉報告書』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」267-296.

Kelly, A., 1999, "Action research: What is it and what can I do?," Bryman, A. & Burgess, R.G., eds, Qualitative research volume IV. Sage. 201-219.

小林幸一郎，1984，「アクション・リサーチ　ノート（1）」『東洋大学社会学部紀要』22（1）：5-22.

Lewin, K., 1951, "Field theory in social science: Selected theoretical papers." New York: Harper.（＝猪股佐登留訳，1979，『社会科学における場の理論』誠信書房.）

三隅二不二，1966，『新しいリーダーシップ——集団指導の行動科学』ダイヤモンド社.

三隅二不二，1975，「災害事故予防を目標とした組織開発のアクション・リサーチ」『組織科学』9 (1)：21-29.

三谷研爾・金水　敏・メディアラボ　編，2006，「特集　座談会　知のプロセスは共有されるか」『ニューズレター「インターフェイスの人文学」Interface Humanities 07』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究開発委員会，2-20.

中島義明・子安増生・繁桝算男・箱田裕司・安藤清志・坂野雄二・立花政夫　編，1999，『心理学辞典』有斐閣.

中西正司・上野千鶴子，2003，『当事者主権』岩波新書.

Schwandt, T.A., 2001, "Action research," Schwandt, T. A., eds, Dictionary of qualitative inquiry 2nd ed. Sage. 3-4.

杉万俊夫・三隅二不二・佐古秀一，1983，「緊急避難状況における避難誘導方法に関するアクション・リサーチ（Ⅰ）——指差誘導法と吸着誘導法」『実験社会心理学研究』22 (2)：95-98.

杉万俊夫・三隅二不二・佐古秀一，1984，「緊急避難状況における避難誘導方法に関するアクション・リサーチ（Ⅱ）——誘導者と避難者の人数比が指差誘導法と吸着誘導法に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』23 (2)：107-115.

杉万俊夫　編著，2006，『コミュニティのグループ・ダイナミックス』京都大学学術出版会.

Sugiman, T., 2006, "Theory in the context of collaborative inquiry," Theory & Psychology, 16(3): 311-325.

津村俊充・山口真人　編，2005，『人間関係トレーニング——私を育てる教育への人間学的アプローチ』ナカニシヤ出版.

鷲田清一，2003，「≪インターフェイスの人文学≫というプロジェクト」大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」編『2002・2003年度報告書　1.岐路に立つ人文科学』7-13.

Whyte, W.F., Greenwood, D.J., & Lazes, P., 2001, "Participatory action research: Through practice to science in social research," Denzin, N.K. & Lincoln, Y.S. eds. The American tradition in qualitative research. Sage. 369-384.

やまだようこ，2004，「質的研究の核心とは ——質的研究は人間観やものの見方と切り離せない」無藤　隆・やまだようこ・南　博文・麻生　武・サトウタツヤ　編『質的心理学——創造的に活用するコツ』新曜社，8-13.

山住勝広，2004，『活動理論と教育実践の創造——拡張的学習へ』関西大学出版会.

矢守克也・吉川肇子・網代　剛，2005，『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション——クロスロードへの招待』ナカニシヤ出版.

矢守克也，2006，「アクション・リサーチの新展開」『日本グループ・ダイナミックス学会第53回大会発表論文集』.

吉森　護，2001，『アナトミア社会心理学——社会心理学のこれまでとこれから』北大路書房.

活動中の民主主義のために
文化人類学からの問いかけ

加藤敦典

《要旨》
近年の文化人類学による民主主義の研究は、民主主義をめぐる〈問い〉を現地の実践に寄り添って〈解決〉しようとする傾向がある。民主主義という〈問い〉が、あるべき〈解決〉を模索する規範論に回収されてしまうことは、民主主義というアイデアがもつ、物議をかもすような、それゆえ創造性を誘発するような可能性／危険性をとらえ損ねることにつながる。民主主義のなぞめいたところを〈問い〉として保持し続けることが必要であるとすれば、そのためのひとつの方向性として、民主主義のリアリティを活動中・流動中の状態において〈記述〉するという課題を提起することができる。〈活動中の民主主義〉をとらえるためには、さまざまな人文学的な知の技巧が必要とされる。本論では、そのことを示したうえで、人文学に向けたさらなる〈問い〉として、民主主義を支えるリアリティを〈記述〉することと、民主主義をめぐるリアリティに介入し〈解決〉をめざすことのあいだの架橋をめぐって問題を提起したい。
《キーワード》民主主義、文化人類学、活動、人文学、解決志向と記述志向

1. 人文学的な知の技巧が民主主義の現代的課題を解きほぐす

1–1. 民主主義の人類学における〈解決〉志向

近年、私が専攻する文化人類学において、〈民主主義〉は現地社会の政治を描くための定義のはっきりした分析概念ではなくなってきている。とりわけ1990年代以降、〈民主主義〉は、それがいったい何であるのかを現地社会やグローバルな統治言説の脈絡で考察す

べき、ひとつの〈問い〉として議論されることが多くなった。人類学者は〈問い〉としての民主主義をめぐって、「西洋」型民主主義のユニバーサルな適用可能性への批判や、グローバルに展開する自己統治の言説と結びつく参加民主主義の統治術に対する批判を展開してきた（加藤 2006）。

それらの議論には、民主主義をめぐる〈問い〉を現地の実践に寄り添って〈解決〉しようとする傾向がみられる。人類学者のなかには、地域住民が自律的な知の主体となることや、配慮ある統治を実現すること、住民同士の相互配慮にもとづく社会関係を実現することなどに「真の」民主主義の可能性を見いだそうとする議論もみられる。しかし、民主主義の現場に寄り添って実践的な課題の〈解決〉を模索する姿勢は、民主主義をめぐる〈問い〉を規範探しへと回収してしまうこととも表裏一体である。民主主義という〈問い〉が規範論によって硬直化してしまうとき、あるべき民主主義を模索する議論は、民主主義というアイデアが持っているはずの、謎めいた、物議をかもしだすような、それゆえに、いまある・あるべき社会関係についての思いがけない変化を引き出しうるような可能性／危険性を萎縮させてしまうように思われる。

1-2.〈記述〉志向へのシフト：〈活動中の民主主義〉と人文学的な知の技巧

そこで、この論文では、あるべき民主主義にむけた〈解決〉を求める作業を一時中断し、民主主義のリアリティを解きほぐすための〈記述〉志向の議論について考えてみたい。

本論では、民主主義を〈記述〉するための議論の方向性を、民主主義のリアリティを活動中の状態においてとらえるという課題としてまとめてみることにする。〈活動中の民主主義〉をめぐる議論としては次のような研究の方向性が考えられる。第一には、前回の報告書論文（加藤 2006）にも書いたことだが、さまざまな地域で多様に翻案される民主主義の理念を現地社会における理解にもとづいて書きつけ、それらの翻案の流通のなかで民主主義について考察すること、第二に、民主主義の実践的な場における民主主義についての解釈の幾重もの反転を、矛盾や混乱として切り捨てたり、システムの均衡のための葛藤として体系的に固定化したりすることなく、不断の交渉の場におけるリアリティとしてとらえること、第三に、民主主義の実践を支えるさまざまな「事実」をつくりあげている相互行為の位相を切り取ること、である。本論では、第三の論点、すなわち、行為のなかの民主主義に関する議論についてとくに詳しく紹介してみたい。

民主主義のリアリティを活動中の状態においてとらえるには、さまざまな人文学的な知の技巧（アート）が必要とされるはずである。たとえば、民主主義の多様な翻案を書きつけ、再解釈をほどこし流通させるためには、すぐれた翻訳者の技巧が必要であり、解釈の絶え間ない反転をテキストに書き留めるには解釈学者の技巧が必要であり、民主主義の政治空間をつくりあげる相互行為の場をとらえるためには、演劇批評の技巧が必要であろう。本論では、民主主義の現代的課題を活動中の姿のなかで〈問い〉として解きほぐすための、人文学的な知の技巧をともなった人類学による〈記述〉志向の研究の必要性という観点から議論をすすめていきたい。

本論では、以下の作業をおこなう。まず、民主主義の課題の〈解決〉を模索する従来の人類学的な研究における規範論的傾向を批判的に検討する。次に、民主主義を活動中の状態でとらえるための方向性として、相互行為のなかで民主主義を支えるリアリティがつくられるという観点についての人類学の議論をいくつか紹介する。最後に、〈活動中の民主主義〉の課題を人文学的知の技巧と結びつけてまとめ、民主主義をめぐって人類学が人文学とともに発しうるさらなる〈問い〉の可能性を指摘したい。

2. 民主主義の人類学が提起してきた〈問い〉と〈解決〉

まず、はじめに、前回の報告書に掲載した拙論（加藤 2006）をもとに、人類学が近年の民主主義をめぐる課題をどのように問い、解決の道筋を提示してきたのかを概観したい。

2-1. 民主主義のユニバーサルな適用可能性への〈問い〉

1990年代、民主主義の理念が冷戦構造の解体によって流動化するなか、人類学者たちは、民主主義的であることがそれぞれの社会において何を意味しているのかに注目することで、民主主義の複数の可能性について論じるようになっていった。この時期の民主主義の人類学を特徴づけていたのは、「西洋」型民主主義のユニバーサルな適用可能性への批判的な態度であった。それらの議論の焦点は、周辺世界における民主主義の土着化や、土着の民主主義の問題（Commaroff and Commaroff 1997; Karlstorom 1996）、宗教的、民族的対立が顕在化した社会における統御された民主主義の実践（Horowitz, D. L. 1994; Owusu

1997）などに向けられていた。この時期の民主主義の人類学は、周辺世界が生みだした民主主義の多様な翻案を民族誌のなかに描き出すことにより、「西洋」型民主主義のオルタナティヴを模索するための試みであったといえる。

2-2. 民主主義のグローバルな統治性への〈問い〉

1990年代の後半になると、自己責任を重視する新自由主義的な統治言説が世界のいたるところに浸透する。それと結びついて展開する民主主義の実践は、その統治術としてのあり方を厳しく吟味されるようになった。自己責任・自己統治の言説と民主主義の言説が交わるところでは、市民同士の対話や、相互配慮に基礎をおく自主管理的なコミュニティづくりのプロジェクトなどが提起され、一定の有意義な成果をあげてきた。しかし、いっぽうでは、住民の意思やニーズについての知を独占的に把握しようとする専門知や、「参加」の言説のもとで自己規律的な主体をつくりあげる倫理性が、社会学や人類学によって厳しく批判されている（Paley 2001）。また、国家を越える人や資本の流れの増大とともに、国民国家の枠組みのなかで国民＝市民が民主主義制度を支えるという構図が成立しにくくなるなか、国民国家を分断する社会的乖離現象のもとで、自由主義や分離主義と結びついた民主主義的実践が暴力を誘発する事態についても報告されている（Holston and Appadurai 1996）。

2-3. 民主主義の統治性を〈解決〉する

民主主義の統治性が問題視される状況にあって、人類学者たちは、民主主義と交渉する現地社会の人々の実践的な努力や日常的な解釈に寄り添いながら、民主主義の普遍性や統治性を飼い慣らし、民主主義を生きるために価値のある実践にするための〈解決〉の糸口を探ってきた。以下、いくつかの例を見ていきたい。

2-3-1. 知識社会学的な解法：知ることの民主主義

人類学者のジュリア・パレイは『マーケティング・デモクラシー』（Paley 2001）のなかで、知識社会学的な観点から、あるべき民主主義にむけた〈解決〉を模索する議論を展開している。

パレイはチリで地域保健活動をおこなう住民組織を調査し、組織のメンバーたちが彼らの考える「真の」政治参加の実現を模索する様子を報告する。パレイは住民組織のメンバーたちが、専門家の知的作法を自分たちのものにすることによって、政治状況を自分たちで分析する知識人として振る舞おうとする姿を描き出す。さらに、パレイは住民組織のメンバーたちの要望に応えて、民族誌的手法による住民調査のやりかたをレクチャーし、住民組織のメンバーたちが作成した調査報告をパレイ自身の著書のなかに挿入している。パレイはこの試みを、専門的な知の技法としての民族誌と、著書としての民族誌を現地社会に開放する、民族誌の「民主化」の試みであると位置づけている。

パレイは、民衆が知られる客体としての地位から知る主体としての地位へ移行し、依存主義的なイデオロギーから解放されることにより、真の意味での統治への参加が実現するという方向に統治性を飼い慣らす可能性をみいだす。しかし、前回の報告書（加藤 2006）でも指摘したように、現地社会では、実際には、自らを知る主体として立ち上げることだけが現状への〈解決〉とはなっていない。ある人たちにとっては、現状に対する諦念や逃避こそが、あるべき〈解決〉であるかもしれないのである。にもかかわらず、パレイの議論は、現地社会における多様な〈解決〉のなかから、ひとつの方向性だけを民主主義のあるべき〈解決〉として特権的に評価しており、その点で民主主義の規範さがしに陥っているのではないかと思われるのである。

2-3-2. 配慮ある統治を求めて：応答責任の民主主義

いっぽう、パレイは、別の論考（Paley 2004）のなかで、チリ社会における「民主」的であることについての実践的理解に基づき、討議民主主義のオルタナティヴとして応答責任（accountability）の民主主義という概念を提起している。

パレイは応答責任の民主主義をふたつのやりかたで定式化していく。

第一に、応答責任の民主主義は、チリにおける世論と政策決定との関係性に対する批評的な概念として定式化される。パレイによれば、チリでは、政治的なエリートたちが政策決定過程における討議や合意といったことばを持ち出すのは、往々にして世論を政策決定過程から排除するためであると考えられている。したがって、民衆は、政策決定過程における民主的な討議や合意形成を要求するかわりに、政治家には民衆の要求を満足させる責任があり、その要求を満たすことが民主的な政治なのだと主張するのだという。

第二に、応答責任の民主主義は、民主的ということばの日常的な用法から定式化され

る。パレイが調査した住民組織のリーダーたちは、民主的ということばの日常的な用法として、「自分の考えを考え（表現し）、それを聞いてもらう権利、耳を傾けてもらうこと、勘定にいれてもらうこと」と説明する場合がある。たとえば、主人が妻の言うことに耳を傾けなければ、彼女の家には民主主義がない、などと言われる。また、家に住む権利、十分な食事、勉強する権利などが与えられることも民主主義であると考えられている。さらに、協同の食事（common pot cooking collective）において誰もが同じものを平等に分配されることや、バザーで全員が同額の購買券を配布してもらうことも民主主義であると考えられている。

つまり、ここでいうふたつの意味での応答責任の民主主義とは、適切な配慮のもとで、自分が勘定に入れてもらうことであり、そのかぎりにおいては、統治における意志決定のプロセスは専門家や権力者に任せてもかまわないということになる。

ここで興味深いのは、パレイが、ひとつの住民組織を調査対象にしながら、いっぽうでは、知る主体として自立して、統治に関与しようとする動きに民主主義の希望を見いだし、他方では、統治のプロセスは専門家にまかせて、適切な人格的配慮を求めようとする一面を見いだしていることである。この矛盾は、現地社会における民主主義への理解の混乱というより、民主主義的であることの多義性を示す解釈の揺れのなかにあらわれた共在するふたつのモデルとして、まさに、解釈の絶え間ない反転の事例として丁寧に書きとめておくべき現象ではないかと思われる。

2-3-3. よく生きることへの配慮：モラル社会の民主主義

第三に、尊厳ある生をめぐる現地社会のモラルに民主主義の統治性を〈解決〉するための道筋を見いだす議論を紹介したい。

人類学者の田辺明生（2006）によれば、1990年代になって地域社会の自己統治の政治空間が拡大したインドにおいて、よりよく生きるための土着のモラルと民主主義的実践が接合する状況が生まれているという。田辺によれば、現代社会における民主主義の課題とは、人びとの生命、すなわち「単に生きること」が政治の中心的な課題を占めるようになった「生政治」のなかで、生命過程と日常生活を価値のあるものにすること、すなわち「よく生きること」を実現するための「生モラルの政治空間」はいかにして可能かを問うことであるとする（田辺 2006:95）。インドの地域政治では、よく生きるための政治空間を求めて「関係性の政治」と呼びうるものが出現しているという。関係性の政治とは、自己を

構成する相互行為のなかに身をおきながら、固有存在としての自己のケイパビリティと尊厳を確保するため、その関係性のありかた自体を変えていこうとする営為のことである。人々は、この関係性の場において、あるべき関係性とはどのようなものかについて交渉をおこなうことになる。つまり、関係性の政治の領域とは、あるべき相互関係の「モラル自体が社会的相互交渉において自己言及的な課題となり（再）構築される場」(田辺 2006:104) なのである。

田辺が調査地とするインドのオリッサ州では、政治経済的な関係性のモラルと、生命に関するモラルとが伝統的に不可分に結びついてきた。18世紀のオリッサでは、国家と地域社会に寄与する職に奉仕的に従事することと、地域社会の生産物からの取り分を受け取ることによって成り立つ権利の体系が社会関係の基礎となっていた。つまり、生命を生かすための原理として、供犠的な奉仕の原理と存在論的な平等性の原理が共存していたのである。

田辺によれば、近年のオリッサにおける「関係性の政治」は、尊厳ある生存を保証するための土着のモラルとしての供犠原理や平等原理と、それに基づく社会的連帯の（再）構築が、自己統治の民主主義の実践と接合する「ヴァナキュラー・デモクラシー」(田辺 2006:109) として理解できるという。

田辺の議論は現代社会の民主主義の問題にローカルな視点からアプローチするときに非常に参考になる。田辺は土着のモラルと民主主義的実践の接合を注意深く描くが、それを「西洋」型民主主義に対するローカルな多様性としては提示しない。〈帝国〉的な生命統治が世界のあらゆる場所に浸透するなかで、生のモラルを確保するという課題に立ち向かうオリッサにおける民主主義のひとつのローカルな翻案が、グローバルな民主主義の課題に連結していることを田辺は指摘する（田辺 2006:109)。周辺世界の観察者としての人類学者にとって、民主主義の課題が、「西洋」型民主主義の普遍的な適用可能性を批判するという問いから、グローバルに浸透する新自由主義的な民主主義言説に対して世界各地での民主主義の多様な翻案が生みだす可能性を把握し、流通させ、連結させるという問いに変わりつつあることを田辺の議論は示しているのではないだろうか。

もっとも、田辺の議論にもやや不満な点が残る。田辺は、オリッサにおける土着のモラルと民主主義の接合の過程で生まれたあるべき社会関係についての議論を、「来るべき民主主義」を招来するためのひとつのモデルとして提示している。「来るべき民主主義」とは、田辺の理解によれば、「国家および共同体による一切の共通性の押しつけを排除し、

他者性と決定不可能性に自己を開きつつ共に在ること、その共在性における他者との交流のなかで自らの固有な生の価値を琢磨し実践すること、そうした可能性の終わりなき追求」(田辺 2006:95) であるという。しかし、たとえ「来るべき民主主義」の追求が現場における課題の〈解決〉に寄り添った議論であったとしても、そこでひとつのあるべき社会関係のかたちを提示することは、民主主義をめぐる問いを規範論的な議論に回収してしまう危険性と紙一重であるといえる。むしろ、規範論に傾斜しないための予防線として、田辺自身が指摘しているような関係性のモラルが自己言及的に交渉される場を具体的に記述する議論があってもよかったのではないだろうかと思われる。

3. 行為のなかの民主主義：〈問い〉を問い続けるために

ここまでは、民主主義の統治性をめぐる問いと、それを〈解決〉するための人類学の模索を追ってきた。そのなかには、民主主義の翻案をめぐる田辺の議論など、〈活動中の民主主義〉を論じるうえで十分に評価すべき論点もあった。しかし、いっぽうで、現場での課題の〈解決〉に寄り添うことが、規範論的な傾向を招きかねない状況についても指摘した。

以下では、〈活動中の民主主義〉に関わる論点のうちでも、とくに、民主主義を支えるリアリティをつくりだす相互行為のなかから民主主義を記述する方向性について紹介していきたい。

3-1. 実験室のメタファー

民主主義は、すでに「事実」として潜在している住民の意思や「声」を公共の討議の場で表象し、意志決定に反映させる制度としてとらえられがちである。しかし、民主主義をささえる「事実」は、実際には、世論調査、統計、投票行為といった、さまざまな装置と人間の相互行為のプロセスのなかで社会的に構築されるものである。たとえば、人類学者のコールズ (Coles 2004) は、ラトゥールの科学論を援用し、分裂後の旧ユーゴスラビアで国連の監視のもとに実施された選挙の投票所におけるさまざま装置と人間の相互行為を観察し、投票所が住民の意思という「事実」をつくりだす「実験室」として分析可能であることを論じている。このようなかたちで民主主義的な実践を支える「事実」がつくられる現場

における具体的な相互行為を観察する民族誌的研究がさらに必要であるといえるだろう。

3-2. 演劇空間のメタファー

相互行為が生みだすリアリティに注目して民主主義について論じる場合、実験室のメタファーとともに多くの示唆を与えてくれるのが演劇空間のメタファーである。

政治と演劇の関係については、従来の人類学の議論のなかでも、たとえば、バランディエ（1982）が1970年代の反＝構造主義の脈絡で政治的葛藤のプロセスをドラマとして分析する議論[*1]を展開したり、ギアツ（1990）が王権のカリスマと正当性の多様なありかたのひとつとして劇場国家という概念を提示したりするなど、すでにさまざまに議論されてきたトピックである。

ここでは、上述のような反＝構造主義や国家論の観点とは異なる視点として、民主主義を支える政治的な討議空間が、それ自体は民主主義的ではない、さまざまな象徴や慣習的行為による演劇空間の創出にも似た実践によって実在性を与えられるものであるという観点からいくつかの議論を紹介していきたい。

3-2-1. 演劇空間としての討議空間：エチオピア・オチョロ社会の寄合制度

フランスの人類学者マルク・アベレス（2003）は、エチオピア南部のオチョロ社会における伝統的な寄合制度についての1970年代の調査をもとに、人びとの話し合いが政治的な討議空間となるためにどのような場所と儀礼が必要であったかについて報告している。

オチョロ社会において、寄合制度は象徴的な活動と結びつくことによってのみ真に政治的な討議空間となることができた。寄合の場である広場は石塀に囲まれ、入口は竹の柱廊になっていた。広場に入ると、そこには石でできた座席や、真実を語ることを誓いながら口づけをする石が配置されている。湖に面した広場からの眺望は、湖に棲む大蛇や精神世界へのつながりを想わせるものだという。寄合の日の朝には、新鮮な草を身にまとったふたりの「重鎮」が広場全体を巡回し、人々に向けて祈祷と祝福の言葉を述べ、寄合での話

1――バランディエは、レヴィストロースの構造主義への批判として議論を展開しているが、実際的な議論の脈絡をみれば、政治を静態的な体系や制度としてとらえるイギリス社会人類学への批判として位置づけられるべき議論である。

し合いが順調に進むよう、繁栄の象徴となる草を投げる。

オチョロ社会では、寄合における討議は儀礼的な所作によって日常的な集いとは識別されていた。もし、男たちが広場にただ集まって集団に関わる問題を延々と話し合っていたとしても、それは寄合とは見なされない。そのような行為は、たしかに寄合のための広場を連想させる単語で呼ばれるが、その言葉は、広場においておこなわれるあらゆる行為、すなわち喫煙、くつろぎ、会話、機織りなどを意味する概念でしかない。

政治的な討議とは人々が自分たちの利益や関心に基づいて話し合いをするところならどこにでも成立しうるというのは、きわめて抽象的な想定でしかない。ある相互行為を政治的な討議空間とするためには、演劇空間の創出にも似た、象徴的な場所と儀礼的な行為が必要なのである。

3-2-2. 声の象徴性

政治的な討議空間において発せられる言語の形式はとりわけ演劇的な要素をもっている。たとえば、上述のオチョロ社会の場合、寄合における弁説には特殊なコードがあるという。

> 議論は会議の魅力と退屈を同時に生み出す物語風の布地の中に織り込まれている。[……] 語りには時間がかかる。すなわち、語り手は演劇の名俳優のように観衆を目覚めた状態に維持している。いらだちを引き起こす危険を冒してでも、語り手は話の脱線を控えることはしない。少し後に言葉を続けてもかまわないので、観衆を飽きさせないようにできなければならないのである。(アベレス 2003:213)

人類学者の川田順造 (1998) によれば、アフリカの無文字社会の政治的な場には、声のヒエラルキーが存在するという。王の声は小さく、低く、その声は、復唱役の人間によって、大声で、ときに言葉を補いながら、メリハリをつけて再生される。いっぽう、観衆からは現地語で「キリスゴ」と呼ばれる甲高い女性の叫び声があがる。あるときは、臣下の男女がすすり泣くように震えながら、節となって揺れる声で王とその祖先を讃える。臣下が王に言上するときには、しかるべき位階の者に庇護されながら、ひれ伏して御前に出て、消え入るような声で言上する。その声が王に直接差し向けられることはなく、必ず庇護者が取り次いで王に伝える。権力者の声、弱者が訴える声、神や死者に呼びかける声な

ど、声にはヒエラルキーが存在する。「文化のなかで、声は多少なりとも制度化されている」(川田 1998:15)。

人類学者のブロックは、マダガスカル島のメリナ社会の事例に基づいて、政治的討議のスタイルとしゃべり方の慣習的マナーの関連について論じている (Bloch 1975)。メリナ社会では、子供にしゃべり方をしつけるとき、しゃべる内容よりも、しゃべり方のマナーにしつけが集中する。とくに、受身形や関係詞の使い方、話すときの身振りやからだの位置などが熱心にしつけられるという。このようなしゃべり方のマナーは、メリナ社会における評議会での形式化された弁説術に通じるものがある。評議会において必要とされる形式化された儀礼的な言語行為を操るためには、独特の言語的なコード規制やしゃべり方を習得する必要があり、その習得の難しさから、規範的な発話行為には権力作用がもたらされるのだとブロックはいう。

また、民主主義的な討議のスタイルの基盤には、民主主義の規範と関係のない慣習的倫理が横たわっている場合もある。ブロックは、別の論考 (Bloch 1971) のなかで、メリナ社会において、男に許された話し合いでの振る舞いは形式重視で意見対立をさける討議の形式と結びつき、いっぽう、女性は自由な意見発表を許されており、女性だけの会合では民主主義的な討議の実践がおこなわれることを報告している。

発話における礼儀正しさや、発話における身振りや、形式化された言語行為の社会的統制作用が非対称な対話構造を形作ることに注目して政治的な討議空間における「声」の権力作用に注意をうながすブロックの議論は、政治的言語についての民族誌的なデータを規律訓練と慣習的行為のもつ権力作用の観点から分析する議論の先鞭となるものであったといえる。しかし、同時に、ブロックの議論は、権力作用という抽象的な議論に回収される以前に観察されるべき、討議空間をつくりだす相互行為の位相を重視する必要性にも気づかせてくれる。ブロック自身も指摘するように、権力作用も行為として表演されなければ観察することはできないはずである。

3-2-3. 声の闖入について

声の問題に関連して興味深いのは、形式化された礼儀正しい言語空間としての討議の場から排除されていた「声」がどのようにして割ってはいるのかという問題である。

哲学者のランシエールは、規範的な討議空間に闖入する言葉がうみだすディセンサスや不和こそが民主主義の政治を形作るのだと論じている。ランシエールにとって、政治と

は、それまで言葉を話す存在として数え入れられなかった者たちが、言葉を話す存在であることを明らかにしながら現れてくる言語実践のただなかで生じる、分裂やディセンサスや不和のことであるという。言葉を持たず、それゆえに存在しない者として処遇される民衆たちは、「実は言葉を話す存在であること［……］を明らかにするような象徴的場面を、違反によって作り出さなければならない」（ランシエール 2004:32）。したがって、政治的な討議とは、「他者が語る内容を理解するかどうかではなく、他者の口から発せられる声を理解するべき言葉として了解するか」という問題として開始されることになる（ランシエール 2004:32）。このランシエールのラディカルな民主主義についての定義をそのまま認める必要はないとしても、規範的な討議空間に闖入する声の（無）作法についての民族誌的な研究を通して、不和としての民主主義の「謎めいた顰蹙ものの性格」（ランシエール 2004:35）をあらためて浮き彫りにすることは、民主主義のありかたの幅を理解するうえできわめて有益であると思われる。

4. 民主主義について、人文学とともに文化人類学から問いかけること

4-1. 活動中の民主主義のために

民主主義を活動中の状態で〈記述〉するという課題がどのようなものであり、どのような人文学的知の技巧と結びついた課題であるかをあらためてまとめておきたい。

第一に、グローバルに流動する民主主義の多様な翻案のなかで、民主主義的なるもののさまざまな可能性を探るという議論の方向性である。人類学者は、さまざまな民主主義の翻案を現地社会における了解のしかたにそって解釈し、さらに、その流通可能性のなかで民主主義について考察することに挑戦してきた。人類学者の真島一郎がいうように、世界の至るところで、さまざまなアクターが翻訳者としてふるまうなかにあって（真島 2005）、人類学者がすぐれた翻訳者として民主主義を読み、書き、送る作業は民主主義を〈問い〉として問い続けるためには必要であり続けるだろう。

第二に、民主主義の実践的な場における民主主義についての解釈の幾重もの反転を、矛盾や混乱として切り捨てたりシステムの均衡のための葛藤として体系的に固定化したりすることなく、不断の交渉の場におけるリアリティとしてとらえるという課題である。真島

は、自己統治や参加と結びつく民主主義の言説において重要視される「社会的なるもの」について論じるとき、社会的なるものが、国家との協同関係のなかで抑止的規律をおこなう場合と、国家から不連続なものとして、国家に対する対抗的な自由を提供する場合とのあいだで往復運動を繰り返すことに留意すべきだと指摘する（真島 2006:35）。この社会的なるものの「二価性」を克服するという実践的な課題は、「無限に近い解釈上の反転を民族誌の現場にも呼び込まずにはいない」(真島 2006:36)。社会的なるものの現場を記述する民族誌は、この「二価性の反転を幾重にも再検討しうる発見的な場」(真島 2006:36) となることが期待される。そして、そのためには、民族誌の現場における幾重もの解釈の反転を、システムの均衡を前提とした動揺や紆余曲折としてではなく、反転しつづける地と図のようなものとしてテキストに書き込む解釈学者の技巧が必要とされるだろう。

第三に、民主主義の実践を支えるさまざまな「事実」をつくりあげている相互行為のなかで民主主義を支えるリアリティを切り取ることである。ラトゥールの科学論にならった実験室のメタファーや、あるいは演劇空間のメタファーが援用され、「声」についての研究がなされている。ここでは、演劇批評の技法にならい、民主主義の実践を支える基盤にある、民主主義とは関わりのない象徴性や儀礼、慣習的行為をみきわめ、民主主義をつくりだす（無）作法をとらえる観察力と批評力が必要となるはずである。

4–2. さらなる〈問い〉の可能性：〈解決〉と〈記述〉の架橋

本論では、討議の場としての民主主義のデザインに「アート」と「アクション」の側面があるとするなら、人文学はそれにどのようなアプローチをとることができるのかを問うてきた。そして、ひとつの答えとして、翻訳、解釈、演劇批評などの技巧に基づく〈記述〉の重要性を指摘した。

最後に、次のような〈問い〉を人文学に向けた開かれた問いかけとして提示することで、今回の議論を終えたい。

本論で紹介したように、民主主義をめぐる「リアリティ」を人文学的な技巧によって〈記述〉する態度を保持することは、民衆主義の実際のありようを理解するうえで重要な意義をもっている。しかし、他方で、困難な現場の「リアリティ」を〈解決〉するために、介入的なことばとして民主主義の概念を鍛えることも必要であるといえる。このとき、どのようなかたちで、このふたつの志向に架橋することが可能だろうか。それは、〈解決〉志向

と〈記述〉志向の架橋のかたちについて考えることであり、人文学と社会科学の架橋のかたちを考えることでもある。この〈問い〉は、民主主義の研究をめぐる〈問い〉としてだけではなく、おそらく人文学が現場の「リアリティ」に対面するときに、さまざまなかたちで出会うことになる〈問い〉のひとつのかたちであるといえるだろう。

［かとうあつふみ・日本学術振興会特別研究員（21世紀COE）］

［参考文献］

◇アベレス、マルク 2003「オチョロ（Ochollo）――アフリカのプロト民主主義」ピエール・スイリ、西川正雄、近江吉明（監修）『歴史におけるデモクラシーと集会』専修大学出版局、193-222頁。

◇加藤敦典 2006「民主主義の民族誌と民族誌の民主化――人文学における臨床的アプローチのために――」、〈若手研究集合〉報告書編集委員会（編）『2005年度〈若手研究集合〉報告書』、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」、57-77頁。

◇川田順造 1998『聲』筑摩書房。

◇ギアツ、クリフォード 1990『ヌガラ――19世紀バリの劇場国家』小泉潤二（訳）、みすず書房。

◇田辺明生 2006「デモクラシーと生モラル政治――中間集団の現代的可能性に関する一考察」『文化人類学』71/1、94-118頁。

◇バランディエ、ジョルジュ 1982『舞台の上の権力――政治のドラマトゥルギー』渡辺公三（訳）、平凡社。

◇真島一郎 2005「翻訳論――喩の権利づけをめぐって」真島一郎（編）『だれが世界を翻訳するのか――アジア・アフリカの未来から』人文書院、9-57頁。

◇真島一郎 2006「序：中間集団の問題系」『文化人類学』71/1、22-49頁。

◇ランシエール、ジャック 2004「デモクラシー、ディセンサス、コミュニケーション」松葉祥一・山尾智美（訳）、『現代思想』4月号、青土社、28-41頁。

◇Bloch, Maurice 1971 "Decision-making in Councils among the Merina of Madagascar," in Richards, A. & A. Kuper (eds.) *Councils in Action.* Cambridge Papers Social Anthropology No. 6, pp. 29-62.

◇Bloch, Maurice 1975 "Introduction," in M. Bloch (ed.) *Political Language and Oratory in Traditional Society.* London; New York; San Francisco: Academic Press, pp. 1-28.

◇Coles, Kimberley A. 2004 "Election Day: The Construction of Democracy through Technique." *Cultural Anthropology* 19(4): 551-580.

◇Commaroff John L. and Jean Commaroff 1997 "Postcolonial Politics and Discourses of Democracy in Southern Africa: An anthropological reflection on African political modernities." *Journal of Anthropological Research*

53(2): 123-146.

◇Holston, James and Arjun Appadurai 1996 "Cities and Citizenship." *Public Culture* 8:187-204.

◇Horowitz, D. L. 1994 "Democracy in Divided Societies." In *Nationalism, Ethnic Conflict, and Democracy.* L. Diamond & M. F. Platter (eds.), The Johns Hopkins University Press.

◇Karlstorom, Mikael 1996 "Imagining Democracy: Political Culture and Democratization in Buganda." *Africa* 66(4): 485-505.

◇Owusu, Maxwell 1997 "Domestificating Democracy: Culture, Civil Society, and Costitutionalism in Africa." *Comparative Studies in Society and History* 39(1): 120-152.

◇Paley, Julia 2001 *Marketing Democracy: Power and Social Movements in Post-Dictatorship Chile.* Berkeley and Los Angeles; London: University of California Press.

◇Paley, Julia 2004 "Accountable Democracy: Citizen's Impact on Public Decision Making in Postdictatorship Chile." *American Ethnologist* 31(4): 497-513.

The Dilemma between "The Odd Man Out" and "The Useful Insider"
Finding One's Place under the Sun

Stella Zhivkova

Abstract:
In this paper my immediate purpose is to elucidate my choosing the position of participating observer at an event that was originally supposed to be a part of my fieldwork in Bulgaria (June 2006), as well as the resulting consequences from this choice. The problematic character of the situation arose from an issue that has long been underlying my work – the question if it is possible to plan and carry out a practically-oriented research that overcomes the bounds of academism and produces results that are useful and important for non-academics as well. My fieldwork at the Festival provided me with some valuable insights into the importance of the nifty method of participant observation which I managed to apply for releasing the tension of the insider-outsider dynamic. My participant observation gave me good reason to believe that the role of the researcher *can* and should be an active one. I also found out that conclusions made from analyzing the results from a fieldwork might be useful in organizing future events of similar character.

Keywords:
fieldwork, participant observation, intreaction, activism

In June 2006 a festival organized by one of the most outstanding Bulgarian folk-singers, Lyubimka Bisserova and her sisters Neda and Mitra, was held in the town of Sandanski.[*1] It was officially named "With the Songs of the Bisserov Sisters" and was ambitiously planned as an international occasion. The Festival was co-sponsored by the Municipality of Sandanski[*2] and the Bisserov Sisters. Participants from six countries came to Bulgaria at their own expense and volunteered giving performances three days in a row without receiving any performance fee. It was the good-will

1 ——— See the HP of Bisserov Sisters for biography and discography of the famous trio. http://www.bobinka.demon.co.uk/index.htm. Pictures from the Festival can be seen on this HP.

2 ——— See the HP of the Municipality for detailed information. http://www.guide-bulgaria.com/SW/Blagoevgrad/Sandanski Wikipedia also provides some useful hyperlinks : http://en.wikipedia.org/wiki/Sandanski

of the participants that made this festival possible.

As one of those who were involved in organizing the participation of the group from Osaka, I took part in the Festival too. This paper tells my story as a researcher and participant in the event mentioned above. It also gives an account of the difficulty of juggling the simultaneous feelings of distance and proximity experienced by me when I tried to solve the dilemma in what capacity exactly I was present there. Apart from that, I hope that the details about the forum will provide the reader with a heartfelt account of the most fundamental features of the cultures that met there, as well as with my reactions and observations.

1. Why my presence at the Festival fell short of my expectations

I got involved in the preparations for the Festival in September 2005. A friend of mine who plays the *koto* asked me to assist her in her correspondence with Lyubimka Bissero-va, which was started and carried on in English for some time but had gradually become a troublesome and time-consuming experience for both sides. For this reason, I was asked to mediate between the Bulgarian organizer and the Japanese performer as a translator. I was certain that there was not much to be said and discussed about a festival and willingly agreed to help, thinking that it could not take more than two or three letters to settle the matter. It turned out that I was wrong: soon I was not only translating but also interpreting the nuances expressed by both sides in their mother tongues; in this way, what had started as a mere translation gradually became a negotiator's job. I kept doing it despite all the complications and misunderstandings that occurred, and I finally ended up accompa-

nying a group of five Japanese musicians at the Festival.

By May 2006 when the group arrived in Sofia (the capital city of Bulgaria), I had considered my services a manager-like job; and having taken part in each important decision about the forthcoming workshops, concerts, meetings etc., I flattered myself that I was playing quite an important role in the Festival. This self-delusion lasted until the atrocious moment when at a certain occasion I was introduced as "the interpreting girl for the Japanese group." Being regarded as a mere "interpreter" was a knockout blow on my pride since I had thought of myself as a researcher with a mission, a researcher who was performing her valuable social duty mediating between cultures and simultaneously doing her fieldwork. Notwithstanding my self-opinion, at the venue everyone knew me as the obedient interpreter for the Japanese group and very few people got to know the real reason for my being at the Festival.[*3]

2. The choice to be an insider rather than an outsider: the participant observation method and its modifications

It certainly was far from desired to be considered and referred to as a mere technical staff member after all the planning, friction-preventing and orchestrating I had done for the smooth participation of the Japanese musicians in the Festival. However, after careful consideration of the advantages of being known as "the interpreting girl," I found out that what at first sounded so humiliating and underestimating my prior-to-the-festival efforts actually put me in a strategically favorable position for performing the tasks I had set myself, namely to make the most of observing human interactions and intercultural interface during the Festival and to employ the data gathered in my work as a musicologist. I realized that being part of the "staff" would greatly facilitate my idea of injecting myself into the cultural scenes and interfaces that I was planning to observe and which I describe and analyze here. Those were broadly-formulated goals for an observation, but according to

3 Ironically, the only money I ever earned at the Festival was in my capacity of an interpreter: it came from the National Television of Bulgaria; they employed me temporarily to assist them in their interviews for a documentary about the Festival.

one of the ABC-books on participant observation methodology, fieldwork often begins with a general problem and as it progresses further refinement and concretization of the problem (or even numerous problems) are added to the appropriate setting of the field.[*4]

> The main goal I had set myself was to monitor the Festival in terms of the interface between people that would occur there, and the event gave me plenty of chances to complete this goal. I have summarized and analyzed the main interface phenomena in a paper submitted to the final report of the COE "Interface Humanities" subdivision of "Modernism in Art in Central and Eastern Europe" (2006). To mention them briefly, the interfaces and (battle) fields of interaction I observed there were three: *personal-organizational* (between Lyubimka Bisserova and the City Hall); *local-global* (between the local people and the overseas guests); and *economic-cultural* (the collision of interests between the local dramatis personae).

The role ascribed to me at the Festival seemed a good one because it gave me plenty of chances to be in many places, to observe and participate in various situations. It also answered the need for flexibility in my behavior towards the heterogeneous environment of the Festival.[*5] Since there is no perfect approach that works in all situations, I believed that passing myself off as a mere interpreter rather than petrifying people around with the formal definition of my actual occupation would (as it actually did) provide me with more freedom to maneuver my way to answers which otherwise are reluctantly given to someone in a higher position. In other words, working as an "interpreter" made it possible for me to use an approach that involves taking a more active stance, an approach that allows the researcher to engage in activities with the participants instead of the traditional approach where the researcher assumes a more distant and impersonal stance both in the field and in the reports following the fieldwork.

---

4 Jorgensen (1989: 38).

5 The role of an interpreter gave me more freedom. It also proved true for me that the participating observer has no way of knowing what s/he will find in the field: the focus may change, and so did mine after I got involved, and accepted such involvement that provided me with an active stance which shifted the one I had planned to take, that is to remain on the sidelines, coolly and soberly assessing the interaction patterns.

Being active and completely immersed in the situation, and contributing to its development in one way or another is what I consider fulfilling for the researcher with a socially worthwhile mission.[*6]

2.1. Preliminary Assumptions and their Modification

My main goal, as set preliminary to my going to the venue, was to observe and compare the reactions of the local audiences to two festivals: "With the Songs of the Bisserov Sisters" and the local pride and joy – the Festival for pop-folk music "Pirin Folk." [*7] "Pop-Folk" is a broad term that characterizes a trend in contemporary Bulgarian music to combine traditional Bulgarian rhythms with melodic or rhythmic elements from the neighboring countries, predominantly Greek, Turkish and Serbian. The distinctive feature of this type of music is its typically Gypsy (*Roma)* beat. The "Pirin folk" festival specializes in promoting the Macedonian-rhythm-influenced songs which, at the risk of being musically indiscriminative, I count as pop-folk ones too. Visually, the distinctive feature of pop-folk music is in the sexy looks of the female performers and in the undoubtedly not traditionally Bulgarian direct eroticism in their stage behavior.[*8]

And so, my original intention was to observe the reaction of the local people accustomed to the nationally famous "Pirin Folk" festival and its specific sonority on the one hand, and to something much more "classic" as the *real* folk music of the groups invited to perform on the stage of the First International Folk Festival "With the Songs of the Bisserov Sisters" on the other. After monitoring the acceptance of the young rival to the local favorite I was planning to estimate the cultural growth and curiosity of the region and to come to conclusion about the friction-abundant or friction-free collision of festivals in the region of Sandanski. I had built a theory about the contemporary pro-music attitudes in Bulgaria which was based on a hypothesis about the interface between two fundamentally different musical events. My observations in the field were supposed to provide

6 For more on my previous treatment of the nature of valuable research, see: Zhivkova (2005).

7 Official site: http://www.pirinfolk.com/ (in Bulgarian).

8 I have paid more attention to pop-folk elsewhere: Zhivkova, Ito (2005) as well as Zhivkova (2005).

me with useful data which, after careful analysis, would give me grounds to confirm or reject my initial hypothesis. However, after reaching the field and spending the first several moments there, I realized that the deductive research I was intending to perform might prove futile and bland, and I found more absorbing and more true-to-life interfaces to observe and analyze. At that moment my initial plan changed and I decided to follow the inductive research method which did not offer me guarantees for stable and clear direction as did the deductive method, but which, in return for it, gave me the freedom to move and be alert and attentive of new, unexpected and unpredictable observations that would naturally lead me to the right style and way of writing about the Festival.

The new methodology I adopted also helped me become a more active participant, contributor and observer at the same time. I believe I can qualify my approach to researching the Festival as "newly activistic," bearing in mind the definition of "new activism" as "calling for social relationships that are intimate and close and requires researchers to demonstrate more authenticity, sensitivity, maturity and integrity than in previous moments of social science." [*9] Frankly speaking, I realized my new approach only later, after the Festival, but setting myself free from the hypothesis I had formulated prior to the event allowed me to not merely observe the Festival from the sidelines but to throw myself fully into the spirit of the occasions I have described here and in the paper for the Final Report of the MCE research group.[*10] It also gave me the main hint about how exactly I could fit the environment without forcing it to work for me and my desire to collect data, and actually to facilitate my working for the environment to make it a cozier place for the alleged "subjects" of my research.

2.2. A Methodologically Fortified Fieldwork

Up until recently, fieldwork observation was generally emphasized over participation in the literature on fieldwork. In contemporary fieldwork there is a clear trend toward more participation and less observation.[*11] I chose participant observation for my fieldwork method for several

9 ——— Lincoln (1995).

10 ——— Zhivkova (2007).

11 ——— De Laine(2000:2).

reasons: it seemed in concord with my main stance for active participation and persistent contribution to society; also, as I had the chance to see for myself, participant observation provides the researcher with a means of making observations unobtrusively;[*12] and, finally, it minimized my disrupting the natural flow of affairs and saved me the trouble of being an alien, a non-participating observer of the situation studied.

The most succinct, and actually the best definition of "participant observation" I have come upon so far reads: a direct involvement in the here and now of people's daily lives that provides both a point of reference for the logic and process of participant observational inquiry and a strategy for gaining access to phenomena that commonly are observed from the standpoint of a non-participant.[*13] Observing and participating at the same time allowed me to experience a spectrum of meanings and interactions as an insider in the situation. Participant observation as an interaction with people on a daily basis is in fact a way to participate in their activities without making them feel tense and restricted by the fact that they are being observed, and their actions documented and recorded.

The first several steps in establishing myself as an semi-overt participant[*14] were gaining entrée, establishing rapport, and building trust. They were not difficult at all since I had the advantage of being a native speaker of the language spoken by the greater part of the participants; I could communicate with those who participated as guests from abroad as well. My comprehension of the Bulgarian culture and customs, as well as of those of the Japanese group I was interpreting for, helped me in the initial oiling the wheels of socialization and integration between the musicians themselves, between the musicians and the organizers, and between the musicians and the local people.

---

12 ——— Ibid. p.16.

13 ——— Ibid. p.9.

14 ——— Participants can be overt, semi-overt or covert. As the names suggest, a researcher's participation is "overt" when his/her involvement in the capacity of researcher is made known to the insiders (members of the group under study). The "covert" participation means that only a few, if any of the subjects of research observation are informed of the true occupation of the researcher who has entered their group. Naturally, "semi-overt" is an involvement which does not require particular secrecy; the fact that the researcher who has become part of the group has some particular purpose and occupation is made known only to those interested in it.

It was not a great and impressive job to mediate and help people to get along better. Most often, I served as a buffer between the innumerous requirements of some of the Japanese musicians and the limited, or different from the expected capacities of the hosts. I feel obliged to admit that the organizers had done their best to satisfy the demands of the foreign guests but there were still some misunderstandings. To give but one example, the stage was not clean enough for the Japanese dancer to lie on while representing the dying crane. Viewed through the eyes of the Bulgarian hosts it was absolutely clean, and, indeed, it had been just cleaned for the guests. The expectations from Japanese side, however, were for a perfectly smooth stage, covered with impeccably white fabric… What I could do then in order to make the performance possible was to assure the dancer that the stage will be meticulously swept and wiped before her dance, and to make sure that it will really be cleaned by the staff who had no idea why I and the Japanese lady were both so fussy about the stage which they were sure was clean enough. Negotiating, explaining details which were hard to understand for people from different backgrounds were among the most exhaustive experiences I had at the Festival.

The tension between the roles of the participating researcher and the observing researcher soon became clear to me: in the first role, researchers are more rational as they build rapport with the participant; in the second role, researchers may become more exploitative as they observe and participate in order to gain data.[*15] Only after the Festival was over, I realized how much I had missed being immersed in solving problems or helping only one of the participating groups – the Japanese one. Fortunately, I had the chance to realize this and to make up for what I had missed to observe or pay attention to; this was possible because of the videos from the Festival taken by my father in the role of my assistant while I was occupied somewhere else. With respect to this, I realized that in case of my future involvement in such a great event as a festival, I would definitely need the help of an assistant who could be where I could not go and see things I could not see.

Here I will allow myself a short digression in order to illustrate with examples how I

15 ——— More on this in: Stacey (1988).

played the role of a conflict-preventer and negotiator. My work as a conflict-preventer might have passed unnoticed for both participants and organizers, but the proof that it was worth doing lies in the much smoother interaction that resulted from my efforts.

> One example will suffice. The dancer had inquired in advance about the medium on which to bring her music. She was reassured that it should be a cassette tape and had prepared accordingly. Most surprisingly, at the dress rehearsal she was told by the technical staff that they expected her to provide them with a CD, MD or any other digital audio media. This problem arose shortly before the Opening and an extremely prompt reaction was needed. I suggested a rather technically unsophisticated way to provide the sound for the dance performance, namely to play the tape on my walkman and hold a wireless microphone against it. The technical staff found the quality of the sound bad, but at that time it seemed to be the only feasible solution of the problem. That is how the sound was provided – with my invisible participation in the performance from the backstage, following the dancer's signs when to play and stop the tape.
>
> When I came up with my improvised idea about how to provide sound for the dance performance, I already knew that the unfortunate combination of lack of time and technical support made it meaningless to inform the organizers about the complication. To simply apologize to the dancer for the mistake made in the course of the pre-festival communication was pointless too[*16] because it would just have escalated her irritation as well as her disappointment with the oversight. In this situation I found a simple but effective solution knowing that as long as her performance went on trouble-free the dancer would not voice a complaint, and, as far as I know, the organizers never learned about the audio medium complication. At the end both sides were satisfied – the organizers had the dancer on stage as scheduled, while the dancer had the music for her performance; in this way no

16 Although it may seem that "from the very beginning of the interaction (of the participant) with the Festival staff there is a potential for confusion" (Bauman (1992:17)), I felt the need to smoothen the confusions in order to secure a friendly atmosphere and prevent conflicts that would not lead to any good.

one (apart from the technical staff and myself) knew that there was something wrong going behind the scene.

Another moment of friction-potential danger was the fact that some of the participants tended to construct their own mental image of the Festival based on their own experiences and interests. For example, having come from Japan, which is famous for its pecking order and strict rules, the relatively open-ended formulations of some festival clauses and the loosely fixed schedules were source of displeasure and complaints for the Japanese group. I often had to step in with explanations of cultural differences and, not infrequently, with sheer dodging or warding off blows, trying to establish atmosphere of peace and cooperation and to ensure the smooth interaction between both sides.

Sustaining my role as an insider within a network I tried to stay in contact with both the participants and the guests of the Festival, instead of immersing myself in relation only with the people who were closest to me. As Yamaguti points out, "Notwithstanding the topic, time, or place, fieldwork always involves becoming a part of a network of human relations," [*17] and sustaining those relations demanded a great effort on my part since I was put in various roles by both the participants and the organizers, roles which could be formulated as "negotiator" or "buffer." Maintaining a spirit of understanding and a will for continuous cooperation was what I saw as my ultimate goal, and I worked to find a positive approach to all the thorny situations that I was involved in. And actually, from the distance of the several months that have passed since the end of the Festival, I can say for sure that most of my insights about my own role there and about the Festival in general were happily generated around problems and points of friction and indeterminacy during the course of the event. To quote Yamaguti again: "It is not an exaggeration to say that the success of one's fieldwork is measured by how s/he evaluates the significance of her/his relationship with the subjects of research." [*18]

I think that my fieldwork turned out to be more of a work in the field because it overcame

---

17 ——— 山口 (2003 : 110).

18 ——— Ibid.

the limits of mere observation, documentation and data collection. My work at the Festival site included participation and productive cooperation with all the members of the huge festival network. I believe that by my acting as an active participant with a role that is not easy to define, I achieved what is desired by any ethnomusicologist – the "dialogic interactivity," as it is formulated by Yamaguti in his book "Applied Ethnomusicology" (2003).[*19]

However exhausting and seemingly unrewarding my simultaneously working as a researcher and as an interpreter, I did feel satisfied with the positive results from my presence at the Festival. Because it is my belief that strictly academically-intended work does nothing for those under study; but at the Festival my presence was found useful by the participating musicians, as well as by the organizers and the journalists who also thanked me for my excellent job as an "interpreter."

2.3. The last stage of fieldwork: Analyzing and Theorizing

Although my fieldwork did not progress the way I had expected, I consider it successful because at the Festival I gathered plenty of data and, what is more important – experience. I cannot claim that using this data I can produce an important new study, but I think that it is a good base for my future research, and the conclusions I draw from the data may well be helpful to others engaged in situations similar to mine. Contrary to my original expectations, I was not involved in the Festival in the role of a complete observer or of a participant-as-observer, I was rather an observer-as-participant.[*20] That gave me the chance to realize the importance of my actual engagement as well as the benefits I gained as an insider. My experience, together with my findings and documentation (filed notes, interviews, video-recorded data, etc.) will be employed in a paper documenting the facts and giving my interpretation of them. It is clear that participation by observation cannot be a substitute

19 ——— Ibid. the quote reads: "...a factor of utmost importance, that is, an establishment of a good interaction between the scholar and the subjects of his/her research (which) we can call 'dialogic interactivity.'"

20 ——— According to Jorgensen (1989:55), there are four participant roles that a scholar can play in his/her fieldwork: first, a complete observer; second, a participant-as-observer (more an observer than a participant); third, an observer-as-participant (more a participant than an observer); and fourth, a complete participant. The author concludes that "the more you participate, the less you are able to observe and vice versa."

for the study itself; also advancing a theory does not necessarily result in the most important outcome from a field research. My sudden insights triggered a reformulation of my initial aim and I decided to use my fieldwork data for more practical and applicable purposes rather than leaving them penned up in an academic paper.

At the Festival I (or at times – my father) was videotaping nearly every event. Now I can rewind and watch the videos over and over again, which gives me plenty of additional information about how exactly things happened, what kind of response they provoked and so on. For this reason, I have come to think that documenting by a camcorder is not just a mere video-recording; on the data-analyzing stage it proves extremely useful for re-considering and re-evaluating situations, interfaces and even mild conflicts. I see the video material not only as a fertile source of inspiration but also as a helpful material for the future, when I might get involved in organizing musical events not only as an "interpreter" but as a qualified, full-time organizer. Using my videos and my field notes I have made my own conclusions presented in a paper for MCE（モダニズムと中東欧の藝術・文化）.

Writing a paper is no doubt a purely academic activity. I, however, will try to present my work at the Festival not only as facts and features, but will rather stress on how the Festival reflected, stimulated and produced interfaces between people and interactions. In this I see my final and perhaps most practically oriented contribution to the Festival as a scholarly-engaged person. I consider it the most practical because it is oriented to the future editions of the Festival; it summarizes the experiences and opinions of the performers and organizers, and also includes my own views.[*21] I see this as a contribution which differs from the numerous reports in the mass media[*22] and think that an article would give a much more objective, complete and multifaceted account of the Festival. Concerning the style of writing, the use of technical jargon and terminology, consideration should be given to what the potential audience might be and how they may use the findings to support their

21 ——— If copyright allows, I will publish the present article (or at least will quote a reference to it) on the website of the organizers – the Bisserov sisters.

22 ——— See the appendix.

cause. A must in writing the article is to make it more accessible for those who are most affected by the issue under exploration (musicians, local people, municipality members, etc.).

3. A vindication of my effort to maintain the fine balance between getting involved and staying objective: I could be part of future festivals or other events and work for their benefit (my experience, analysis and conclusions might prove useful)

The Festival is over. As it is well known, festivals seldom have an objectively describable meaning for those who participate in them. I feel the need to conceptualize and reconsider what I observed there as a step to its next edition. As I mentioned above, I hope to provide a detailed account and a theoretical analysis which will not only help the organizers in their work towards organizing the next event, but will also provide them with the point of view of an insider who has distanced herself from the "here and now" of the Festival and has seen it in its more abstract appearance – not as a mere gathering but as a focal point of cultures, expectations, encounters and interactions.

In the outline of a field work given above I tried to interpret my research at the Festival as an "interaction." Being a participant-observer I saw, felt, and took part in the Festival. While gathering the field data I gained the insight that in reality research is an interaction. In the course of this interaction, the researcher realized herself as a useful element in a network of people who have a common aim. A researcher who actively participates in its fulfillment justifies her/his presence as being appropriate and productive.

Even now I am considered an active element of the Festival by the participants I interpreted for, namely the group of Japanese musicians including Doi Hiroko (*koto*), Takezawa Dango (*shamisen*), Yasuda Gindo (*shakuhachi*), Monguchi Hokushio (*shakuhachi*), Wakayagi Kichirei (dance). Even now, either in the correspondence we maintain, or in the informal atmosphere of the parties we occasionally have, they often use me as a sounding board to convey their impressions,

criticism and recommendations to Lyubimka Bisserova. The occasional chances to interview participants from other countries on the last day of the Festival made me realize that, for the most part, they had positive attitudes toward their experiences at the Festival. They often offered some constructive criticism but basically looked back on the Festival as a memorable and worthwhile experience. Now, after the Festival is over, I am still keeping in touch with both organizers and participants, planning further events and expanding the intercultural cooperation between my country of origin (Bulgaria) and the country I have become fairly familiar with (Japan). My current correspondence with Doi, for example, is centered around an issue that might prove to be the beginning of something interesting and meaningful. She is now negotiating with several *Bunraku* puppeteers and musicians about a prospective tour to Bulgaria. I am, as usual, "translating" to Lyubimka the messages from Doi, and getting back to the Japanese side with those tiny bits of *interpretation* that make the communication between the two possible.

My participant observation as an ethnomusicological fieldwork was in a sense a test and application of methodology, and, together with the pleasure of the aesthetic experience, it also gave me some increased self awareness. I felt that I was true to the slogan I coined in a previous work of mine – for overcoming of the self-oriented and navel-gazing academism, and for directing research outside the bounds of the academic world and getting back to society as producing the phenomena studied by the university-engaged scholars. The fact that even after the Festival I am still useful and my opinion is needed fills me with joy and satisfaction. It comes as a proof that my efforts to avoid the mistaken stance of the objective specialist who bends far too back to be the detached, omniscient observer, and so her/his account fails to convey the unique tone and feel of the event, is paying off. The trust I have won and the future implications of my efforts to bridge language and cultural distances inspire me further to accomplish another paper on the Festival, a paper giving an intelligible representation of the Festival audience, organizers, and participants, and satisfying the ethnomusicologists.

This article is my final contribution to the work of the *Wakate* Research group. It exemplifies my final stance on research methodology and the possibility of doing socially meaningful research. There is one noticeable difference between my previous papers and the present one which

can be used to trace back the development of my ideas: the former were focused on the academic output of research and how to make it more accessible; the latter is concerned with the active side in research methodology. The feature they have in common is that both are expression of my attempt to move my research activity into a more popular (in the positive sense) direction, leaving behind research done for its own sake and moving towards research that is not directly and exclusively related to the world of scholarship. The question that kept occupying me while working on both papers was: to whom is my research valuable? Soon after presenting the draft of the present paper before the *Wakate* Research group a second question aroused, that is, can a paper as personal as a life plan remain/be of any scholarly value? In my search for answers I reinforced my belief that active involvement and actual participation in the subject matter of one's own research are beneficial for the researcher as a mediator between academia and society.

To wind up, I would like to point out what I have learned from my participation in the "Interface Humanities" project: namely, that there exists certain importance of personal engagement and intimate attachment to the subject matter of study. This intuition turned my research into a personal goal-setting: in the future I intend to continue the semi-researcher, semi-organizer participation in various events. The life plan for my future activity includes all the milestones I want to pass in the course of realization of my research-through-participation plan for action.

［ステラ・ジヴコヴァ／大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文学〉特任研究員］

APPENDIX

List of the Media Response to the Festival

***Press conferences**

2006, 25 May, Sofia Press Agency.

***Newspapers**

Dimova, Maria, The Festival "With the Songs of the Bisserov Sisters", In: 2006, 7-13 June, Third Age (*Treta Vuzrast*).

Antonova, Natasha, First International Folklore Festival "With the Songs of the Bisserov Sisters", In: 2006, 29

May-4 June, Women's Newspaper (*Vestnik za Zhenata*).
Asizova, Boyka, The Festival of the Bisserov Sisters, In: 2006, 8 June, The Woman (*Zhenata*).
Asizova, Boyka, Keeping the Flame Burning, In: 2006, 12 June, The Soil (*Zemia*).

***Home Pages**

Bezovska, Albena, First International Folk Festival "With the Songs of the Bisserov Sisters", On: HP of Radio Bulgaria, 29 June. (Last found 2006, August 3).
Bezovska, Albena, "Lyubimka and her British Family", On: HP of Radio Bulgaria, 2006, 19 June. (Last found 2006, July 27).

***Radio stations**

Stoyanova, Emilia, Open Microphone with the Bisserov Sisters, Radio Signal Plus, 2006, 7 May.
Tsankova, Yulia, From You to You – interview with Lyubimka Bisserova , Radio Horizont, 2006, 21 May.
Stoichkov, Rumen, Night Horizon – featuring: Lyubimka Bisserova, Radio Horizon, 2006, 28 May.
Stoyanova, Emilia, Open Microphone – telephone interview with Lyubimka Bisserova, 2006, 28 May.
Marinova, Daniela, Directly for "Folk Carouselle", Radio Blagoevgrad, 2006, 2 June.

***Television**

Interview with the Organizers of First International Festival "With the Songs of the Bisserov Sisters", In: *Why Not?! Morning Talk Show of Martina Vachkova*, On: Bulgarian National Television Channel One, 2006, 19 June, 9.45-11.15.
At a Festival with the Bisserov Sisters, Director Lyubka Borissova, On: Bulgarian National Television Channel One, 2006, 20 August, 13.30.

LIST OF REFERENCES

Electronic Sources

Information and pictures from the Festival : http://www.bobinka.demon.co.uk/index.htm
Information on Sandanski City : http://www.guide-bulgaria.com/SW/Blagoevgrad/Sandanski
Wikipedia on Sandanski City : http://en.wikipedia.org/wiki/Sandanski
Official site of Pirin Folk Festival : http://www.pirinfolk.com/: (in Bulgarian).

Books and Articles

Bauman, Richard & Patricia Sawin et al. (1992), *Reflections on the folklife festival : an ethnography of participant experience*, Bloomington : Indiana Universtiy : Distributed by Indiana University Press.
De Laine, Marlew (2000), *Fieldwork, participation and practice : ethics and dilemmas in qualitative research*, Lon-

don : Sage Publications.

Jorgensen, Danny L. (1989), *Participant observation : a methodology for human studies*, Newbury Park, Calif. : Sage Publications.

Lincoln, Y. S. (1995), The Sixth Movement: Emerging Problems in Qualitative Research, In: *Interactionism*, 19:37-55.

Stacey, Judith (1988), Can There be a Feminist Ethnography In: *Women's Studies International Forum* 11(1), 21-27.

Zhivkova, Stella (2007), *The Zhiva Voda of Bulgarian Folk Songs — Interfaces in the Genesis of a Festival* —, In: 『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書』Vol.7：モダニズムと中東欧の藝術・文化.

Zhivkova, Stella (2005), *To Be or not To Be... Interesting – A Hamlet Soliloquy on the Choices of Patterns for Social Interaction: The Cases of a Musician and a Musicologist* –, In:『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」2005年度〈若手研究集合〉報告書』199-213.

ジブコバ・ステラ，伊東信宏「ブルガリアのチャルガ—アイデンティティ、変革グロバライゼイション—」In:『民族藝術』2005：21，177-185.

山口修（2003），『応用音楽学』，東京：放送大学教育振興会.

〈問いの共有〉

1. 〈共有される問い〉について
2. 〈問いの共有マップ〉とその解釈
3. 〈問いの共有〉、〈問いの継続〉
4. 〈プロジェクト〉としての〈問い〉

本章は、〈若手研究集合〉で行われた〈問いの共有〉セッション（2006年9月21日・10月5日開催）を中心に再構成し考察したものである（このセッションの意図や内容、意義に関しては、緒論を参照されたい）。

同セッションでは、個別論文の末尾に掲載されている〈問い〉についてそれぞれ討議された後、すべての〈問い〉を1枚の「マップ」[*1]内に収め、それぞれの配置と関係について議論がなされた。そこで、本章ではまず、各々の〈問い〉を列挙し、その内容について解説する（第1節）。次に、〈問いの共有マップ〉を呈示し、その解釈を行う（第2節）。そして、この試みの展望を示し（第3節）、最後に、本章で呈示された一連の〈問い〉に示されている動向を考えてみる（第4節）。

1. 〈共有される問い〉について

まず、検討された12の〈問い〉を列挙するとともに、個々の〈問い〉の内容について、

1 ——〈若手研究集合〉では、研究での議論を円滑に進めるためのツールの1つとして「討議支援マップ」を開発した。本章で紹介する〈問いの共有マップ〉は、一見するとそれとよく似ているが、予め〈問い〉が用意されており、その配置と関係づけが主要な目的となっている点で、「討議支援マップ」とは異なっている。「討議支援マップ」に関しては、第Ⅱ部第4章の森論文を参照。

〈問い〉の提示者、すなわち個別論文の著者からのコメントを踏まえ、簡単な説明・補足を行う。〈問い〉は、研究会で検討された順に呈示されている。なお、箇条書きにされた各々の〈問い〉の直後にある丸括弧内に、著者名、個別論文のタイトル及びを記した。

討議の場のデザインに「アート」と「アクション」の側面があるとするなら、人文学はそれにどのようなアプローチをとることができるのか？

（加藤敦典：「活動中の民主主義のために」）

- 人類学におけるデモクラシー研究は、いま規範論的な統治性研究が主で、問題解決型のアプローチに偏重しているが、そうではない方向として「アート」や「活動中（in action）」という言葉を使いながら論じていくことが加藤敦典の中心的な問題意識である。
- 「活動中（in action）」とは、あるべきヴィジョンを打ち出すのではなく、あるべきヴィジョンが崩れ、規範が混乱し解釈が転変する様を描くのであり、そのような意味で人文学的である。
- 〈若手研究集合〉の場は、民主主義を実践しようとしているのではないが、（議論を共有していこうとすることなど）民主主義と共通するものがあると考えられる。

『現場を立ち去らない』ために、いかなる〈インターフェイス〉が可能か？

（加藤謙介：「社会心理学における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉」）

- 『現場を立ち去らない』とは、プロジェクトリーダー鷲田清一氏による〈臨床性〉についての表現である。
- ここでの〈インターフェイス〉とは、専門外の人々や領域との界面の意味である。社会心理学では、学知と社会との接続という場面で、「概念」・「手法」・「道具」の〈インターフェイス〉が開発されてきた。
- この〈問い〉では、人文学を含む様々な立場の研究者が、様々な〈臨床〉の場に臨む際の〈インターフェイス〉について考え、討議を深めることの意義と重要性が表現されている。

グローバルな学問世界とリージョナルな学問世界との関係は、どうあるべきか？

（蓮田隆志：「隴を得てまた蜀までも得てみたら」）

- この〈問い〉は、「研究における〈作法〉の共有は可能なのか、望ましいことなのか？」と言い換えることもできる（〈作法〉は、加藤敦典の〈問い〉のなかの「アート」とつながっている）。
- この〈問い〉には、それぞれの地域での「論文の書き方」から「（望ましい）知識人像」の内容まで含まれている。
- 学問の世界でもグローバル・スタンダードが席捲しつつあるが、その過程で研究あるいは研究者は、何を得て何を失っていったのであろうか？

「真実らしさ」は日常的なコミュニケーションではどのように「利用」・「評価」できるのか？
「真実らしさ」を共通基盤としないコミュニケーションとは？

（藤本武司：「ラシーヌ：『古典主義』と『バロック』のあいだに」）

- 「真実らしさ(la vraisemblance)」とは、17世紀フランスの演劇界での評価の基準・規範となった理念であるが、このような文脈以外に、「真実らしさ」は、現在の日常的なコミュニケーションの基盤になっているであろう。
- 他方、現代の前衛演劇が示しているように、「真実らしさ」を敢えて追求しないコミュニケーションもある。
- だが、そもそも「真実らしさ」とは何であるのか。「真実らしさ」は我々に共有されているのであろうか。これらの点において「真実らしさ」の問題系は、コミュニケーションを問い直そうとしている〈若手研究集合〉の活動と交差している。

作品創作の着想源へと迫るためには、どのような知識を必要とし、共有するべきなのか？
（着想源へと迫るための）研究の道筋は、どのように学問・学科の領域を超えていくのか？

（樋上千寿：「シャガールの作品はなぜ『あんなこと』になったのか？」）

- 絵画の鑑賞者と研究者は画家や作品のバックグラウンドと知識をどこまで共有するべきなのか。
- 作品のテーマは、学問・学科の枠組みを超えていく。だから、必然的に研究者も枠組みを超えていくことになる。
- シャガールの芸術には、ユダヤ文化とキリスト教文化など宗教文化的な混淆性だけでなく、音楽文化や言語文化をも広く取り込んでいく越境性もあり、これらに即応した研究方法が新たに必要とされている。

ある制度／枠組みがリアリティを持つとはどういうことか？

（上田達：「人々をつくりあげるとはどういうことか」）

- マレーシア政府によってつくられたボランティア組織（「ルクン・トゥカンダ」）が、実施される際にどのように解釈されているのか、ということが上田のテーマである。
- 政府が創出する制度をどのように人々が利用するかについて、文化人類学では「抵抗論」の視点から語られることがあるが、この「抵抗論」とは距離をとって上田はアプローチしている。
- 上田の1つの問題意識は、加藤敦典の〈共同体〉や、藤本の「真実らしさ」、それから〈若手研究集合〉の活動それ自体と、「制度／枠組みのリアリティ」が何らかのかたちでつながるのではないか、ということにある。

現在の思想的批判の可能性はどこにあるのか？

（家高洋：「異質なものの関係を考える」）

- 現象学的な哲学の立場では、諸現象の記述に終始してしまう場合があり、そのとき、（記述を超えて、ある種の「見方・視点」に基づいた）批判的な思想的立場を得ることは難しい。
- 他方、現在の思想状況においてポジショナリティ論などが示しているように、批判的な思想的立場は破壊的な自己批判へと容易に転化してしまう。

- 過剰な自己反省を回避しつつ、批判的立場を構築するためには、どうすればよいのか。

純学問的な営みの追求と政治的な問題意識は接合不可能か？

（田沼幸子：「ユートピア小説と民族誌」）

- まずこの〈問い〉は、人類学における、政治への民族誌的介入としての「抵抗論」vs.学問的営みとして人類学的営為を擁護するための「反＝抵抗論」という対立と接合の可能性を指し示している。
- 他方、この〈問い〉の背後には、「権力」や「有用性」をめぐって人類学が陥った際限もない自己反省をいかに回避するかという問題意識があった（〈若手研究集合〉もこの自己反省に陥る可能性があった）。
- 政治的態度と非政治的態度、過剰な自己反省と無反省、これら二重の二律背反から脱する道は果たして拓けるのであろうか？

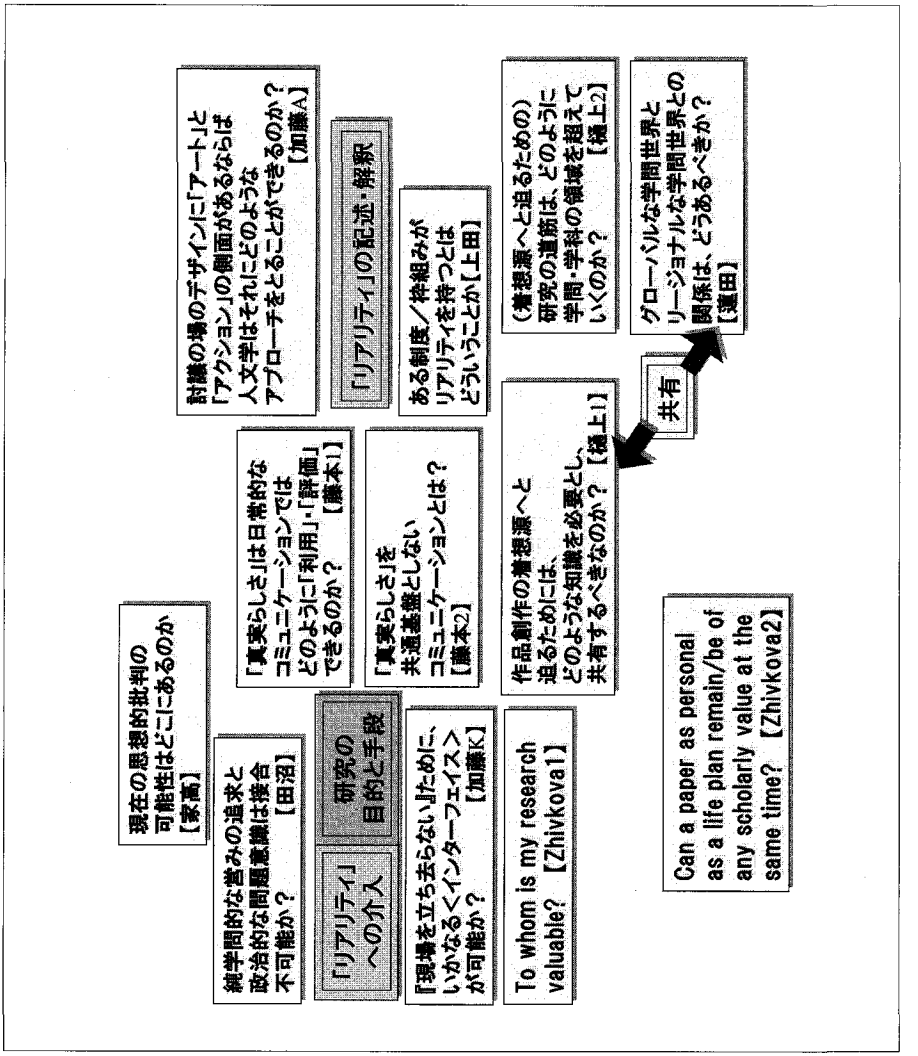
To whom is my research valuable?
Can a paper as personal as a life plan remain/be of any scholarly value at the same time?

(Stella Zhivkova: "The Dilemma between 'The Odd Man Out' or 'The Useful Insider'")

- Zhivkovaは、去年度から一貫して、（学界内だけでなく）学界外の人々に対する研究成果の理解を目的の1つとしていた。これが最初の〈問い〉の内容である。
- 加えて、2006年度のDD検討会では、Zhivkova自身の研究や実践についての計画に対しても、かなりの関心が集まった。
- それが、「ライフ・プラン」という個人的な事柄が学術的な価値を持ちうるのか、という第2の〈問い〉になって現れている。

〈問いの共有マップ〉

(2006年10月5日研究会にて作成／10月15日・11月9日に改訂)



※それぞれの〈問い〉は、単線の長方形のなかに示されている。

二重線の長方形のなかには、研究会で提案された「キーワード」が示されている。なお、矢印も研究会のセッションのなかで書き込まれたものである。

2. 〈問いの共有マップ〉とその解釈

本節では、〈問いの共有マップ〉を作成した際の議論に基づいた解説・解釈を行う。

2.1 リアリティ1 —— 人類学の立場から

この「マップ」でのキーワードとして1つの対になっているのは、【「リアリティ」の記述・解釈】と【「リアリティ」への介入】である。

この対の両極にあるのは、人類学者の3つの〈問い〉であり、人類学にとっての「リアリティ」(社会・民族・国家) に対する2つの態度を示している。

第1の態度は、この「リアリティ (社会)」に対して、記述し解釈することを研究の主軸とする態度である (加藤敦典と上田の〈問い〉)。第2の態度は、この「リアリティ (社会)」に何らかの仕方で「介入」する態度である (田沼の〈問い〉はこのことに関わっている。しかし、田沼自身は、直接的な行動や民族誌を書くなかで「介入」しようとしているのではない。人類学における「介入的立場」と「非介入的立場」との論争を叙述・分析した上で、この二者択一とは別の態度を示そうとしているのだ。田沼にとってはこの立場も「介入」なのである)。

2.2 リアリティ2 —— フランス文学と美術史学の立場から

このような人類学者たちの水平軸に対して、(文学史と美術史という) 作品に定位した学が垂直軸として関わり、2つの軸が交差していることが、2006年度の〈若手研究集合〉の大きな動向・特徴の1つである。

フランス文学者 (藤本) と美術史学者 (樋上) にとっての「リアリティ」は、「作品」の「リアリティ」である (藤本の場合は、作品を評価する基準の「リアリティ」も含まれている)。

このような作品の「リアリティ」についての〈研究〉と、社会や人々の「リアリティ」についての〈研究〉が交差しお互いに影響を与えたことは、この研究会ならでは出来事であろう (議論の詳細については、本報告書第II部第3章の加藤謙介論文、あるいはDVD版報告書を参照)。

2.3 〈問い〉の多様性と多層性

他方、このマップの周縁にある〈問い〉は、〈若手研究集合〉の多様化と多層化を表現していると言えよう。

哲学者（家高）の〈問い〉には、田沼の〈問い〉と通底したものがある。だが、〈フィールド〉に直接に関わる人類学者たちの〈問い〉とは異なる位相に関わっており、「記述・解釈」と「批判的介入」の二分法の思想的前提を明らかにしようとしている。

また、社会心理学者（加藤謙介）の〈問い〉は、（本COEプログラムのキーコンセプトの1つの）〈臨床性〉の意味と実践の仕方について広く問いかけている。なお、加藤謙介の〈問い〉は、〈臨床性〉がフィールド調査に関わっていることと、【研究の目的と手段】に対する問題意識が共通しているために、田沼の〈問い〉の近くに配置された。

音楽学者（Zhivkova）の〈問い〉の1つも〈臨床性〉と密接に関わっているので、加藤謙介の〈問い〉のそばに配置されている。それから、Zhivkovaの第2の〈問い〉は、「私」という「個人性」を〈問い〉に含んでいるところに、〈人文学〉ならではの特徴が現れている。

歴史学者（蓮田）の〈問い〉も、独自の仕方でこのマップを多層化・多元化している。というのは、蓮田以外の全員が前提としている学問のグローバル化自身を問うているからである。蓮田の〈問い〉と、樋上の第2の〈問い〉、Zhivkovaの第2の〈問い〉は、学問性について関わっており、あるまとまりを作っている（なお、【共有】というキーワードで蓮田の〈問い〉が指し示されているのは、グローバルな学問世界とリージョナルな学問世界のあいだの「共有」も問われているからである）。

人類学の水平軸と、文学・美術史と垂直軸がこのマップでは中心にあるが、それらを哲学・社会心理学・音楽学・歴史学のそれぞれの立場から多元化しながらも、分裂せずにまとまりを持ちつつ、2006年度のDD検討会の討議が進んでいる様をこのマップは表現していると言えるだろう。

ところで、緒論において我々は、〈人文学〉の一つの特徴として「学科横断性（transdisciplinarity）」を挙げた。これは、ある研究者が様々な学科を横断することや、あるテーマのために様々な研究者がお互いの学科を越えて協働することを意味しているが、それ以外に、我々は、〈人文学〉自身が、そのテーマ上、学科横断的な性格を持つことを指摘した。

このように考える場合、〈若手研究集合〉の〈問いの共有マップ〉の様々な〈問い〉の〈配置（configuration）〉も、〈人文学〉のある一つの表現であるとみなすことができるであろう。このマップは、言うまでもなく（ある問題に対する）〈解答・解決〉のようなものではない。むしろ、アーティストが様々な作品を作っていくように、このようなマップも作り出されて、次々に更新されていくのである。このような意味でこのマップは、2006年度のDD検討会の1つの成果というだけでなく、今後のセッションへの端緒であるとも言えよう。

3.〈問いの共有〉、〈問いの継続〉

2006年度の研究会では、前節で示した〈問い〉の〈配置〉を行った時点で終了した。しかし、この〈問いの共有マップ〉に関しては、まだこの先に展開が可能であると考えられる。ここでは、その方向性を4つ記してみる。

第1に、この〈問いの共有マップ〉自身に記されている〈問い〉の様々な関係性を問うことである。例えば、人類学者にとっての「リアリティ」と文学者・美術史学者にとっての「リアリティ」との差異性、あるいは、社会心理学者と音楽学者にとっての〈臨床性〉と、人類学者にとっての「リアリティ」との関係性が問われうるであろう。また、人類学者と哲学者における「反省性」の共通性と差異性も興味深いテーマである。

第2に、別の観点からこのマップを組み直してみるということが挙げられる。例えば2006年度の研究会の論点の一つは、「学問的な営みとはどのようなものであるのか」という「学問性」にあったとも考えられるが、この場合、マップもこの論点から〈配置〉することができるであろう。

3人の人類学者、ならびに社会心理学者と音楽学者の〈問い〉は、フィールドと学問的活動との関係に関わっている。哲学者の〈問い〉は、人文学の反省性を正面から扱ったも

のであり、また歴史学者の〈問い〉は、そのような西洋的学問観の自明性自身を問うものである。そして美術史学者の〈問い〉は、学科だけでなく、学問的な営み自身を踏み越えること（「演奏」というパフォーマンス）と学問的活動との関係に関わっていた。

このように「学問性」という観点から考えて新たな「マップ」を作ることが可能であるし、別の観点を採ることもできるであろう。

上記の2つの方向は、〈問い〉自身は変更されないことが前提とされていた。他方、これらの〈問い〉を解体して行く方向性も考えられる。ここから、第3・第4の方向性を挙げてみよう。

第3に、これらの〈問い〉の中から、さらに細かな「キーワード」を抽出し、それらの「キーワード」どうしをつなげて、新たな〈問い〉を生み出す、ということが考えられる。

この試みの意図は、以下の通りである。〈問いの共有マップ〉は、現時点ですでに相当の情報量が含まれている。また、個別論文の文脈に即しているため、〈問い〉自体の拡がり、という点ではいくぶんかの制約もある。それゆえに、現在示されている〈問い〉をあえて細分化することによって、新たな〈問い〉の展開の可能性が示唆されることになると考えられる。この場合には、「キーワード」は元の〈問い〉の文脈からは切り離されることもあるだろうから、新たなセッションが始まると考えた方がよいだろう。

第4に、上述したキーワードの差異抽出の際、取り出されたキーワードの間で、これまでになかったような〈つながり〉をつくるということである。

そもそも〈問い〉のなかのことばの〈つながり〉は、必ずしも非常に厳密である必要はない。日頃は結びつかないような異質なことばどうしが結びつくことで、従来のディシプリン内での議論では生じ得なかった、インパクトのある〈問い〉が生まれることもありうるだろう[*2]。

このようなセッションは、かなり〈遊び〉に近い要素も出てくるであろう。研究者であっても（研究者であるからこそ）このようなことばへの感覚や感性を磨き楽しむような

2——〈問い〉とは異なるが、本プロジェクトのタイトルである「インターフェイスの人文学」の「インターフェイス」と「人文学」も通常ではつながらないことばである。

機会があってもよいのではないだろうか。

緒論でも述べたように、「人文学」の特徴としては、論理的な整合性だけではなく、異質性を乗り越えつないでいくこと（「学科横断性」）も挙げられるならば、学術論文という論理性が重視されるアウトプットと、〈問い〉をつくりだすセッションとを組み合わせることは、〈人文学〉を営んでいく新たな研究会の様式であると考えられる。

4.〈プロジェクト〉としての〈問い〉

本章を終えるにあたって、緒論での議論を参照にしながら、〈問いの共有マップ〉に掲載された〈問い〉の位置付けについて、本稿の筆者なりの考えを示してみる。この位置付けにおいて、〈人文学〉の営み（そして学知自身）のある変動が示されていることを素描したい。

（人文学に限らず）学問においては、まずその端緒に〈問い〉や〈問題〉が定立され、次いでそれに対する〈答え〉や（答えを導くための）〈方法〉が提示される。ここに、学問の基本的な活動と役割があると言えよう。他方、緒論で述べたように、人文学のいくつかの学科では一義的な答えは求められていないし、そもそも「答えがない」ような〈問い〉が設定されている場合もある。しかし、人文学も〈問い〉の探求を目標にしていると言っても間違いではないだろう。

ところが、（本COEプログラムでも明らかなように）人文学研究には、〈問い―答え〉（あるいは、〈答えのない問いの探求〉）という枠組みでは適切に表現されにくくなっている営みが生じてきているように思われる。研究の様々な局面で〈協働〉が行われ、また研究の〈デザイン〉や〈マネジメント〉が議論されるようになってきている。（コミュニケーションが研究の領野でも大きなテーマになっていることも含めて）これらの動向は、単に社会的な要請に学問研究が従っているというだけではなくて、人文学の営み自身が大きく変動しつつあることを示していると考えられる。

つまり、人文学の営みのなかには、様々な人々や事柄に関わりつつ何かを生み出し、関係を作っていく〈プロジェクト〉として捉えられる動向が生じつつあるのではないだろうか。ここでの〈プロジェクト〉は、先に述べた〈問い〉とは背反してはいない。研究にお

ける〈問い〉は知的な解明を主に意味していると言ってよいだろうが、他方〈プロジェクト〉は研究における制作的な要素や介入的な側面を指し示しているのである。〈問いの共有マップ〉のいくつかの〈問い〉なかにも〈プロジェクト〉の要素が含まれているとみなされうるであろう[*3]。ここに人文学の営みや学知の変化の1つが示されている。

このように考えると、先の〈問いの共有マップ〉は、1つのゆるやかな〈プロジェクト・ネットワーク〉を示しているようにみなされるであろう。また、(緒論で指摘されているように)「学科横断性 (transdisciplinarity)」を人文学の根本的な特徴の一つとみなすならば、人文学自身もある〈プロジェクト・ネットワーク〉として描き出すこともできるかもしれない。

ところで、〈プロジェクト〉のフランス語の動詞形は、projeterである。これは、「前に(pro)」「投げる (jeter)」ということを意味している。だが、〈プロジェクト〉としての人文学の営みは、単に前に向かっていくだけではないだろう。緒論で示された人文学のもう一つの特徴は、「反省性 (reflexivity)」であった。人文学の営みを〈プロジェクト〉として捉え直す場合でも、この「反省性」は必須の契機であると考えられる。

しかし問題は「反省性」の内実にある。すなわち、「反省性」もここ数十年のあいだに大きく変化しているのではないだろうか、ということである。

〈若手研究集合〉の研究会でも、「反省性」としては、たとえば、概念と方法の前提や各学科特有の作法 (議論の仕方や論文の書き方など) が議論されることが多かった。しかし、「反省性」は、このように前提を明らかにしていく考察や討議に限られない。「反省性」には、討議の内容を可視化したり、記録を工夫することや、研究会のアウトプットのかたちを考えること[*4]も含まれているはずである。そう考えると、「反省性」とは個人的な営為だけではなく、協働のなかで共有されつつ作り出されていくともみなされうるであろう。「反省性」がこのように共有され拡散されていく過程は、人文学の営為を〈プロジェクト〉

3——その代表的な〈問い〉は、樋上の第2の〈問い〉「(着想源への迫るための) 研究の道筋は、どのように学問・学科の領域を超えていくのか」である (加藤謙介やZhivkovaの第2の〈問い〉もそうであろう)。それに対して、たとえば家高の〈問い〉「現在の思想的批判の可能性はどこにあるのか」は〈プロジェクト〉という呼称にはそぐわないように思われるかもしれない。だが、後述するように、研究を協働していくなかにも既に〈プロジェクト〉的な要素が含まれていると考えられるのである。

4——これらの内容は、第Ⅱ部の諸論文を参照。「可視化」ということ自身、「反射＝反省」を端的に含んでいる。

として捉え直していくもう1つの理由である[*5]。

では、人文学の営為は、〈問い〉ではなく〈プロジェクト〉になってしまうのであろうか。そのようには断じられないであろう。学科横断性や協働性のために人文学の活動は今後ますます複雑になっていくであろうが、その根本にあるシンプルな動向を見極め取り出さなければ、時代の流れのなかに取り込まれてしまう。「自分たちは一体何をしているのか」ということに対して〈問い〉は常に回帰してくるのである。だが、言うまでもなく、この「見極め」のためにも様々な協働が必要なのだ。

（文責：家高洋）

5――学問における「反省性」は、西洋では元来「第一哲学」が担ってきたと言ってよいであろうが、19世紀以降「反省性」は諸学にそれぞれ分かち持たれてきて「拡散」していったと言えるであろう。この「反省性」は、1970年代以降の人類学や歴史学、社会学などでの過剰な方法論的反省においてある頂点を迎えた。（上述の）協働における「反省性」は、このような動向に対する一つの対応であるとみなすこともできる。

ディスカッション・ドラフト検討会要旨

第1回DD検討会

日時：2006年6月8日（木）14:30～17:25

提出されたディスカッション・ドラフト：

田沼幸子　ユートピア小説と民族誌

概要

2006年度の第1回目のDD検討会では、田沼幸子の「ユートピア小説と民族誌」について検討を行った。ペーパーは人類学者を含む人文学者が採るべき学問的記述のあり方を模索する試みであった。まず、発表者がマップを用いつつ、自身の議論を可視的な形で整理して再提示した。

本論では、1980年代のいわゆる「ライティングカルチャーショック」にいたる人類学の記述の歴史や、主に日本の人類学における「科学的」記述と「介入的」記述の対立の構図などが概観されたうえで、発表者はこれらの対立が研究が社会を変革する可能性をもつ、という前提に依拠している点で相同であることを指摘した。

とはいえ、介入を志向する者は、介入そのものを、科学を志向する者は、科学そのものへの信頼そのものを問うことなく、他者に関する民族誌を描く時に書いているかのように読めるという問題がある。このため、実は双方は、互いに科学か介入かへの偏重を批判しあってきていた。しかし、本来、両者は対立するものではなく、統合されることによって、相互の批判能力を高めるものであるはずである。

この陥穽を回避するものとして、17世紀から18世紀にかけての時期にヨーロッパで書かれたユートピア小説に見られる自己言及的なアイロニーを含めた書き方を、発表者はありうべき一つのオルタナティブとして示唆した。

続くディスカッションでは、人類学における記述のあり方や、研究者と研究対象との距離のとり方、研究の社会的意義について議論が交わされた。また、フランス文学を専門とする出席者からは文学研究におけるユートピア小説の位置づけに関するコメントがなされた。さらに、アイロニーという概念をめぐって、その民族誌的記述における可能性に関する質疑がなされた。ペーパーが学問的記述のあり方を問うものであったため、出席者それぞれから多彩な見解や感想が出されて、学問分野を横断する活発な議論が展開された。

（文責：上田達）

第2回DD検討会

日時：2006年6月22日（木）14:50～18:00

提出されたディスカッション・ペーパー：

家高　洋　フッサール、デリダとランシエール

樋上千寿　シャガールの作品はなぜ「あんなこと」になったのか？
芸術創造の源へのアプローチ

概要

家高論文はフランスの哲学者ランシエールの思想をとりあげたもの。まず、ポストモダンに代表される現代思想が袋小路に陥っているという認識の下、その代表者の一人であるデリダ、そしてデリダの一つの思想的基盤であるフッサールの現象学がどのようにして隘路に至ったかを詳述する。次いでランシエールの思想に、この限界を突破する可能性を見出し、政治、不和、tortといったキーワードを紹介しつつ、前2者と対比させた。但し、提出ペーパーは未完であり、ランシエールの議論がどのような論理で隘路を脱するのかについては、示されなかった。

討議では、まずデリダの脱構築を理解する前提となる、現象学についてどの程度の記述をすべきかという、初年度以来の問題に逢着したことが家高より表明された。次いで家高の元来の執筆動機である学問論に焦点が当てられたが、哲学の系譜を踏まえた「学科内での語り」に忠実な論文構成がかえって読者を混乱させるとの意見も出された。これをきっかけに「学科外での語り」の在り方に議論が及び、家高も構成の変更を検討すると応じた。

樋上論文は、キャッチーなタイトルと共に冒頭に箇条書きで要約を載せるなど、構成に

も工夫を凝らしたものとなった。論文には2つの目標がある。ひとつは、作品の背景や社会的文脈を把握することを通じて、芸術創造の源へ辿り着こうとする学問的アプローチ。2つ目は、従来のシャガール作品に対する「メルヘンチック」といった一般的イメージが生まれた理由に、作者・作品のバックグラウンドに対する無理解があるとする。正しい作品解釈のためにも、シャガール作品にみられるユダヤ的要素やユダヤ文化一般への理解が必要であり、効果的啓蒙のための方法を探ること。これは論文の構成にも現れているが、専門的研究の成果を鑑賞者と共有するための方法の模索でもある。

討議では逆に、樋上の属する美術史学界という学知の場での成果の共有が問題となり、反応を引き出すために敢えて論争的スタイルを採ることなどが提案された。次いで、レクチャー・コンサートなどこれまで樋上が試みてきた方法も含めた議論に及んだ。

いずれの論文も『学科内の論述』と『学会での語り』の違いが討議のポイントとなった。

（文責：蓮田隆志）

インターメッツォ

——DD検討会のマネジメント／報告書第I部の〈まとめ方〉についての検討——

日時：2006年7月6日（木）16:25～18:00

概要

2回のDD検討会を終え、3本のDDが議論に供されたが、若手研究集合メンバーの一部より、DD検討会の方針やDDの内容の方向性について確認を求める声が上がった。このため、2006年7月6日に開催された研究会では、個別のDDを検討するのではなく、DD検討会に提出されるDDの内容の方針について確認がされるとともに、研究会での「議論の軸」について議論がなされた。ここでは、当日に行われた様々な議論のうち、上記に限って整理を行う。

まず、DDの構成について、冒頭に、その研究のコンテクストを提示して、研究会で議論をしやすくするよう工夫を行うとともに、末尾に、（人文学全体で共有できるような）「問い」をいくつか列挙することが確認された。また、研究会での議論が目指す方向性について、当初の目的どおり「〈問い〉の共有」が重要であることが確認された。その際、〈問い〉を示す著者は、読者（他の研究会メンバー）の議論に応えるよう、開かれたかたちで〈問い〉を提示することが望ましいとされた。また、「共有」については、あるディシプリン／研究

者から発せられた〈問い〉をそのまま受け入れるのではなく、「自分ならこう考えられるのではないか」と応えることが、「共有」につながるのではないか、との議論が行われた。

（文責：加藤謙介）

第3回DD検討会

日時：2006年7月20日（木）15:00～19:05

提出されたディスカッション・ドラフト：

蓮田隆志　隴を得てまた蜀までも得てみたら——多史料時代のベトナム史研究展望

上田　達　人々をつくりあげるとはどういうことか

概要

蓮田のDDは、近年のベトナムにおける史料の大量「発見」のもとで、日本の研究者の方向性を問うものだった。蓮田は、日本の研究者たちが、これまで、地域研究に影響を受けた「現地主義・個別主義」と、一次文献への密着を通じた「実証主義」を掲げてきたことを指摘したうえで、多史料時代において同様のスタンスで成果を発表し続ければ、マイナー地域の些末な事象の追求として低い評価を受けかねないこと、そのため、爆発的に増加した史料への密着度を維持しながら、大きな問題設定につながる研究をすることが課題になっていることを指摘した。そこには、資料不足時代の研究者たちとは違う、若いベトナム史研究者たちの新たな悩みが示されていた。なお、このDDには、「論文」には載せにくいような研究者たちの人間模様を織り交ぜた記述もみられ読者の興味を惹きつけた。

討論では、一次史料の基礎研究の価値について議論された。はじめ、蓮田は学界全体のために一次史料の基礎研究が必要であると議論していたが、グランドセオリーだけでは「つまらない」という蓮田自身の感想が出るに至り、史料読解の職人芸的な価値への関心に議論の焦点が移っていった。蓮田が史料読解をレンガ造りに見立て、建物（グランドセオリー）の価値とつねに関連づけながらレンガ造りをせざるを得ないことに「うんざりしている」と述べたことが印象的であった。そのほか、一次史料の基礎研究を発表する場を確保する必要性、「地域」の縛りという人文学に共通の課題についても討議された。

上田のDDは、マレーシアにおける政府主導の住民組織ルクン・トゥタンガに取材し、「隣人」や「マレーシア国民」などのカテゴリーを作りあげるプロジェクトとして分析する

ものだった。「人々を作りあげる」(イアン・ハッキング) という問題設定から、人間の類型的分類が集団を作りあげる側面と、分類の対象が分類の仕方そのものに働きかける側面に注目した議論を展開した。上田は「隣り合うこと」をめぐる解釈の齟齬がルクン・トゥタンガの運営責任者と一般住民のあいだにあることを指摘し、「隣人」をつくりだす実践が国家の期待するような「マレーシア国民」の創生に結びついていかない現状を指摘した。

討論では、「人々を作りあげる」「想像上のものを作りあげる」という問題設定と、そういった目論見がうまく作動しない状態、いわば大仕掛けの笑劇のような現実のあいだの落差の面白さが議論された。また、マレーシアの人々が「国民」創生のための政策や愛国歌などを軽視しながらも、理念そのものには賛同しているという両義性や、先が見えていない状況の面白さなどについても意見が交換された。

(文責：加藤敦典)

第4回DD検討会

日時：2006年8月3日 (木) 14時40分～18時30分

提出されたディスカッション・ドラフト：

加藤敦典　活動中の民主主義 For democracy in action ——文化人類学からの問いかけ

加藤謙介　社会心理学における〈臨床性〉と〈インターフェイス〉
——アクション・リサーチにおける〈インターフェイス〉の設えをめぐって

概要

加藤敦典のDDでは、まず民主主義に対する人類学のアプローチの変化が説明された。現在では、各々の地域の民主主義を権力性や規範をめぐる問題として分析するアプローチが主流であり、この動向は「社会工学的」と呼ばれているが、それに対し加藤敦典は「(人)文学」的アプローチによってバランスを保つことの必要性を唱え「活動中の民主主義」という概念を提起した。これは民主主義について規範や本質から語るのではなく、絶えざるその変転のなかでそれを書き留めるというアプローチである。その例として加藤敦典は、政治的討議空間における演劇性 (しぐさ、作法、声ほか) などを挙げて説明した。

討論では、民主主義、特にその討論の場が話題に上った。加藤敦典は、問題解決のための討論よりも、討論の場自身の演劇的面白さを強調した。ここで若手研の討論と類似が指

摘された。若手研も問題解決のために討論しているのではないが、問題の所在自身の共有のために討議しているのであり、その過程に面白さがあるということであった。

他方、加藤謙介のDDでは、まず社会心理学における〈臨床性〉としてのアクション・リサーチの定義や歴史、実践例が紹介された。そしてこの学の〈インターフェイス〉が検討された。この場合の〈インターフェイス〉とは、研究者と研究対象者との〈間〉にあり、〈間〉をつなぎ、時として〈間〉をつくる事象である。その例として「概念」、(ワークショップなどの)「手法」、(防災ゲームなどの)「道具」が紹介された。最後に加藤謙介自身が関わった事例のなかでの〈インターフェイス〉と、その設え方も報告された。

討論は、主に加藤謙介自身のフィールド調査について行われた。グループ・ダイナミクスを専門とする加藤謙介は、集団、特に規範の変化に学的関心をもっているが、さらに、研究対象者たちに「もう一つ別の選択肢が見える」ようになる実践への関心も語られた。しかし、加藤謙介の関心は、問題解決的な社会工学的アプローチにあるのではなく、フィールドの出来事や事象自身の面白さが研究の主な動機になっているのであり、ここに加藤敦典との共通性が見られた。

それ同時に、この研究会では「(人) 文学」に依拠し記述をベースとする加藤敦典と、「社会科学」に依拠し理論的考察を基本的なベースにする加藤謙介とのフィールドへのアプローチの違いも判明になった。

(文責：家高洋)

第5回DD検討会

日時：2006年8月31日 (木) 14時55分～18時40分

提出されたディスカッション・ドラフト：

Stella Zhivkova	The Dilemma between "The Odd Man Out" or "The Useful Insider" — Finding One's Place under the Sun
藤本武司	ラシーヌ『ブリタニキュス』の終結部に関する一考察 ——ヴェスタ聖女ジュニーをめぐって

概要

第5回DD検討会では2本のDDをめぐってディスカッションが行われた。また、これま

での方法論を洗練させる新たな試みもなされた。

Zhivkovaのペーパーでは、祖国ブルガリアで行われた国際的なフォークソングフェスティバルにおける著者の研究と実践について報告がなされた。著者は日本から参加した音楽家らの「通訳」を任ぜられ、戸惑いつつも、研究者でありながら通訳・マネージャーとして現場に関わる自身の経験について論じた。研究会では、研究者と実践家の間を往復する、この未だ「名前のない」立場・役割について、議論が深められた。

この後、議論を通して作成された「討議支援マップ」を再構成し、「リマップ」が行われた。これは、議論の場に直接居合わせなかった人にも内容が伝えられるように、マップ内容を構成しなおすことであり、「〈人文学の討議空間〉のデザイン」の課題の1つとしても位置づけられた。

続く藤本のペーパーでは、フランス古典悲劇の大家ラシーヌの作品解釈についての論考が示された。そこではまず、著者により、フランス文学界というディシプリンにおける様々な伝統や代表的な論争について非常にわかりやすい解説が行われるとともに、研究が発展する方向性として、作品の上演場面や教育場面が挙げられた。

この回でDDを報告した両者は、音楽学・フランス文学という、いわゆる「人文学らしい」分野を専門としている。にもかかわらず、議論の内容が研究フィールドにおける研究者の役割や、研究成果の理想の発表形態といった、従来の枠組みにとらわれない議論が展開されたことで、専門外の研究員にとっても刺激的なディスカッションを行うことができた。

（文責：加藤謙介）